

みた。コーリツヂが半面の眞理に就いて説いてゐる言葉の多くは、彼等に、否、コーリツヂその人にも當嵌る様に私には思はれた。そしてゲーテの唱道した「多^多方面的」と云ふ紋所は、實にこの時代に私が自己の旗印として好んで用ゐてゐた紋所であつたのである。

私に政治上の新しい考へ方を最も深く教へ込んでくれた學者は、佛蘭西のサン・シモン派の人達であつた。一八二九年、及び一八三〇年に於て、私はそれ等の人達の書いたものに接することになつた。無論その當時は彼等はその思想發展の初期の階段にあつたのに過ぎない。それで未だその哲學をば一個の宗教に仕立上げる所までは行つてゐなかつたし、又その社會主義の體系を組織する所までも未だ行つてゐなかつたのである。彼等はその頃恰度、世襲財産の原則に批判を加へ始めたばかりであつた。私はかうした點にまで、彼等と一緒に進んで行くだけの用意は、無論未だ出来てゐなかつたのであるが、併し私は人類の進歩の自然の順序に關して、彼等が私に初めて提示してくれた総合的な見方には非常に敬服したものである。殊に彼等が凡ての歴史を分類して、組織（統一）の時代と批判（分裂）の時代となしたことは大に共鳴したのである。（彼等の云ふ所に依れば）所謂組織時代に於ては、人類は堅固な信念を以つて或る積極的な信條を受け容れる。そしてその信條は彼等の有らゆる行動に對して審判權を揮ふものであり、且つその中には多少とも常に眞理と、人間性の必要を満す順應性とを含んでゐるものである。人類はかうした影響

の下に、その信條と兩立し得る限りの進歩を遂げるものであるが、その極遂には、その信條では保ち切れない所まで發達する。さうなると爰に批判と否定との時代が現はれて来る。この時代に這入ると人類は過去の舊信念を喪失すると共に、何等普遍的な乃至は權威ある新信條を得ることもなく、唯だ在來の信條は虚偽だと云ふ信念をのみ有することになるのである。希臘羅馬の多神教が教養ある希臘人羅馬人に依つて心から信仰されてゐた限り、その時代は組織統一の時代であつたが、それに續いて希臘哲學者の批判時代、懷疑時代が來たのである。第二の組織統一の時代は、基督教の勃興と共に始まつたが、それと呼應する批判時代は宗教改革から始まつた。そして爾來今日にいたるまで繼續し、今も現に繼續して居り、恐らく更に以上進んだ信條が勝を制して、爰に一つの新しい組織時代が始まるまでは、それは全然止むことはあるまいと云ふのである。かうした考へ方は無論、サン・シモン一派に特有な考でない位のこととは知つてゐた。それは寧ろ反對に、大陸の少くとも獨逸及び佛蘭西の一般に所有せる思想的財産であつたのである。併し私の知る限りでは、これまでかうした考をサン・シモン派の人達程完全に體系化したものもなかつたし、また批判時代の著しい特質を彼等程に力強く描き出したものもなかつた様に思はれた。と云ふのは、當時私は未だフイヒテの「現代の諸特質」に就いての講演集を讀んでゐなかつたからである。尤も私はカーライルが「無信仰の時代」を辛辣に痛罵し、更に現代を以つて正に

それだとして痛罵してゐるのは知つてゐた。そして、當時大抵の人達が考へてゐた様に、私もそれをば在來の信仰形態を擁護する爲めの熱烈なる抗議に過ぎないと推定してゐたものである。それで私はこれ等の痛罵の内に含まれた眞理は凡て皆、サン・シモン派の人達に依つて一層冷靜に、且つ哲學的に述べられてゐるのだと考へてゐた。彼等の數多き述作の中でも、斬然として一頭地を抜いてゐる様に思はれるもの、そして前述の一般的觀念が圓熟して一段と明確な、且つ暗示に富んだものとなつてゐるものが一つあつた。それは即ちオーギュスト・コントの初期の一勞作のことである。彼れは當時自らサン・シモンの一弟子と名乗つて、その著作の題扉にさへもさう聲明してゐた。この論著に於て、コント氏は人間の智識の有らゆる部門に於て自然に繼起し來る所の三階段に就いて、他日氏がその夥しい例證を擧げて説明した所のあの學說をば初めて發表してゐたのである。所謂三階段とは、第一神學的階段、第二形而上學的階段、第三實證學的階段である。そして氏は社會科學は必ずこれと同じ法則に準據すべきものとなし、封建制度と羅馬正教會制度とは、社會科學の神學的階段の終末相を示すものであり、宗教改革の教義はその形而上學的階級の發端を、佛國大革命の理論はその完成を示すものであり、最後の實證學的階段は將に來らんとする時代に屬するものだと言張してゐたのである。この學說は私の現在の考とよく調和し、それに一種の科學的形態を附與してくれた様に思はれたのである。尤も私自身も既に、物的諸科

學の研究方法を以つて社會的諸科學の做すべき適當な研究方法だと看做してゐた。併し私がこの時、サン・シモン派の人達や、コントが示唆した思想系統から特に得た所の主要なる利益は、私が思想の過渡期に於ける特質をば前よりか一層明瞭に意識する様になり、過渡期の道德的智的特質を以つて、人間性そのものに付き纏つた正常なる屬性だと思ひ誤らなくなつた事である。斯くして私が竊かに抱いてゐた期待は、徒らに論争のみを事として、概して信念の薄弱な現代を通り抜けて、批判時代の精粹と組織時代の精粹とを打つて一丸となした未來の時代であつた。即ち一方には思想の無拘束な自由、他人に害を及ぼさざる限り、有らゆる形式の個人の行動の無制限な自由があると共に、他方には又正邪、善惡に關する信念が、幼時の教育と一般人類の情操の一致とに依つて、深く感情に彫り込まれ、且つ理性と人生の眞の緊要事との中に堅く基礎附けられて、従つて宗教上、倫理上、政治上の過去及び現在の有らゆる信條の如く、週期的に廢棄して、他の信條を以つてそれに代へねばならぬ様な必要のなくなる時代を、心私かに待ち望んでゐたのである。

コント氏は暨てサン・シモン派を去つた。爾來數年間、私は彼れの消息も知らず、彼れの著作にも接しなかつたのである。併し私はサン・シモン派の研究は依然として續けてゐた。私はその最も熱心な學徒の一人であるギユスターヴ・ダイヒタール氏を通じて、彼等一派の進展過程に絶

えず注意を怠らなかつたのである。同氏はその頃可成り長い間英國に滞在してゐた。一八三〇年に私はサン・シモン派の重鎮、バザールと、アンフアンタンとに紹介された。そして彼等一派の宣傳と布教との續いてゐた間、私は彼等の論文は殆ど全部讀んでゐたのである。私の見た所では、自由主義の通説に對する彼等一派の批評には、重要な眞理が多分に含まれてゐる様であつた。私有財産と遺産相続とを以つて侵すべからざる事實と看做し、生産と交換との自由を以つて社會改良の究極の標語と看做してゐる在來の經濟學の價值は、極めて局限された、且つ一時的なものであることに、初めて私の眼を開いてくれたのは、確かに一部はサン・シモン一派の書いたものの力であつた。彼等一派の人達が徐ろに展開し來つた社會組織、即ち社會の勞働と資本とが社會全體の利益の爲めに運用される様になり、各個人は皆、思想家なり、教育者なり、藝術家なり、生産者なりとして必ず勞働の分前を負担するを要すると共に、皆その能力に應じて類別され、その仕事に應じて報酬を受くる様になると云ふ社會改造の計劃は、私にはオーウェンのそれよりも、種類に於て遙かに優れた社會主義である様に思はれたのである。彼等一派の手段は如何に實効なきものであつたにもせよ、その目的は私には望ましいもの、合理的なものやうに思はれた。それで私は彼等の立てた社會の機構が必ずしも實行可能なものであるとも、又有益な作用を爲すものであるとも信じてはゐなかつたのであるが、併し斯様な人間社會の理想の宣言は、現在ある

が儘の社會を、或る理想的標準に近付かしめようとする他の人々の努力に對して、有益なる指導を與へずには置かないだらうと感じたのである。就中私は彼等が最も非難を蒙つてゐたこと、一即ち彼等が家族問題を取扱つた態度の大膽さと、その偏見に囚はれない心事とに對しては特に衷心敬意を表してゐた。蓋し家族の問題は何よりも重大な問題であり、従つて今後他の如何なる社會制度に於て行はるべき大きな變革よりも、一層根本的な變革を必要とするものであるにも拘らず、如何なる改革者も殆どこの問題に觸れるだけの勇氣を有つてゐないからである。サン・シモン派の人達は男女の完全なる同權と、男女相互の關係に就いての徹底的な新制度とを宣言した點に於て、オーウェン及びフリーエと相並んで、後世の人々から深く感謝せらるべき資格を有つてゐるのである。

この時代の自分の事を述べるに當つて、私は専ら、當時に於ても、その後にも、私の考へ方に於ける一種の轉向點となり、明確なる進展を劃してゐると思はれる様な新印象を述べる事のみ、その範圍を限つてゐた。併しこれ等少數の選ばれた點だけでは、私がこれ等の過渡期の數年間に様々の問題に就いて行つた所の思索の分量に關しては、極めて不十分な觀念しか與へない。いかにも、その多くは、世間既知の事項で、唯だ私がそれまで信じてゐなかつた、乃至は無視して顧みなかつたことを再び發見したと云ふに過ぎなかつた。併しかうした再發見も私に取つては、

實は新發見であつたのである。私はそれに依つて幾多の眞理を、單に陳腐な常套事としてではなく、實にその源泉より汲み來つた清新な眞理として完全に自分のものとなすことが出來たのである。斯くして再發見のある度毎に既知の眞理は始ど常に新しい意義を帯びて來ることになり、それが爲めに、世間周知の眞理も私の初期の思想の中にあつた所の比較的一般には知られてゐない眞理と調和し、且つそれを修正すると共に確實にもする様に思はれたのである。尤も初期の思想に修正を受けたとは云へ、その本質に於ては如何なる時と雖も何等の動搖もなかつた。要するに私の新しい考へ方は、これ等初期の思想の基礎を一層深く一層強固にしたままで、同時に間違つた結果を生ずる誤解や、思想の混亂をも時々は除去してゆくたのである。例へば、私の憂鬱状態が後日再發した時のことであるが、所謂「哲學的必然論」と云はれてゐる學說が、夢魘の如く私の生存を壓迫して來たことがあつた。當時私は、自分は畢竟過去の諸事情の無力な奴隷たるに過ぎないと云ふことが科學的に立證されたかの如き心地がしてゐた。即ち私の性格も、他の凡ての人々の性格も、實は吾々の力では如何ともし難い或る力に依つて形作られたもので、吾々の力を全然超越したものであるかの如くに感じたのである。私は時々、若し私が性格は境遇に依つて形作られるのだと云ふこの説を否定することが出來たら、どんなに心が寛ろくだらうかと獨言を云つたものである。私はフォックス(譯者註、英國第十、八世紀の政治家)が、政府に對する反抗權が人民に在ると云

ふ學說に關して、「君主はそれを忘るゝなく、國民はそれを記憶するなからんことを」と云つたあの願ひを思ひ起して、凡ての人々が他人の性格に關しては必然論を信じ、自己の性格に關してはそれを否定する様になれば、如何に幸福であらうかなども考へたのである。私は随分この問題に就いては頭を悩ましたのであるが、その中途に一道の光明を、漸く認める様になつて來た。即ち私は、「必然」と云ふ言葉は、因果論を人間の行爲に適用した場合の名稱としては、誤れる聯想を伴ふものであり、私が經驗した所のあの壓迫的な、麻痺的な影響の原動力は實にこの聯想に外ならないことを悟つたのである。成程吾々の性格は環境の所産物ではあるが、さうした環境を形作るのに與つて大に力あるものは實に吾々自身の欲求なのである。自由意志の説が眞に人を感奮興起せしむる所以のものは、吾々が自己の性格形成に對して眞の支配力を有つてゐると云ふ信念に存する。吾々の意志は、吾々の境遇の一部分を左右することに依つて、將來に於ける吾々の習慣、乃至意志の發動力に變化を與へることが出来る。私はさう云ふ風に見たのである。かうした見方は所謂環境説なるものとは決して矛盾するものではない。否、寧ろこれこそ眞の意味に於ける境遇説そのものなのである。それ以來、私は心の中で境遇説と宿命説とを明確に區別して、「必然」と云ふ誤られ易い言葉はこれを全然用ゐないことにした。斯くして私が初めて正當に理解した所のこの學說は、もう全然私の意氣を沮喪せしめることはなかつた。否、實に私の元氣を

引き立ててくれたばかりでなく、由來思想の改革者を以つて任ずる者に取つて、常に輕からぬ重荷となつてゐる所の一學説を眞理だと思ひながらも、その反對の學説を道徳上有益だと認めればならぬ苦痛からも、私は免れることが出来たのである。かうしたデレンマから私を救ひ出してくれた思索の筋道は、他日他の人達に對しても、充分同様な作用を爲すことであらうと思はれたので、それは今私の「論理學體系」の最後の卷である「自由と必然に就いて」の一章となつてゐる。更に政治の方面に於ても、私はも早や、父の「政治論」に表はれた學説を一個の科學的理論として認容してはゐなかつた。私は代議制民主政治を以つて絶對的の原則と看做すことは止めて、それを一個の時處位の問題として考へる様になつてゐた。又政治上の諸制度の孰れを選ぶべきかと云ふ事も今では、物質的利害の問題としてよりか、寧ろ道徳上、教育上の問題として見るべきもの、即ちそれは主として、當該國民の今後の進歩の要件として、生活と文化とに於て第一着に爲すべき大改善は抑も何であるか、又如何なる制度がさうした進歩を促すべき可能性を最も多分に有つてゐるかと云ふことを考慮して決定さるべきものだと考へてゐた。併し斯く私の政治哲學の前提には大なる變化を來したにも拘らず、それは私が現時代に對し、我國に對して感じてゐる要求に關する實際政治上の信條には、何等の變化をも與へなかつたのである。私は歐洲に對して、殊に英國に對しては、前と同様依然として急進主義者であり、民主主義者であつた。私は英國憲

法に於ける貴族階級、即ち貴族と富豪との優越的存在を以つて、如何程の苦悶を重ねても打破しなければならぬ害悪だと考へてゐた。それは租税だとか、その他さうした比較的些細な不都合がある爲めではない。それは實に國民墮落の一大原動力であるからである。その理由は第一に貴族階級の優越は、國務に於て公利よりも私利を重じ、且つ階級の便益の爲めに立法權を濫用する事に依つて、政府の行爲をして白晝公然悖徳の一模範たる觀あらしめてゐるからである。第二に、更に甚しきは、國民大衆の尊敬は何時でも、主として現在の社會状態に於て、權力を得る主要な通行券であるものに向けられるものであり、そして英國の現制度の下に於ては、世襲たると自力を以つて得たるとを問はず、凡て富が政治上の權力の殆ど唯一の源泉である所から、眞に尊敬せられる物としては、殆ど富と富の看板とにのみ限られることになり、従つて國民の生命は主としてそれ等の追求にのみ獻げられてゐるからである。私の考に依れば、貴族富豪階級が政權を掌握してゐる間は、國民大衆の教育と改善とは、それらの階級の私利に反するのである。それは羈絆を脱せんとする國民の力を、益々大ならしむる傾向があるからである。併し若し民衆が政權の大きな、恐らく主要な分前を獲得する様になつたならば、眞に有害な謬見、殊に財産の不當なる侵害を惹き起す様な謬想を防遏する爲めに、寧ろ民衆の教育を促進することか、富裕階級の利益となるであらう。私はさう考へたのである。かうした立場から、私は實に從來通り熱心に民主主義

的制度を主張したばかりではない。更に一步を進めて、オ・ウエン主義や、サン・シモン主義や、その他有らゆる私有財産否定説が、貧民階級の間にも広く普及すればよいと眞切に希望してゐたのである。但しそれは私がそれ等の説を眞理だと考へたからでもなく、又それ等の説が實現されることを希望してゐたからでもなかつた。それは貧民を教育せずには置く時は、教育した時よりも一層恐るべきものがあることを、土流階級の人達に呑み込ませようと云ふ意圖からであつた。

佛國七月革命は實に私がかうした心持にある時に勃發したのである。私は極度の熱情を喚び起された。謂はば一種の新生命を興へられたのである。私は直ちに巴里に赴き、ラファイエットに紹介された。そしてその後私が極左民衆黨の領袖數氏と續けてゐた親交の基は、實にこの時に拓かれたものである。巴里から歸つてから私は、筆を掲げ、當時の政論壇上に、一種の熱を帯びて立つた。雖てグレイ卿内閣の出現となり、選挙法改正案の提出となつて、政論界は更に一段の氣勢を高めて來た。それから數年間と云ふものは、私は随分澤山の論文を新聞に書いた。「エギザミナー」紙に暫らく政治論を書いてゐたフォンプランクが、遂に同紙の社長兼主筆となつたのは、恰度この頃のことであつた。彼れがグレイ卿執政時代を通じて、如何に熱情と、才幹と、華やかな機智とを以つて同紙を經營したか、又同紙が急進派の思想の主なる代表機關として、新聞界に如何に重要な位置を占めてゐたかと云ふことは、今尙世人の記憶に新なる所である。同紙の

放つてゐた異彩は、全然彼自身の論文に依つて興へられたもので、彼れの論文は同紙に載せられた凡ての獨創的論文の少くとも四分の三を占めてゐた。併しその残りの四分の一の中で、その年月の間、誰にも優つて一番多く寄與したのは實に私であつた。佛蘭西の問題に關する論文は殆ど皆私が書いた。就中佛國政界の週録を書いたのであるが、時には随分長文に互つたこともあつた。同時に又一般政治や、商業的財政的方面の立法や、その他自分でも興味を覺え、同紙にも適當だと思はれた雜多な題目に就いて、幾多の社説を書いた。そして時々は新刊批評にも筆を執つた。時事や時の問題に關する單なる新聞の論説では、何等一般の思考様式を展開する機會を興へてくれなかつたが、併し一八三一年の初め頃に「時代精神」と題する續き物の論文で、自分の新思想の一部を發表し、殊に現代の特質の中で、既に崩壞した所の舊思想體系から、目下漸く形成過程にある所の新思想體系への過渡期を特色附けてゐる様々の變態的現象や弊害を指摘しようとして試みたのである。想ふにこれ等の一連の論文は、文章もゴツ／＼してゐたし、且つ活氣と力にも缺けてゐたので、平常でも到底新聞の讀者には受けられさうにもなかつたのであるが、よしそれがもつと人を引き付ける様な書き振りであつたとしても、目の前に政治上の一大變革が差迫つて、誰れもさうした方面に注意を奪はれてゐたあの當時にあつては、これ等の論文は決して時節向ではなかつたので、全然手答へがなかつたのである。私の知る限りこの論文の齎らした唯一の效

果と云へば、當時蘇國の片田舎に住んでゐたカーライルが獨りそれを讀んで、「爰に神祕家も
 う一人ある」と獨語して、(それは後に彼れが私に話したことであるが)、その秋ロンドンに來た
 時、その筆者に就いて聞き合せたと云ふことであつた。そしてこの穿鑿こそは纏て私達が親しく
 相交はるに至つた直接の原因なのである。

カーライルの初期の論文が、私の幼時の偏狹な思想を擴大する上に與つて力あつた水路の一つ
 であつた事は既に述べた所であるが、併し私はそれ等の論文それ自體だけならば、私の思想には
 何等の影響もなかつたらうと思ふ。カーライルの文章の中に含まれた眞理は、私が既に他の方面
 から攝り入れてゐた眞理と、正に同種のものであつたが、それ等は孰れも皆私の受けた様な訓練
 を受けた人達には最も近づき難い形態と衣裳とを着けて提出されてゐたものであつた。それ等は
 全で詩と獨逸の形而上學との一抹の靄の様なものであつて、その中殆ど唯一の明瞭な點とも云ふ
 べきものは、私の思惟様式の根柢であつた諸思想、——即ち宗教に對する懷疑主義や、功利主義
 や、境遇説や、民主主義、論理學、乃至經濟學を重要視する傾向やの大部分に對する強烈なる敵
 意より外には見えなかつたのである。私はカーライルから始めて教へられたと云ふべきものは一
 つもなかつた。私が彼れの文章に眞理を認めたのは、實は私が私の心的素質にもつと適合した別
 の仲介者を通じて、同一眞理を認める様になるに従つて、それに準じて行つたと云ふのに過ぎな

かつたのである。成程一度その眞理を認めると、彼れがそれを表現する上に用ひたその驚くべき
 力は、如何にも私に對して深刻な印象を與へ、私は長い間彼れの最も熱心な嘆美者の一人となつ
 たのであるが、併し彼れの文章が私に與へた効果は哲學として私を教へるのではなく、詩として
 私に力を與へることであつた。私達の交際が始つた頃ですらも、私は彼れの全幅を理解する程に
 は未だ私の新しい考へ方に於て進歩してゐなかつたのである。その證據には、彼れが恰度その頃
 書き上げたその最大の名著「サーター・リザータス」の草稿を私に見せてくれた時に、私は殆ど
 その價値を認識し得なかつたのである。尤も二年程後に愈々それが「フレイザーズ・マガジン」
 誌に連載され出した時には、私はそれを熱烈なる讚嘆と強烈なる歡喜とを以つて讀んだものであ
 る。私達二人の哲學には根本的に意見を異にするものがあつたが、それでも私は矢張りカーライ
 ルとの親交を求めるところを止めなかつたのである。彼れは纏て私がその所謂「もう一人の神祕
 家」ではないことを發見した。私は自己の立場を明かにする爲めに、私の思想の中で彼れが最も
 忌み嫌つてゐると思はれた考を皆、まけて書いて遣つた時に、彼れの返事に、吾々二人の主な
 る相違は、私が「未だ意識的には少しも神祕家でない」點だと云つて來た。彼れは一體何時頃、
 私が神祕家となる運命を有つてゐると云ふさうした期待を放棄したものか、私は知らない。併し、
 お互の考にその後随分變化を來したにも拘らず、私達の思惟様式の開きは、交を結んだ初め頃の

開き以内に狹まることは遂になかつたのである。斯く云ふものの、私は自ら決してカーライルを充分に批判するだけの能力ある者とは考へてゐない。私の感じた所では、彼は詩人であるが、私はさうではない。彼は直覺の人であるが、私はそれでもない。彼は實に直覺の人として、實に、私が他人から摘示されて初めて「ユツ／＼」と探がし廻つて、やつと證明し得る様な事柄を随分澤山、私に先んじて見てゐたばかりではない。更に、恐らく彼は、私が他人から摘示された後でさへも見得ない程の物までも見ることが出来たらしい。私は横から彼の側面をすらも全部は見得ない、況して上から彼の全幅を大觀することなどは尙更出来ないことを承知してゐた。それ故に私は彼れを多少とも明確に批判しようなどとは思ひも及ばなかつたのである。私に彼れなるものが、私達二人よりも遙かに優れた人、——彼れ以上の詩人であり、私以上の思想家である人、——その人の理智も天性も彼の理智と天性とを包容して優に餘りある所の人、(譯註、カーライル夫人のこと)その人に依つて解いて開かされるまでは。

私が以前から知つてゐた有識階級の人達の中で、現在共鳴點を最も多く有つてゐた人は兄のオースチンであつた。既に述べた通り、彼は何時でも吾々が最初の問有つてゐた宗派心に反對してゐた。そして後には、私と同じ様に新思想の影響を受ける様になつたのである。彼れは倫敦大學(今のユニヴァーシティー・カレッジ)の法學教授に任命されたので、講義準備の爲め暫らく獨

逸のボン大學に留學してゐたのであるが、獨逸文學や、獨逸人の性格や、その社會狀態などの感化は、彼れの人生觀に極めて明かな變化を惹き起したのである。彼れの爲人は非常に柔か味を帯びて來た。これまでの戰鬪的な、論争的な風格は薄らいで來た。その趣味も詩的な、瞑想的な傾向を示し始めた。彼れは外的變化に對しても、それが内的本質の開發進展を伴はない限り、以前程にはそれを重要視しなくなつて來た。彼れは英人の生活の一般に低劣なこと、博大なる思想と沒我的欲望の缺如せること、英人の上下を通じて熱中してゐる目的の低級な事などに對して強烈な反感を有つて來た。英人が一般に關心してゐる様な公益なるものに對してすらも、彼れは殆ど價値を認めてゐなかつたのである。彼れは普魯西の君主政體の下に於て、英國の代議政體の下に於けるよりも、實際上遙かに善政が行はれて居り、凡ての階級の國民の教育と心的發達とに對して、遙かに深い注意が拂はれてゐる(いかにもその通りである)と考へてゐた。更に彼れは佛蘭西の經濟學者達と同じく、善政に對する眞の保障は「啓蒙された人民」であり、そしてそれは必ずしも常に民主的制度的結果ではなく、若しそれが民主的制度に依らずして、得られることが出來るとすれば、この「啓蒙された人民」は民主的制度よりも遙かに優れた作用を爲すものであると云ふことを信じてゐたのである。彼れは選舉法改正案には無論賛成してゐたのであるが、同時にそれは、多くの人々の期待してゐる様に、直ちに政治の大改善を齎らすものではないと云

ふことを豫言してゐた。又事實も彼れの豫言通りであつたのである。この様な政治上の偉業を爲し得る程の人物は英國にはゐないと彼れは云つてゐた。彼れと私との間には、彼れが攝入れた新思想に於ても、彼れが依然保持してゐた舊思想に於ても、共に幾多の共鳴點があつたのである。彼れは私と同様に、飽くまでも功利主義者としての立場を棄てなかつた。そして彼れは獨逸人を愛し、獨逸文學に悦びを味ひ乍らも、遂にその先驗主義の形而上學には少しも賛同する様にならなかつたのである。併し彼れは、謂はば一種の獨逸の宗教とも云ふべきもの、即ち殆ど何等の成立教理をも有たない一種の詩と感情との宗教をば益々研究して行つた。同時に政治に於ては、(爰が私が彼れと意見を最も異にしてゐた點であるが)、彼れは民主制の發達に對して、殆ど輕蔑に近い程の無關心の態度を取るやうになつたのである。但し彼れは社會主義の發達に對しては喜んでゐた。それは民衆を教育して、彼等の物質的狀態を永久に改善する眞の手段としては、自分達の人口を制限するより外に途なきことを彼等に肝銘さす政策を、時の權力階級に強要するのに最も有效な手段だと見たからである。加之、彼れはその頃には社會改善の究極の結果として見た社會主義それ自體に對しても、決して根本的には反對してゐなかつたのである。彼れは彼れの所謂「經濟學者の人間性の普遍的原則」(譯者註、人間の利己的傾向のこと)なるものに對しては極端な輕蔑を表明してゐた。そして「人間性の異常なる柔軟性」(譯者註、被教化の可能性のこと)（これは曾て或る場合に私が彼れから借

用した言葉であるが)に就いて歴史や日常の經驗が幾多の證據を提供してゐることを主張してゐた。更に又彼れは社會的、教育的影響が啓蒙的指導を與へた場合、人類の内に展開し來る所の道徳的可能性には、明かなる限界を附することは出来ないことさへも考へてゐたのである。果して彼れが凡てこれ等の考をば死ぬるまで保持してゐたかどうかは私は知らない。併し彼れの晩年の考へ方、殊に彼れの最後の考へ方は、この時分に抱いてゐたそれよりも、全體の特質に於て、遙かに保守的であつたことだけは確かである。

この頃、私は自分が父の思想や感情の色調から大分懸け離れてゐる様な感じがした。尤も若し双方が腹藏なく冷靜に説明もし、再考もしたならば、或は私の感じてゐた程の距りは事實ないことが明かになつたかも知れないと思ふ。併し父は主義の基本點に就いて、冷靜な腹藏なき説明を交換することの出來さうに思はれる人ではなかつた。尠くとも彼れが、或る意味に於て自分の幕下から脱走した者と看做しさうな人とは、さうした談合の出來さうにない人であつた。幸にも私達は當面、政治問題に就いては、殆ど常に意見が一致してゐた。而かも又さうした問題が父の興味と座談との大部分を占めてゐたのである。それで私達が意見を異にする思想上の事項に就いては、私達は殆ど談し合ふことはなかつた。父は、私が獨りで思索する習慣——それは父の教育法に依つて養はれたものであるが、それが時としては父と異つた考を私に抱かしむる源であつたこ

とを知つてゐた。そして私が必ずしも常にその相違の程度を明言しなかつたことにも折々は氣付いてゐたのである。私は私達の意見の相異を議論し合つた所で、唯だ双方心苦しさを感ずるばかりで、何の益もないと思つてゐた。それ故に私は、父が何か私の思想若しくは感情に全然反對なことを、それをもし私が黙過するならば、私の方が不正直の罪を犯すことになる様な口調で公言した場合の外は、全然意見の相異は口にしないことにしてゐたのである。

さてこの年月の間に私が書いたものに就いての話が残つてゐる。それは新聞への寄稿を別にしても、可成りの分量であつた。私は一八三〇年及び一八三一年に、五篇の論文を書いた。それは後に「經濟學の若干の未決問題に就いて」と云ふ表題で出版したものであるが、一八三三年に第五の論文を一部修正した外は、殆ど今の儘である。これ等の論文は直ぐ出版する積りで書いたものではなかつた。そして數年の後に、或る出版書肆に相談して見たところが、斷られた。そんな譯でこれが本になつたのは實に一八四四年のことであつて、實に「論理學體系」の成功後のことである。私は又この論理學の問題に就いても再び思索を始めた。そしてこの方面の先人諸氏と同様、私も一般の推論に依つて新眞理を發見すると云ふ大逆説には少なからず頭を悩ましたものである。現にさうした事實の存することは疑ふべくもなかつた、又同様に、有らゆる推論は要するに三段論法に歸着すると云ふことも、又如何なる三段論法に於ても、結論は實は既に大小前提の中に包

含されてゐるといふことも殆ど疑ふ餘地はなかつたのである。然らば、斯様にその前提の中に既に包含されてゐる所の結論が、どうして新眞理たり得るか。例へばその定義や公理とは一見極めて相違せる幾何學の定理が、どうしてその定義や公理の中に凡て包含され得るか。この疑問は私の考では、これまで何人も充分徹底して感じたことのない、兎も角その解決には成功した者のない所の難問題であつたのである。ホエトレイヤ、(譯者註、リチャード・ホエトレイ(一七八七—一八六三)は英國の神學者であるが、一八二五年頃「大部百科辭典」の編めに書いた論理學及び修辭學の著がある)、その他の人々の與へた説明は、如何にも一時的の満足は與へるかも知れないが、私の心では依然としてこの問題には常に一抹の霧がかゝつてゐる様に思はれたのである。然るにデュガルド・スチュアートの第二卷の中の(譯者註、(一七五三—一八二八)英國の哲學者で、エジンバラ大學の數學で第一卷は一七九二年、第二卷は一八一四年、第三卷は一八二七年に現はれたものである) 推論に關する諸章を再三熟讀して、いち／＼の論點に就いて自問しつゝ、そこに示唆されてゐる思惟の問題をば、私の智識の及ぶ限りいち／＼究明してゐた時に、私は遂に、推理過程に於ける定理の使用に關する彼れの一考察に行き當つたのである。その考察は前に讀んだ時には一向氣付かなかつた事であつたが、今つく／＼これを讀んで熟考して見ると、それは實に公理に就いて眞であるばかりではなく、如何なる一般的命題に就いても眞であり、従つて難點全體を解決すべき鍵鑰であるかの様に私には思はれたのである。私の論理學第二卷に詳述してある三段論法の理論は實にかうした思想の胚珠から發芽して來たものであつた。

それで私は取り敢へずそれを書き留めて、文章に纏めて置いた。かうなると、多少の創見と價値とを有つた論理學の著述が出来さうな見込も段々増して來たので、私は前にあら方作つて置いた不完全な草案を土臺にして、進んで論理學の第一卷を書き始めた。かうして書いたものが、後日の論著の第一卷の基礎となつたのである。但しそれには「類別論」は含まれてはゐなかつた。この理論は第三卷の結末の數章の中の問題を解決しようとして初めて試みた時に、類別論に依らなければ解決し難い諸難點に逢着したので、それに示唆されて後から書き添へたものである。爰まで來て、私の思想の歩みは一時停頓した。それは五年間も續いたのである。私は全然行き詰つて了つた。即ちこの時私は「歸納法」に就いて何等満足な解決を得なかつたのである。私はこの問題に解決の曙光を與へてくれさうな書物は何でも續けて讀んだ。そして出來得る限りその結果を利用した。併し長い間、何等思索の重要な鑛脈を開いてくれさうなものは一つも見付からなかつたのである。

一八三二年に私は「テイツ・マガジン」誌の第一輯に數篇と、「ヂューリスト」と云ふ年四回の雑誌に一篇の論文を書いた。この「ヂューリスト」と云ふ雑誌は、辯護士や法律改正の首唱者より成る一團の同志者が創刊して暫らく經營してゐたもので、同人の中には私の友人も數名あつた。件の論文は法人と寺院財産とに關する國家の權利と義務とを論じたものであつて、今では

「評、論、と、論、策」と云ふ論文集の第一篇になつてゐる。尙この論文集には「テイツ」誌に出した論文の一つである「通貨の手工品」と云ふのも出てゐる。これ等の論文より以前に書いた澤山の論文の中には、再び印刷に付して世に残すに足るだけの永久的價値を有つたものは一つもない。「ヂューリスト」に掲載した論文は實は私は今でも尙、(寄附行為に基く)基本財産に對する國家の管理權に關する極めて完備した議論だと思つてゐるものであつて、私の意見の兩面を表したものである。即ち一方私は平素の持論通り、有らゆる寄附財産は凡て國家の財産であつて、政府はそれを管理する權利があると共に、又管理すべき義務もあると云ふ説を固く主張してゐるが、他方、又私が曾て主張してゐた様な、寄附財産そのものを否定して、それは寧ろ國債の償却に當るべきものだ云ふ舊主張は採つてゐない。寧ろその反對に、私は、市場の單なる需要に左右されない所の、云ひ換へれば、普通の親達の智慧や分別には左右されない所の教育施設、即ち教育と云ふ商品の購買者たる親達から自發的に需要されさうな教育よりは、遙かに高い標準の教育を確立し、維持する爲めの教育施設に對する資金を用意することの重要性を極力強調したのである。そして私がその後引き續いて行つた考察も皆、凡てこれ等の意見を裏書きし、且つ益々強めることになつたのである。



Mrs John Stuart Mill

第六章 一八三〇年——一八四〇年

生涯の最も貴き交りの始まり・父の死・一八四〇年に至るまでの著述
その他の事象

私の心的發達が恰度この點まで發達した頃は、私は一人の友人を得たのである。この交りこそは、私が人類の進歩改善の爲めに、今日までも試みて來たし、又今後とも實現して見度いと思つてゐる有らゆる企圖の大部分が流れ出て來た源泉であると共に、實に私の生存の光榮でもあり、又主なる祝福でもあつたのである。二十年の間友人としての交りを續けて後、遂に私の妻となることを承諾してくれたその婦人に、私が初めて紹介されたのは、一八三〇年のことであつて、當時私は二十五歳、彼女は二十三歳であつた。それは詰り彼女の夫の一家と舊交を温めたのであつた。その夫の祖父は元ニューイングトン・グリーンで恰度私の父の家の隣家に住つてゐたので、私は子供の頃には時々招かれて、その老紳士の庭園で遊んだものである。この老紳士は蘇國の昔氣質の清教徒の好真型であつて嚴格で、峻烈で、恐ろしい人ではあつたが、一面子供に對しては極め

てやさしい人であつた。總じてかうした人物は、子供に對しては、忘れ難い印象を残すものである。私とテラー夫人との關係が、親密とか昵懇とか云つた程のものになつたのは、夫人に紹介されてから數年経つてのことであつたが、私は直ぐ彼女は私の知友の中で最も敬服すべき人物だと云つた感じがしてゐたのである。尤も彼女が初めから、後年大成した彼女その儘であつたと想つてはならない。誰れだつて、私が初めて彼女に會つた時位の年頃では、それは到底あり得る筈のものではない。殊に彼女の場合は決してさうではなかつた。彼女に取つては、自己改善、即ち最高の、且つ有らゆる意味に於ける進歩と云ふことが、彼女の天性の法則であつた。それは詰り一つには、彼女が進歩を追求する熱意からと、も一つには、一つの印象乃至經驗を得た以上、それを以つて自分の智慧を向上せしむる源若しくは、よすがとして利用せずには置かないと云つた様な心的能力の天成の傾向からの双方から生じた必然の結果であつた。尤も私が初めて彼女に會つた頃まではその豊かな力強い天分も、主として天才婦人の月並の類型に隨つて現はれてゐたと云ふに過ぎなかつた。彼女と通り一遍の交際をしてゐた人達に取つては、彼女は麗人であり、才媛であり、彼女に接した人は誰れでも感じたその自然に備はる一種の氣品を有つてゐた。併し內的にその胸底にまでも觸れて交はる人達に取つては、彼女は感情の深く強い、智力の透徹して直覺的な、天性の著しく瞑想的で詩的な婦人であつた。彼女は年若うして結婚した。その夫は自由

な思想を有ち、立派な教育のある、極めて方正にして勇敢、且つ誠實な人であつた。そして始終一貫彼女の愛情こまやかな友であり、彼女も亦彼れに對しては生涯心からの尊敬と強い愛情とを有つてゐたし、彼れの死んだ時彼女の悲しみは最も深かつたのであるが、併し彼れには智的、乃至藝術的好尚が全然缺けてゐたので、到底彼女の會心の伴侶たることは出来なかつた。のみならず一般に婦人として社會的に立働くことが許されてゐない所から、彼女に如何に高度の能力があらうとも、彼女はそれを外部の社會の活動に於て充分に發揮することの出来ない境遇にあつた。それで彼女の生活はおのづから內的な瞑想の生活であつて、少數の友人と昵懇な交際をする位のこと、僅かにその單調が破られるのに過ぎなかつた。その狭い交友の中でも、天才ある人、若しくは感情や智力に於て彼女に匹敵するだけの能力を具へた人とも云ふべきものは唯だ一人（それはもう疾くに亡き人であるが）しかなかつた。併しその他の人達とても、感情や思想に於ては皆多かれ少かれ、彼女と共鳴する所はあつたのである。私は好運にもかうした少數の友垣の中に入れられたのである。そして私は直ぐに彼女が様々な卓越した性質——それ等の内の一つだけでも有つてゐる人は不幸にしてこれまで殆ど他に見當らない程優れた性質を、彼女はいくつも一身に兼ね備へてゐることを見出したのである。有らゆる種類の迷信（その中には、自然及び宇宙の秩序に完全なる意圖があると看做すそれをも含めて）よりの完全なる解放と、既成の社會制度の

尙一部を形作つてゐる幾多の事物に對する眞剣な反抗とは、彼女に在つては、冷かな理智の働から來たものではなく、實に高貴なる感情の作用から生じたものであつて、従つてそれ等は極めて敬虔な天性と相並んで彼女の心の中に存在してゐたものである。氣性や性質のみならず、一般の精神的特質に於ても、私は屢々その頃の彼をシェレーに擬したことがあつた。併し思想や智力の方面に於て、シェレーがその短い一生の間に、伸ばし得ただけの力をば、彼女が結局到達した所のものに較べて見ると、彼女は實に一介の少年に過ぎなかつたのである。思索の最高の領域に於ても、日常生活の些々たる心使ひに於ても、等しく彼女の智力は、事柄の核心、その眞髓に透徹して、常にその本質的觀念乃至原則を把握する所の完全なる利器であつた。彼女の智力には固よりのこと、その感覺力にも行き渡つてゐた所のあれだけの働の正確さと敏速さとがあつたならば、その天稟の感情及び想像力と相俟つて、彼女は一個の玲瓏透徹した藝術家ともなるに適したであらう。あれだけの熱烈で、而かも柔しい魂と、あれだけの力強い辯舌とがあつたならば、彼女は確に偉大なる雄辯家ともなつたのであらう。又あれだけの人間性に就いての深い理解と、實生活上の分別と聰明とがあつたからには、若しもさうした方面で身を立てる道が婦人にも開かれてゐる世の中であつたならば、治者として高名の人ともなつたのであらう。併し彼女のさうした智的天稟も實は唯だ、これまで私が出會つたこともない程高貴な、而かも同時に釣合のよく取れたそ

の道徳的品性の發達を助長するに止まつてゐた。自己の利害に超越した彼女の無私の心事も、人から教へられた義務の體系から來たものではなく、他人の感情と全然一體となる所のその心情から迸り出たものであつた。従つて往々にして自己の感情の強さを想像的に他人のそれに推し及ぼして、爲めに他人の感情を思遣り過こす様な場合もある程であつた。正義に對する熱愛は恐らく彼女の最も強い感情であつたとも考へられるが、併し實はそれにも増して強烈な感情は、彼女の底知れぬ寛大さと、情を徒にせぬ人には誰れにでも惜みなく瀆ぐ所の彼女の慈愛心とであつたのである。その他の彼女の道徳的特質は、かりしたたちの智力や感情におのづから伴ふ類のものであつた。即ち最も氣高い矜持と結び合つた最も純眞な謙遜、凡てそれを受くるに相應はしい人達に對する無上の誠意と天眞の流露、何事によらず凡て卑屈にして怯懦なるものに對する極端なる輕蔑、行爲及び品性の殘忍暴虐、乃至不義不信の一切に對する燃ゆる如き義憤、併しそれと共に又「本來の悪行」と單なる「禁ぜられたるが故の悪行」との間に——即ち感情や品性に内在する眞の邪惡を立證する様な行爲と、善惡孰れでも唯だ憤行を破つたと云ふに過ぎない行爲、——云ひ換へれば破つたことそれ自體の正邪は別として、兎に角他の點ではどこから見ても愛すべき、若しくは敬すべき人物に依つて行はれ得る可能性を有つた單なる違犯に過ぎない所の行爲との間に、最も明確な區別を立ててゐたことであつた。

これ等の美質を有つた人といくらかでも心の交りを爲し得ると云ふ事は、私の心の發達の上に極めて有益な影響を及ぼさずには置かなかつた。尤もその影響は極めて徐々たるものに過ぎなかつたので、彼女の心的進歩と私のそれとが結局なつた様に完全に足並を揃へて進んで行く様になる迄には、尙幾多の歳月を要したのである。私が彼女から受けた利益は、私が彼女に與へた思想的直覺に依つてその意見を形作つた所の彼女と雖も、研究と推理とに依つて多くの同様な結果に到達してゐた私から、必ずや猶ほ幾分の奨励と助力とを得たに相違ない。如何なる事象でも、それを化して智識となした所の彼女の心の働と雖も、その急速なる智的發達の道程に於て、他の方面から取入れたと同様に、必ずや私からも猶ほ幾多の材料を取入れたに相違ない。私が彼女に負ふ所のものは、智的方面だけでさへも、詳しく述べたならば、殆ど際限がない。次に簡単に述べることとは、その一般の特質に就いて、極めて不完全ではあるが、多少の概念を與へる事にならう。

抑も、凡ての最も善良にして且つ最も賢明な人達のやうに、あるが儘の人間生活に不満を感じ、その根本的の改善と云ふことが自己の情意の全部を蓋うてゐる人達に取つては、妄に二つの主要なる思想の領域がある。その一つは究竟の諸目的の領域、云ひ換へれば人間生活の實現され得る限りの最高理想を構成する諸要素の領域である。今一つは當面に役立ち且つ實際に企及し得られ

る諸目的の領域である。私はこれ等兩方面に於て、凡ての他の人々から得たものの合計よりも、更に多くのものを彼女から教へられたのである。そして實を云へば、眞の確實なるもの存するものは、主としてこれ等の兩極端に於てである。處で私自身の強味は、全然その不確實な、飄忽的な中間の領域、即ち理論の領域、詳しく云へば倫理學と政治學との領域にあつたのである。そして私が先人から繼承し、若しくは自ら獨創した形式の孰れに於ても、——即ち經濟學なり、分析心理學なり、論理學なり、歴史哲學なり、その他孰れの學問に於ても、それ等の結論に關して、私が彼女から賢明なる懷疑的態度を學んだ事は、智的方面に於て私が彼女に負うた恩惠の最も大なるものである。さうした懷疑的態度は、一面私が自分の思考力を正直に働かせて、その結果如何なる結論を得ようとも介意することなく研究を續けて行くことを妨げなかつたと同時に、他面私をしてそれ等の結論を、斯様な思索の本質上保障され得ない程までも強い確信を以つて、支持し乃至は公言することを憚るだけの用心をも爲さしめ、以つて私の心をして、自分が最も沈潜して來た問題に就いてすらも、一層明白な見解、一層確實な證明が得られさうな見込のある説に對しては、啻にそれを認容するだけの雅量をも有たしめたのみならず、寧ろ進んでそれを歡迎し、熱心に追求するだけの良心性をも有たしめたのである。私の著作を私と同じ位におほまかな概括辯を有つた大抵の思想家の著作に較べると、私の著作の中に比較的多分の實行可能性が存在する

と云ふので、私はこれまで度々人の賞讃を博したものであるが、併しさうした讃辭を享ける権利は、私自身には實は一部分しかないのである。かうした長所の認められ得る著作は、決して一人の心の作り出した勞作ではなくて、實は二人の心が融け合つて出来たものであつた。そしてその二つの心の中の一つは、遼遠の未來に對する見通しに於て、高遠にして且つ大膽であると共に、當面の事象の判斷と認識とに於ては、著しく實際に即したものであつたのである。

併しこの時分、かうした感化は、私の將來の發達の特質を形造る上に與つて力があつた幾多の感化の中の、僅かに一たるに過ぎなかつたのである。そしてこの感化が、私の心的進展の指導原理と云つてもいゝ位のものになつてからでさへも、それは私の歩む途を變へさせたのではなく、唯だ私をして同じ道程を一層大膽に、同時に一層細心に前進せしめただけのものであつた。曾て私の考へ方に起つてゐた唯一の眞の革命は、この時既に完成してゐた。私の新傾向は、或る點に於ては強固にされ、或る點に於ては緩和される必要があつたのである。併し今後來るべき唯一の重大な思想の變化は、實は政治に關するものであつた。それは一方に於て、人間なるものの究極の見通しに關する限り、或る意味に於ける社會主義に一層接近したものであり、他方に於ては、私の政治上の理想が、普通民主黨の人達の考へてゐる様な純然たる民主主義から、私の「代議政體に就いての諸考察」の中に提示されてゐる様な修正された民主主義への推移と云ふ事にあつた

のである。

この民主主義に對する意見の變化は、極めて徐々につつて來たものであつたが、その始まりは、私がド・トックヴイル氏の「米國の民主主義」を讀んでから、むしろ研究してからのことである。(譯者註、アレキシス・シャルル・アンリ・ド・トックヴイル(一八〇五—一八五九)は佛國の有名な政治家であり學者である。愛に掲げたのはその名著「デモクラシー・アン・ナメリック」である)この書物は出版後直ぐ私の手に這入つたものである。この注目すべき書物に於ては、民主主義の長所が、如何に熱烈な民主主義者と雖も未だ曾て試みたことのない程明細な、それ故に又決定的な論述を以つて指示されてゐた。併し同時に又、多數者の政治として觀られた場合の民主主義に附纏ふ所の特殊な危険も、同様に強烈な光に暴露され、如何にも手に入つた解剖が加へられてゐたのである。但しその批判は、著者が人間進歩の避くべからざる結果と看做してゐた民主主義を否認する理由としてではない。それは民衆政治の弱點と、民衆政治を擁護するのに必要な防衛策と、民衆政治の有益な傾向を充分に發揮せしむると共に、有害な傾向を打消し若しくは緩和する爲めに、是非ともそれに附加すべき必要のある矯正策とを指示することを目的として加へられたものであつた。その頃の私にはかうした類の思索を爲すだけの用意が既に充分出來てゐたのである。それでこの時以來、私自身の思想は益々さうした方面に向つて進展して行くやうになつた。但しその爲めに起つた私の實際上の政見に於ける變化は、幾多の歲月に互つたものであつて、それは一八三五年に書

いて發表した所のこの「米國の民主主義」に對する私の最初の批評を、一八四〇年の同書の批評「評論と論策」の中に再録してあるに比較し、更にこの一八四〇年のものを「代議政體に就いての諸考察」に比較することに依つて、明かに看取せられる通りである。

今一つ私がトツクザイルの研究から大なる利益を得た傍系的の主題は、中央集權制に就いての根本問題であつた。彼れは米國並に佛國の經驗に銳利な哲學的解剖を加へて見た結果、社會の公共事務は、人民の手に依つて安全に行はれ得る限りは、人民自身で執行し、中央政府が人民の機關に代つて執行したり、或はその機關の發動様式を指圖したりして、それに干渉することを一切しないのが最も大切だと信ずるに至つたのである。彼れはかうした個々の市民の實際政治に於ける活動を目して、常に人民の社會的感情と實際的智慧——それはそれ自體に於て極めて重要であり、且つ善政に缺くべからざるものでもあるが——それ等を訓練する上に最も有效な手段の一つだと看做したのみならず、更にそれは民主主義に特有な弱點の或るものに對する特殊の對抗劑であり、且つ民主政治が專制政治に墮することを防ぐのにも必要缺くべからざる防腐劑だと看做したのである。爰に謂ふ專制政治とは、近代の世界に於て眞にその處のある唯一のものであつて、それは行政府の首班が、皆平等にして而かも皆奴隸たる所の孤立せる個人の集合體に對して行ふ專制政治のことなのである。如何にも海峽のこなた（英國）に於ては、差し當り、かうした方面

からの危險は全然なかつた。そこには他國ならば當然中央政府に歸屬する所の内務行政の十分の九までが、政府から獨立した諸機關に依つて處理されてゐた。又そこには中央集權と云ふことが、常に理論上の反對を受けてゐたばかりではなく、理論を離れた無理由の偏見的憎惡をも受けてゐたし、今に尙受けてゐるのである。更に又そこには、中央政府の干渉に對する猜忌心が一種の盲目的な感情となつてゐて、地方自治と云ふ美名の下に、實は私利を事とする所の淺見の地方少數有力者が、地方の利益を壟斷する事餘りに屢なる弊害を矯正せんとする立法院の最も有益な努力をさへも敢て妨害し、それに反抗してゐたのである。併しながら、社會一般が、中央集權に間違つた反對をすることが確實であればある程、理論的改革論も同様に反對の誤謬に陥り、自らは中央集權の苦い經驗を嘗めてゐない所から、その弊害をも看過するやうになるべき危險が益々多くなるのである。私自身は恰度この頃、例へば、彼の有名な一八三四年の救貧法改正案の如き重要な政策を擁護して、反中央集權的偏見に基く所の不合理な俗論を排撃することに盛に努力してゐた。併し若しトツクザイルから教へられる所がなかつたならば、私も亦それまでの多くの改革者達と同様に、輕率にもさうした中央集權的政策に對して、或は反對の極端に走つてゐたかも知れないと思ふ。蓋し地方分權説は當時我國に流行の輿論であつたので、總してその爲めに戦ふことが私の任務とする所であつたからである。併し、事實、私は兩方の誤謬の中間を慎重に辿つ

て行つた。尤も私が果してその中間の線を、恰度正當な地點に劃してゐたかどうかは分らないが、慓くとも私は兩側の弊害を同一程度に強調して、兩者の有利な點を調和せしむる手段をば眞面目に研究してゐたのである。

兎角する中に、改正選舉法に依る第一回の代議士選舉が行はれた。新代議士の中には、私の急進主義の友人や知人の中で最も有名な人達が十數人あつた。即ちグロート、ローバック、ブラー、サー・ウイリヤム・モールズワース、ジョン・ロミリー、エドワード・ロミリー、その他數名の者があつた。尙その外に前代議士であつたウォーバートンや、ストラットや、その他數名の者が當選してゐた。哲學的（純理的）急進主義者を以つて自他共に許してゐたこれ等の人は、今や從來占めてゐたよりか、一層有利な地位に立つて、自己の懷抱せる主義を天下に宣示する好機會を有つた様に思はれたのである。それで父も私も彼等に對して大なる希望をかけてゐた。併しかうした希望は、實は失望に終るべき運命を有つてゐたのである。彼等はその票決の關する限りに於ては、吾々を欺かず、その主義に忠實であつた。尤もそれは往々にして少數の爲めに葬り去られることも多かつたのであるが、彼等の主義政綱に甚しく齟齬せる政策、例へば愛爾蘭彈壓法案とか、一八三七年の加奈陀彈壓法案の如きものが提案された際には、彼等は雄々しく進出して、正義を見捨てるよりは、寧ろ如何程の敵意をも、又偏見をも冒して戰つたのである。併し全體と

して見ると、彼等は思想や主義の促進には、殆ど貢獻する所がなかつた。彼等には殆ど何等の經驗もなく、何等の活動もなかつた。彼等は議會に於ける急進團の指導をヒュームやオーコンネルの如き舊人の手に委してゐたのである。尤も一二の若手の功績は、これを一部の例外として認めなければならぬ。その中ローバックの如きは永久に記憶さるべき資格がある。即ち議席を得たその最初の年に於て、彼は議會に於ける國民教育促進の運動を開始した。（それは或はブルーアム氏が企てて不成功に終つたものを彼れが再びやり始めたこと云つてもよい。）彼は又植民地の自治制獲得の政戦を始めた最初の人であり、而かも數年に互つて、殆んど孤軍奮闘それを戦ひ續けた人である。大觀した處、これ等二つの偉業に匹敵する程の事業を成就した人は他に一人もなかつた。否、多大の期待をかけられてゐた人々の中にさへもなかつたのである。併し今日になつて冷靜に當時を回顧して見ると、彼等は必ずしも私達が當時考へてゐた程、咎むべきものでもなく、又私達の彼等に對する期待も、實は過大に失してゐたことも認められ得る。即ち彼等は極めて不利な事情の中にあつたのである。彼等は實に避くべからざる反動思潮の十年間にめぐり合せてゐた。それは選舉法改正問題の大風が一過し、社會一般が眞に要求してゐた若干の法律改正も頓々實現されたので、社會の動力はその自然の方向に従つて、再び現状維持に贊成する人々の手に歸つてゐた時代であつた。即ちそれは一般の人心が寧ろ休息を希望してゐた時代であつて、

平和克復以來、(譯者註、森翁) 孰れの時代に較べても、この時代程に、民心の趨向が、選挙法改正の餘勢を導いて新事象を醸成せんが爲めに新なる運動を起さうと云ふ企圖に、共鳴を感じなくなつてゐた時代は他になかつたのである。國民がかうした氣分に浸つてゐた時代に、單に議會に於ける辯論を以つて、眞に偉大なる事業を成就する爲めには、眞に偉大なる政治家たるを要したのである。而かもさうした偉大なる政治家にならなかつたからとて、誰れにも責任がある譯ではない。父と私とは實は誰れかさうした有爲なる指導的政治家が現はれんことを希望してゐた。即ち誰れか哲學的の素養も深く、世俗的の才幹にも長けた人で、自己の傘下に喜んで馳せ參ずる幾多の青年、乃至は比較的無名の士を鼓舞策勵し、即ちそれ等の新人をして、その材幹に應じて、それ〴〵進歩した思想を社會に提唱する役を爲さしめ、——下院を利用して一般人心を教育し、督勵する爲めの講座、若しくは教壇と爲すだけの力量を具へ、斯くして自由黨をしてその政策を自己に仰ぐの餘儀なきに至らしむるか、乃至は自由黨の手から改革派の指導權を自己の掌中に奪取するか、その孰れかを敢行する位の傑物の現はれんことを切望してゐたのである。若し私の父が議會に居つたならば、彼れこそは正に斯様な指導者となつてゐたであらう。併し兎に角さうした指導者がなかつた爲めに、それ等の教養ある急進派の代議士達も、結局自由黨の單なる一左翼コウイブ團たるに過ぎないものと成つて了つたのである。私は急進主義者達が自己の主義の爲めにせめて

は尋常な努力でもしたならば、その働には見るべきものがあると云ふ相當熱烈な、尤も今から考へると、稍々誇張された考を有つてゐたので、この時分から一八三九年までは、彼等の頭に思想を、彼等の胸に意氣組を興へる爲めに、その或る者には個人的の感化力を以つて、又或る者には文章を以つて、相當骨を折つて見たのである。それはチャールズ・ブラーには可成りに、サー・ウイリヤム・モールズワースには幾分効果があつた。そして二人共極めて有益な功績を立てたのであるが、不幸にして殆ど働き盛りにならうとする取りかゝりの頃に夭折して了つたのである。併し全體として見れば、私の企圖は全然徒勞であつた。斯様な事業に成功する機會を有つ爲めには、私の地位とは別な地位にある必要があつた。即ちそれは、身自ら議會に在つて、急進派の議員と日夕肘を取つて協議し、且つ自ら發案提唱し得る人、そして他人に對して先頭に立たんことを勧めるよりは、寧ろ自ら馬を陣頭に進めて、他人を麾いて吾れに續けと叱呼し得る人、さうした人にもみ適した仕事であつたのである。

私は文章を以つて爲し得る限りはこれを爲した。一八三三年中には、「エキザミナー」誌上で、フォンブランクと一緒に活動を續けてゐた。當時彼れは時の自由黨内閣に反對して、急進主義の爲めに熱烈に戦ひ續けてゐたのである。一八三四年の議會々期中、私はフォックス氏の主宰する「マンズリー・レポジトリー」誌に(「新聞短評」と云ふ表題で)、社説體の時事問題の評論を書

いた。フオックス氏は説教者として、又政論家として有名であり、後にはオールドム區選出代議士として世間に知られた人であるが、私は最近氏と相識る様になり、主として氏の爲めにその雜誌に寄稿してゐたのである。私はこの「短評」の外に數種の論文をこの雜誌に寄せた。その中で最も重要なものは（それは「詩の理論に就いて」と云ふのであるが）、「評論と論策」の中に再録して置いた。一八三二年から一八三四年までの間に私が公にした論文は（新聞に出した物は別として）全部で大冊の書物になる程である。併しその中には、解説を加へたプラトリーの對話篇の數篇の抜萃も含まれてゐる。これは一八三四年まで公にされなかつたのであるが、實はそれよりも數年前に書いて置いたものであつた。そして後日様々の場合に發見したことであるが、このプラトリーの抜萃は、その頃までに私の書いた他の述作の孰れよりも、遙かに多くの人達から讀まれもし、筆者のことも知られてゐた様である。この時代の私の著作の話を終るに際して最後に加へ得るのは、一八三三年にブルワー（譯者註、小説家、リットンのこと）の依頼で、ベンダム哲學の批評的解説を書いたことである。ブルワー氏は當時氏の「英國と英國人」（當時に於ては、一般の思想よりも遙かに進んだ著述であつた）を恰度書き上げようとする所であつた。氏は私の解説の一小部分を氏の本文の中に織り込んで残りは全部（鄭重なる感謝の辭を添へて）附録として印刷に附した。この論文に於て、完成した一個の哲學體系として考察されたベンダムの學說に對する私の評價の賛成の方

面と共に、反對の方面の一部も亦初めて印刷に附せられたのである。

併し間もなく、「哲學的急進」派に對して、私がこれまでより一層有效な援助と、同時に刺戟をも與へ得る様に思はれた好機會が到來した。これまで父と私と、それから父の家に出入してゐた院内院外の急進主義者達との間に、屢々話題に上つてゐた計劃の一つは、哲學的急進主義の機關雜誌を創設することであつた。それは例の「ウエストミンスター」評論をそれにする積りであるが、駄目になつたので、その代りを作らうと云ふのであつた。そしてこの計劃の話が段々に進んで來て、當てに出来る寄附金や、主筆の選定までも話題に上る様になつてゐた。併しそれから暫らくは具體的のことは何も、現はれて來なかつた。然るに一八三四年の夏、サー・ウィリアム・モールズワースが、自ら進んで何か評論雜誌を創刊しようかと云ふ提議をして來た。彼れ自ら既に一個の熱心な學徒でもあり、且つ嚴正にして深遠な思想家でもあつたので、當にその財力を以つてのみならず、その文筆を以つても、吾々の主義に充分の助力を與へ得るだけの人物であつた。但し彼れの提議は、私が假令表向きにはなれぬまでも、事實上の主筆たることを承諾することと云ふ條件附であつた。かうした提議は拒絶さるべきものではなかつた。それでその評論誌は創刊されることになつた。最初は「倫敦評論」と云ふ表題であつたが、後モールズワースが「ウエストミンスター」評論を社主トムソン將軍から買収して、兩者を合併したので、「倫敦

ウェストミンスター評論」と云ふ誌名を冠することになった。一八三四年から一八四〇年まで、私の餘暇の大部分はこの雑誌の經營に費されたのである。併し初めの内は、この雑誌も全體としては、決して私の意見を代表してゐるものではなかつた。私は義理ある同志の者に對しては、多大の讓歩をしなければならなかつたのである。元來この評論誌は「哲學的急進主義者」一派の代表機關として設けられたものであつたが、私は今や彼等一派の大多數の者とは、幾多の重要な點に於て意見の扞格を來してゐた。従つて私自身は、も早や彼等同人中の最も重要な人物だと云ふことさへも出來なくなつてゐたのである。父が寄稿家として協力してくれることは、無論吾々一同の是非とも必要だと考へてゐたことで、父も亦愈々死の病に冒されて筆の執れなくなるまで、この雑誌に盛に筆を執つてくれたものである。そして父の論文の題材と、父が自己の思想を表現する力強さ、明確さとの爲めに、最初この評論誌の論調とか色彩とか云つたものは、他の執筆者の誰れよりも、寧ろ父から與へられてゐるかの觀があつたのである。主筆たる私でさへも彼れの論文に對しては、主筆としての權力を揮ふことが出來なかつた。否、時としては私自身の論文の一部分を父の爲めに犠牲にしなければならぬ様なことさへもあつた。斯様な次第で、舊の「ウェストミンスター」評論の主義學說が、殆ど舊の儘で、この評論誌の主要成分を占めることになつたのである。併し私は、これ等の思想と相並んで、別種の思想、別種の色合をも引き入れ、他の

黨員の思想と並行して、私自身の思想の色合をも相當表現し度いものだと思つてゐた。主にかうした目的を達する爲めに、本誌の特色の一つとして、各論文には凡て、筆者の姓名の頭文字なり、其他何等かの記號を附けることにし、それが單にその人一己だけの意見であると云ふことを表明して置くことにした。斯くして主筆は、その論文が公表の價值あるものであり、且つそれが本誌の創められた當初の目的と齟齬してゐないと云ふことに對してのみ責任を有つことにしたのである。私は最初の自分の論文の主題を選定するに當つて、「哲學的急進主義」の新舊兩派を調和しようとして云ふ私の豫ねての計劃を實行する機會を得た。セヂキック教授がついその頃公にした「劍橋大學の課程に就いて」と云ふ論文は、ロック及びベーレーに對する攻撃の形を借りて、實は分析心理學と、功利主義的倫理學とに、極端な攻撃を加へることをその著しい特色としてゐるものであつた。元來同教授は自然科学の或る特殊な方面に於てこそ有名な人であるが、哲學の領域に立ち入つて來てはならない人なのである。それでこの論文に對して、父やその他の人達は大いに憤慨した。私もそれは極めて當然のことだと考へた。そして私はこの際、不當なる攻撃を排撃すると同時に、ハートレーの唱導した分析心理學やベンタムの功利説に對する私の辯護の中に、この兩題目に關して私が舊友達と見解を異にしてゐる論點を若干挿入することも出來ると思つたのである。私はこの目論見に幾分成功した。但し父に對する私の關係から、今この問題に就いて私

の所見を充分に論じ盡すことは、私に取つて、如何なる場合に於ても苦痛であつたし、父が現に筆を執つてゐる雑誌では到底不可能なことであつた。

併し、私自身異つてゐると信じてゐた考へ方に對して、父は思つた程には反對でなく、唯だ父はその極端に論争的な智力を無意識的に誇張した結果、自己の意見を不當に評價してゐた。それで、論敵を念頭に置かずに考へる時には、父は、平生否定しきうに思はれる眞理の大部分をも認容するに吝かでなかつた様にも私には考へられたのである。私は、父が彼れの理論の中には容れる餘地の少しもなさうに思はれる考察に對して、實際には大いに斟酌してゐたのを見たことが度々ある。父がこの時分に書いて公けにした「マキントツシユ論断片」(註者註、サージエームズ・マキントツシユ(一七六五—一八三三)は英國の哲學者)は、私が大いに感服して讀んだ個所もあつたが、全體としては私に取つて愉快よりは寧ろ苦痛の方が多かつたものである。然るにずつと後になつて、それを再讀して見ると云ふと、その中に含まれてゐる思想は、殆ど大體に於て正當だと考へられるものばかりであつた。そして私は、父がマキントツシユの^{オピニオン}對して抱いた嫌惡の情に共鳴することさへも出来たのである。尤も父のそれに對する辛辣味は實に適度を越えてゐたのみならず、更に公平の程度をさへも越えてゐたものであつた。當時私が父の將來の好轉を卜するに足ると思つた一事は、父がトツクヴィルの「米國に於ける民主主義」を頗る悦んで受け容れたことであつた。成程父は、

トツクヴィルが述べた民主主義の短所に就いてよりも、彼れが述べたその長所に就いて、遙かに多く云ひもし、考へもしてゐたのである。併しそれでも尙、政治問題の取扱方に就いて、兎に角父の行き方とは殆ど正反對である——即ち父の方法が純粹に演繹的であるのに對し、彼れのは全然歸納的、分析的であつた——ところの書物をば、父が斯くまで高く評價したことは、私の意を大いに強うしてくれたのである。父は又、兩評論誌合併後の第一號に私が公にした論文も賞讃してくれた。この論文は「文明」と云ふ表題で「評論と論策」との中に再録されてゐるものであるが、その中に私の新思想が澤山に這入つて居り、且つ當代の智的、道德的の諸傾向を、父の傳授してくれたものとは異つた立場から、異つた方法で相當力強く批判したものであつた。

併し父の考が、將來新しい方面に益々發展して行き、従つて父と私とが吾々の思想の宣傳に永久に共働して行かれるだらうと云ふ見越は、中道にして斷たるべき運命を有つてゐたのである。一八三五年中を通じて、父の健康は次第に衰へてゐた。父の症状は紛ふべくもない肺結核のそれであつた。衰弱の極點に達するまで長らく病氣と戰つた後、父は一八三六年六月二十三日遂に永遠の眠に就いた。その死の数日前まで、父の智力には少しも衰退の徴候が見えなかつた。一生を通じて父が關心してゐた有らゆる事物や人物に對する興味も少しも減じなかつた。そして又死期が差し迫つても、その宗教上の信念には毫末の動搖も起らなかつたのである(父のやうな強い堅

固な心をもつた人には、さうしたことはある筈もないのだが。自分の最後が愈々近付いたことを知つてからの父の主なる満足は、世の中を當時の状態よりもよりよくなす爲めに自分が貢献して來た事業を回顧することであり、この上生き永らへ得ぬことに對する父の主なる心残りには、これ以上さうした貢献をする餘日が與へられないことであつたらしかつた。

父は祖國の文學史上、否政治史上に於てさへも高い位置を占めてゐる。然るに今日彼れに餘り盛名がなく、彼れよりも遙かに劣れる人達に較べて、餘り世人に記憶されてゐないのは、その爲人に依つて利する所多かつた現代人に取つて決して譽めた話ではない。併しこれは恐らく主として二つの原因に歸すべきものであらう。第一には、ペンタムと云ふ當然優越した盛名の中に、父に關する世人の思出が餘り甚しく没入してゐることである。併し父は實は決してペンタムの單なる祖述者でも、門弟でもなかつた。否、彼自ら當時の最も獨創的な思想家の一人であつたからこそ、彼れよりも一時代前の時代が作り出した獨創的な思想の最も重要な大部分をば第一着に理解し、それを採り入れる先達の一人となつたのである。元來父の頭とペンタムの頭とは、本質的にその構造を異にしてゐた。父はペンタムの秀でた性質を皆有つてゐた譯ではなかつた。併しペンタムも亦父の秀でた性質を皆有つてはゐなかつたのである。成程、父を以つてペンタムと同様な立派な貢獻を人類の爲めに成就しに者と看做して、父の爲めに賞讃を要求するのは聊か滑稽でも

あらう。父はペンタムのやうに思想界の一大分野に革命を起した、否、寧ろ一大分野を創造したと云ふ譯ではなかつたのである。併し父の功績の中から、ペンタムの偉業に負うた部分を全部計算外に置いて、ペンタムが一切手を着けなかつた領域、即ち分析心理學の領域に於て父が成就したもののみを清算するとしても、父の名は有らゆる道徳的政治的科學が究極の基礎を置く所のその思索の最も重要な一部門に於ける最大の名前の一つとして後世に記憶せらるゝと共に、その發達の重要な階段の一つを劃するものであらう。今一つ父の名聲をしてその眞價以下たらしめた理由は、父の思想の大部分は、一部は彼れ自身の努力に依つて、今日では大體世間に於て認容されてゐるにも拘らず、全體としては、父の精神と現代のそれとの間には著しい距離があつたのである。ブルータスが最後の羅馬人と呼ばれた様に、父も最後の十八世紀人であつた。父は十八世紀の思想感情の色調をば（但し修正もせず、發展もさせなかつたと云ふのではないが）、十九世紀へまで持越して、十九世紀前半の一大特質であつた所の十八世紀に對する反動的の趨向には、善惡孰れの意味に於ても参加しなかつたのである。十八世紀は實に偉大なる世紀であり、力強い勇敢な人達の世紀であつた。そして父はその世紀の最も力強い、最も勇敢な人達に取つて嵌り役の道伴れであつたのである。父はその文章と個人的感化とに依つて、その時代の人々に對する光の一大焦點であつた。父はその晩年を通じて、恰もヴォルテールが佛蘭西啓蒙思想家達の中心人

物であつた様に、英國に於ける智的急進主義者達の頭目であり、指導者であつた。父がその最大の著述の主題である印度に關して、凡ての堅實な政策の創始者であつたと云ふ事は、實は彼れの比較的小さな功績の一つたるに過ぎない。父は如何なる問題に就いて筆を執つても、それに對して貴重なる思想を寄與せずには置かなかつたのである。父の「經濟學綱要」は、書かれた當初には極めて有用な書物であつたが、もう遙か以前にその用を果してゐるものである。この一冊を除いては、父の著述は孰れも今後永く全然廢たれる様なこともなく、それ等の問題の研究者に取つては依然として有益なる讀物となるであらう。單に精神と品性の力だけで以つて、他の人々の信念や目的を左右する力と、その力を用ゐて自由と進歩を促さうとする熱心な努力とに於ては、私の知れる限り、父は男子の中では他に匹敵を見ない人物であつて、それは婦人の中に唯だ一人あるだけである。

私は父をして人物として卓越せしめた所以の諸性質に於ては、私自身非常に劣つてゐることを強く意識してゐたのであるが、今となつては父の力を借りずに、自己の最善を盡して見なければならぬ事になつた。そして評論誌は私が社會の自由な、民主的な思想を抱いてゐる方面の人々に有益な感化を及ぼす機關として、主に希望をかけてゐるものであつた。そして父の援助を失つたことは、一方から云へば、その援助を得る爲めに代償として拂つてゐた東縛と遠慮とから解放

されたことにもなつたのである。私は急進主義の論客乃至政客で、自分の意見と合はない點にまでも敬意を拂はなければならぬ人は、もう外にない様な感じがした。それにモールズワースの完全な信任をも得てゐたのであるから、私は爾後、自己の思想や、考へ方を自由に吐露すると共に、評論誌の論壇を私の考へてゐる様な意味の「進歩」と云ふことに共鳴してゐた凡ての論客に開放して、假令萬一それが爲めに舊同志諸氏の支持を失ふ様なことがあつても構はないとまでも決心したのである。その結果、この時分からカーライルは評論誌に頻りに寄稿する様になつた。續いて間もなく、スターリングも時折稿を寄せてくれた。尤も各自めい／＼の論文は依然として筆者一己の思想感情の表白たることに變りはなかつたのであるが、雑誌全體の調子は相當な程度に於て、私の考と一致したものになつたのである。評論誌の經營に就いては、私と協力して働いて貰ふ爲めに、私の下に、ロバートソンと云ふ蘇國の一青年を用ひることにした。この青年は相當腕もあり、智識もあり、且つ非常に勤勉で、よく働く計劃的な頭腦の持ち主で、雑誌の賣行をよくする上に色々の工夫を凝してくれた。私も彼れのさうした方面の材幹には多大の望を囑してゐたのである。さう云ふ所から、一八三七年の初め頃モールズワースが、この上損をしてまで評論誌を經營するのがいやになり、これと關係を断ち度いと考へる様になつた時に、(彼れはこの雑誌に對しては、その責任を立派に、而かも少なからぬ金錢上の損失をも忍んで果したのであ

る、私は、自分の金銭上の利害に對しては殆ど無考であつたのと、且つロバートソンの計測に對する信頼心も大いに手傳つて、遂に彼れの計測が相當試験されるまで、自己の計算でそれを繼續することに決定した。彼れの立てた計測は確かによかつた。私には今日に至るまで私のそれに對する意見を變更する理由は一つもないのである。併し私は如何なる計測を以つてしても、急進主義民主主義の評論誌が、有給主筆又は副主筆と、執筆者に對する潤澤な報酬とを含めた経費を償ふ様になるものだと信じない。私自身と數人の定連の寄稿者とは、モールズウァースの時代と同様に、無報酬で書いてゐた。併し從來原稿料を拂つてゐた寄稿家に對しては矢張り「エヂンバラ」評論や、「クォーターリー」評論並みに相變らず報酬を出してゐた。そしてその費用は雜誌の賣上金からは到底出なかつたのである。

同年、即ち一八三七年に、かうした仕事の眞中で、私は又論理學に着手した。私は前に歸納法の入口で行詰つて以來、五年間、論理學に就いては筆を執つたことはなかつたのである。その中に、論理學のさうした方面の困難を解決するのに、主として必要なものは、物的科學の全範圍に互る包括的な、而かも同時に正確な觀念だと云ふことを次第に發見して來た。而かもそれを得るのに、研究の道程が随分長くかゝりはしないかと心配してゐた。と云ふのは、私は諸科學の一般概念と研究過程とを一目に展開してくれる様な書物も、その他の手引も知らなかつたし、從つ

て各科學の細論から自分獨りで出來得る限り拔萃する外はないのではあるまいかと恐れてゐたからである。處が、幸にもこの年の初め、ヒューウェル博士が「歸納的諸科學の歴史」と云ふ書物を公にした。私は熱心にこの書物を讀んだ。そしてその中に私の要求してゐたものに可成り近似したものを見出したのである。この書物の大部分とまでは云はなくても、可成り澤山の理論には議論の餘地がある様に思はれた。併し私の思索に依つて細工を施すべき材料がそこにあつた。そして著者がそれ等の材料に、その後の勞力を大いに輕減する位までに一通りの加工をしてくれてあつたのである。今や私は多年待ち望んでゐたものを手に入れた。ヒューウェル博士に依つて喚起された思想の勢に乗じて、私はサー・ジェ・ハーシエルの「物理學研究」に就いての論文をもう一度讀んで見た。この書は數年前に讀んで、その評論までも書いて見たが、遂に得る所がなかつたものである。然るに今度これを讀んで非常に益する所があつたことに依つて、私の頭の進歩した程度を測定することが出來た。そこで私はこの問題を解決する爲めに盛に考へ且つ書くことに着手した。併しこの方面のことに割き得る時間と云へば、當面の一層差迫つた仕事の合ひ間合ひ間の閑を偷むより外はなかつたのである。この頃私は、評論誌に筆を執る合ひ間に恰度二ヶ月計りの閑を得た。その二ヶ月の間に、私はあの本の三分の一、而かも最も困難な三分の一の初稿を書き上げたのである。そして前に書いて置いたものを、矢張り約三分の一と見積つてゐるから、

後には三分の一しか残つてゐないことになつた。この時に書いたのは、推論に關する理論の残部（即ち連鎖推論と論證科學との理論）及び歸納法の卷の大部分とであつた。これを仕上げた時に、私は眞に難かしい問題は凡て解決され盡した様に思はれ、従つてこの書物の完成は今や時の問題たるに過ぎなくなつた様な氣がしたのである。爰まで來た時、私は評論の次號に二篇の論文を書く爲めに、論理學の方は暫らく差し置かなければならなくなつた。この論文を書いて了つて、私は再び論理學に立戻つたのであるが、私はこの時初めてコントの「實證哲學講義」、正確に云へば、當時公にされてゐた初めの二卷だけに接したのである。

私の歸納法の理論は、本質的には、コントの書物を見ない以前に完成してゐた。斯様に私が、コントとは別の途を辿つてそれと到達したのは、却つてよかつたやうである。と云ふのは、その結果、私の著述には彼れの書に確かにないもの、即ち歸納的過程をば、恰度演繹法に對して三段論法がある如く、嚴密なる諸法則と一つの科學的檢證とに纏める所が含まれることになつたからである。コントは何時でも研究方法論に於ては正確で深刻であつたが、證據の諸條件に就いては何等正確な定義を與へようとさへもしなかつた。實に彼れの文章を讀むと、彼れはさうした要件の正しい概念には遂に到達してゐなかつたことが分る。然るに私が歸納法を取扱ふ場合に、特に自分で試みようとした問題は、實にこの問題であつたのである。それにしても矢張り、私はコン

トから得る所が多かつた。そして後から草稿を書き直す時に、私は彼れから得た材料を以つて内容を豊富にすることが出來た。加之、尙充分に考ふべき問題として残つてゐた部分に於ても、私が彼れの書物から重要な助を得た個所が若干あつたのである。その後この「實證哲學講義」の續卷が世に現はれるに従つて、私は次から次へと貪るやうに讀んだものである。併し彼れが社會學を題材として取扱ふ所になると、私の感じは色々と錯綜して來た。第四卷には私は全然失望した。その中には社會の諸問題に對する彼れの意見の中で、私の最も不賛成なものが這入つてゐたのである。併し第五卷には一貫した綜合的歴史觀があつたので、再び私の熱情を燃え立たせた。そしてそれは第六（即ち最後の）卷に至つても大して減退することはなかつたのである。單に論理學上の立場から見れば、私が彼れに啓發された所の唯一の主要概念は、「逆の演繹法」のそれである。これは主として歴史及び統計學の複雑な諸問題に適用し得る方法として彼れの提唱したものであるが、その手續は演繹法の普通の形式と次の點に於て相異してゐる。——即ちそれは（物的科學の演繹的方面に於ける自然の順序のやうに）、先づ一般的推論に依つてその結論に到達し、それから個々の特殊經驗に依つてその結論を檢證することをせず、先づ個々の特殊經驗の對照校合に依つて一般的法則を得、次にそれ等の法則が果して既知の一般原則から導き出される法則と等しいか否かを確めることに依つて、それ等の法則を檢證するのである。私がこの方

法を、コントの中で見出した時には、それは私に取つて全然目新しい觀念であつた。若しコントがなかつたならば、私はそれに（結局到達するとしても）さう早くは到達し得なかつたかも知れない。

私は随分久しい間コントの著述を熱心に讚美してゐたものであるが、彼れと文通を始めたのは、ずつと後のことであつて、彼れと直接會つたことは遂に最後までなかつたのである。併し數年間はお互に随分頻りに手紙の往復をしてゐたものであるが、遂にそれが論争がかつて来て、お互の熱情も冷却する様になつた。先に文通を怠り出したのは私で、先にそれを廢めて了つたのは彼れであつた。私は到底彼れの心に何等の利益もなし得ない、そして彼れが私に爲し得る利益も、皆既に彼れの書物でしてくれたことを私は見出した。大方彼れも同じ様なことを見出してゐたのであらう。併し若し吾々の間の意見の相違が、單なる學說上の問題に止つてゐたならば、唯だこれだけでは實際が斷たれるやうにはならなかつたであらう。ところで、吾々の意見の相違は主として、お互の心の中で最も強い感情を混へた、従つてお互の理想の全方向を決定する様な點に就いてであつた。彼れが、一般人類は——その中には實生活の有らゆる方面の支配者までも含めて——政治上社會上の事柄に對する考の大部分をば、さうした問題に就いて普通彼等が爲し得る以上に研究して來たその道の權威者に仰がねばならぬのは、事の性質上已むを得ない事であつて、そ

れは恰度肉體上の事柄に關して彼等が醫師の言に耳を傾けると同様であると主張してゐる所は、私の無條件に贊成した所であつた。この教訓は、私が前に言及したコントの初期の著作に依つて、私に強く印象されたものである。そして彼れの名著に於て私の最も敬服したのは、近代歐洲の諸國民が、歴史的に見て、中世紀を通じて政權と教權との分離及び教權の明確なる組織から、得來つた所の利益を、彼れが明快に解説してある點であつた。又私は曾ては僧侶に依つて揮はれてゐた道徳的及び智的優越性は、必ずやその内哲學者の手に移るべきものであり、哲學者がさうした優越性を有つに足る位に、意見に於ても一致し、その他の點に於ても相應はしくなつて來た曉には、おのづからさうなるものだと思ふ點に於ても、彼れと所見を同じうしてゐたのである。併しながら、彼れがかうした思想系統を極端にまで持つて行つて、それを一個の實行體系となし、その中で哲學者は曾てカトリック教會が持つてゐたと殆ど同様な精神的支配權（尤もそれには何等世俗的の權力を伴ふものではないが）を授けられた一種の階級的體統に組織されるべきものであるとした時に、又私が、彼れはこの精神的強權を以つて、善政に對する唯一の保障、實際の壓制に對する唯一の障壁と看做し、これに依れば國家及び家庭に於ける專制組織も無害有益となることを期待してゐるものであることを見出した時に、論理學者としては殆ど一致してゐた吾々が、社會學者としてはも早や相携へて進むことが出来なかつたのも敢て怪むには足りないであらう。コ

ント氏はその後も引き続きこれ等の學說を最も極端な結果にまで進めて、その最後の著述である「實證政治學體系」の中では、恐らくイグナチウス・ロヨラの頭からでもなければ、到底他人の頭からは出さうにもない程完全な宗教的及び政治的專制制度を目論んだのである。即ちその制度に依れば、精神界の教師及び支配者の體統的に組織された團體が揮ふ所の一般思想に對する束縛は、社會の各構成員の有らゆる行動には固より、更に人間の力の及ぶ限りは、その有らゆる思想にまでも、それが他人の利害に關する場合に於ては勿論のこと、よしその人一己だけに關する場合に於てさへも、絶對的に行はれることになるのである。この著書は、幾多感情の點に於て、コントが同一主題に就いて以前に書いたものに較べると、可成り改善されてゐることは當然認めなければならぬが、併し社會哲學に對する貢獻として、この書物が有する唯一の價值と思はれるものは、宗教的信仰の助けを借りずには、社會に對する有效な道德的權威を保つことは到底不可能だと云ふ在來の考をば一掃した點にあると思ふ。と云ふのは、コントの著書には人道教以外には何等の宗教も認められてゐないにも拘らず、そこには、社會一般が一致して認めた所の道德的信念は孰れも、その社會の各個人の行爲及び生活全體の上に、考へても驚くべき程の活動力と威力とを以つて、壓迫を加へて來るものであると云ふ動かすべからざる確信が儼然として残つてゐるからである。兎に角この書物は、社會及び政治を考察する思想家に對して、人がその思索に

於て、一度「自由」及び「個性」と云ふものの價值を見失つた曉には、如何なる結果に立ち至るか云ふことに就いて、永久に警告を與ふる所の記念碑として存するものである。

私一身のことに立戻つて話をしよう。評論誌はその後も暫らくの間、私が著述の爲めに乃至は著述を目的としての思索の爲めに割き得る時間を、殆ど全部奪つて了つてゐた。「倫敦・ウェストミンスター」評論から採つて「評論と論策」の中に再録してある論文は、私が書いた論文のやつと四分の一位のものである。評論誌の經營に於ては私は二つの主要なる目的を有つてゐた。その一つは哲學的急進主義を、宗派的ペンナム主義だと云ふ非難から免れしむることであつた。私は一方ペンナムと私の父との兩人の極めて尊敬すべき特徴であつた所の、表現の嚴正や、意義的確や、大言壯語と空漠な概括論とに對する輕蔑などはその儘に保存すると共に、他方急進的思索にこれまでよりか一層廣汎な基礎を與へ、一層自由なのびくとした特質を與へ度い、——即ち一方に於て、ペンナム哲學の中の永遠に價值あるものをば全部認容して、それを取り入れながら、而かもペンナムのそれよりも一層よい、一層完全な急進派の哲學が存在することを示し度いと思つてゐた。そしてかうした第一の目的に於て、私は或る程度までは成功したのである。私の企圖した今一つのは、院内院外の教養ある急進主義者を鼓舞策勵して、彼等をして、若し用ひる手段宜しきを得れば彼等も成り得ると私が考へてゐたものに——即ち國政を執るだけの能力

ある政黨に、少くとも自由黨と政權を共有する場合にその提携條件を指圖するだけの實力ある有力なる一政黨に結成せしめる事であつた。この方の企圖は最初から大分空想的であつた。その理由は、一部は、選挙法改正の熱が下り坂になつて、保守黨の勢力が再び力強く擡頭しつゝあつたので、時利あらざるものがあつたからでもあるが、それよりも更に重大な理由は、オースチンが眞相を道破した如く、「それだけの人物が我國に居なかつた」からなのである。院内急進主義者の中には、啓蒙的急進派の有用な議員たるの資格を具へた人も數名あつた。併し斯様に一政黨を組織し、それを指導するだけの力量ある人物は一人もなかつた。それで折角私が彼等に呼びかけた勸説も、遂に何等の手筈もなかつたのである。尤も急進主義に取つて、乾伸一擲の、而かも成功の可能性ある大芝居を打つ餘地があるらしく思はれた場合が、一度現はれて來たことがあつた。それはかうである。ダーラム卿は、當時世間からも考へられてゐた様に、内閣の方針が自分を満足さすだけに自由主義的でないといふ理由で、内閣を去つてゐた。その後彼れは内閣からカナダ反亂の原因を調査して、それを取り除くと云ふ使命を引き受けた。そして彼れは最初から急進主義の顧問を身邊に集めようとする意向を示してゐた。然るに彼れが初めて立てた政策の一つで、目的に於ても結果に於ても共に優れたものであつた所の政策が、本國政府の反對する所となり、遂に破棄されて了つたので、彼れは職を辭して、公然黨の諸公と相争ふ位置に立つたのである。

爰に政界の重鎮であり、保守黨からは憎悪され、自由黨からも今恰度排斥されたばかりの一大人物が、急進黨の未來の黨首として立つ可能性が現はれて來た。黨略のほんの初歩でも心得てゐる人ならば誰れでも、かうした好機に乗じて一仕事しようと企てたに相違ない。ダーラム卿は八方から峻烈な攻撃を浴びてゐた。政敵からは罵られ、小心な政友からは見捨てられ、進んで彼れを辯護しようと思つてゐる政友等も實に云ふべき言葉を知らなかつたのである。彼れは今や敗殘の人、面目を失つた人として歸國するかと思はれてゐた。私は元來加奈陀事件には最初から注意を拂つてゐたものである。それに私は彼れの進言者に進言した者の一人である。従つて彼れの政策は私の考へてゐた政策と殆ど全然一致してゐた。斯くして私は正に彼れの政策を擁護すべき位置に在つたのである。私は一篇の宣言書を書いて評論誌上に發表した。その中で私は彼れの爲めに極端に高飛車に出て、啻に彼れの無過失を主張したばかりでなく、彼れは寧ろ賞讃と榮譽とに價することを主張した。俄然、他の幾多の論客も聲に應じて來たのである。私はダーラム卿が直ぐその後で、私に誇張した辭令を以つて云つたこと——即ち彼れが英國に歸着した際に、殆ど凱旋將軍にも等しい歓迎を受けたのは、一つにこの論文の爲であると云つた言葉には、幾分の眞理があると信じてゐる。私は自分の所論が正しくその時機を得たものであつたと信じてゐる。それは危機一髪と云ふ時に、結果の決定に與つて力あるもの、即ち小山の頂で轉がされる石が、南に落

ちるか北に落ちるかを決定する所の手の觸り具合であつたと信じてゐる。政治家としてダーラム卿にかけてゐた希望は間もなく凡て消え去つて了つた。併し加奈陀、及び一般に植民地の政策に關する吾々の主張は勝利を得た。ダーラム卿の報告書はチャールズ・ブラーが筆を執つたもので、一部はウェークフィールドの示唆を受けたものであるが、實にこれが新時代を劃することになつたのである。その中に採るべき手段として掲げてある事項は、植民地内政の完全なる自治制にまで及ぶものであるが、それ等は皆兩三年の中に加奈陀に於て實施され、その後も次第に他の植民地に波及して、遂に苟も相當の共同體としての性質を具備する歐洲人の殆ど凡ての植民地にまでも行はれることになつたのである。それで、私はダーラム卿及びその周圍の人達の名聲を、最も重大な危期に於て支持し得たと云ふ意味に於て、かうした結果に對しても相當貢獻する所あつた者と云つてもいい。

この事件と同様に、機を逸せずと輿論の魁をすることの極めて有效であることを例證した場合が評論誌の経営中に、もう一度あつた。私はカーライルの佛國革命史が早く成功して名聲を博したのは、私が評論誌に書いたその紹介が相當與つて力あつた事と信じてゐる。この書物の出版直後、未だ凡俗批評家達が、在來の批評の標準や形式を全然無視して書かれたこの書物をば非難して、世人に間違つた偏見を抱かせる閑のない中に、私はこの書の評論を書いて公にした。そして

これは、有らゆる法則を超越して、それ自體一つの法則である所の天才人の製作の一つであるとして大いに推賞したのである。私は、この場合に於ても、又ダーラム卿の場合に於ても、私の論文が社會に與へたと思はれる感動は、決して私の文章の書き振りが優れてゐた爲めであるとは思はない。實際私は、少くともその一つの場合（即ちカーライルに關する論文）に於ては、確かに文章は拙かつたと思つてゐる。それであるから私は、孰れの場合に於ても、若し誰れか自分の文章を人が讀んでくれる位の地位にある人が、正しく同様な時期に同様な意見を發表して、その正當な論據を相當な程度に述べたならば、恐らく同一の効果を挙げ得たことと信じてゐる。併し私が、評論誌を通じて、急進派の政治活動に新生命を注ぎ込まうと云ふ希望が全然失敗に歸してからは、苟も聲援に價する事や人物に對しては躊躇する所なく、それを與へようと云ふこれ等二つの場合の正直なる企てを顧みて、私は心竊かに會心の笑を禁じ得ないのである。

急進黨組織の最後の望が絶えたからには、もうこの上評論誌の爲めに私が費す多大の時間と金銭との失費を持続すべきではなかつた。それは既に、自分の思想を傳へる道具としての私一己の目的には、或る程度まで役を果した。私はこれに依つて、自分の變化した考へ方を充分に誌上で發表し、そして私の初期の論文に現はれてゐた比較的偏狭なペンタム主義の思想から、現在の自己を判然分離することが出来たのである。斯く自分の現在の立場を明かにしたのは、凡て私の書

いたもの、——その中には純然たる文學上の様々な論文も含まれてゐるが、——凡てそれ等の一般の調子にも依つたのであるが、殊に力のあつたのは、ペンタム及びコーリツヂ兩者の哲學上の價值判定を試みた二つの論文であつた。(これは「評論と論策」中に再録してある。)私はペンタム論に於て、一方彼れの價值を充分公平に認めると共に、彼の哲學の誤謬及び缺陷と考へたものを指摘したのである。私は今日でも尙この批評の實質は全然間違つてゐないと考へてゐる。併しあの時分にあつた批評を發表したことが果して適當であつたかどうかには就いては時々疑を抱くことがある。私は、社會を進歩せしむる一手段としてのペンタムの哲學が、未だその働を爲し終らない中に、或る程度までその信用を墜したことになる、その信用を墜す手助けをしたことは、社會の改善進歩に益するよりは害になつた方が多い様に時々感ずることがある。尤も反動の反動がペンタム主義のよい方面に向つて起りつゝあるらしく見える今日では、かうしたペンタム主義の缺點の批評を、私は比較的満足之感を以つて見る事も出来る。殊に私はペンタムの哲學の根本原理を擁護した論文を書いて、前の論文に對する均衡を取つて置いたから一層意を安んずることも出来る次第である。そしてこの論文も同一論文集の中に前のと相並べて再録してある。コーリツヂ論の中では、私は、十八世紀の消極的な否定的な哲學に對する大陸の反動思潮の特質を明かにしようとして試みたのである。そして若しこの一篇だけの効果を考へるものとすれば、私がペンタ

ムの場合に於てその缺點を餘り強調し過ぎて間違つた様に、コーリツヂの場合にはその美點を餘り強調し過ぎて間違つた様にも考へ得られるかも知れない。孰れにしても兩方の場合共、私がペンタム及び十八世紀の思想中の謬想から、自分を切り離さうとするはずみで、私はその反對の方に——尤もそれは實質よりは寧ろ外見上の事ではあつたが——兎に角行き過ぎたかも知れない。併しコーリツヂ論だけに就いて云へば、私は急進主義者と自由主義者との爲めに書いてゐたのであつて、別の學派に屬する學者の思想の中で、それ等の人達に知らせて置くのが最も有益だと思はれる點だけを、最も力強く強調することがその時の私の任務であつたと云ふのが私の辯明である。

コーリツヂ論を載せた評論誌が、私が持主となつてゐた時代の最後に發行された號であつた。一八四〇年の春に、私は評論誌をヒックソン氏に譲り渡した。氏は私の經營中、無報酬で度々極めて有益な論文を寄稿してくれてゐた人である。讓渡しの條件は、舊名の「ウェストミンスター評論」と云ふ名に再び返つて、持主の變つたことを現はさうと云ふだけであつた。ヒックソン氏はこの誌名の下に、評論誌の純益だけを寄稿家に分配して、自分は記者として、又主筆として無報酬で働くと云ふ計劃で、十年間それを經營した。かうした低率の報酬の爲めに執筆者を得ることが困難であつたにも拘らず、氏が急進主義と進歩との機關誌として評論誌の特質を、相當な程

度に維持し得たことは、確かに賞讃に値することである。私は評論誌に書くことを全然止めたのではなく、矢張り時々それに寄稿してゐた。尤もこの評論誌にだけ寄稿したのではなかつた。と云ふのは、「エヂンバラ」評論の發行部数が比較的多いので、自分の云ひ度いことでこの方が却つて適當な發表機關だと思はれた様な時には、この方にも寄稿して見ようと云ふ氣にこの頃からなつてゐたからである。恰度この時分に「米國に於ける民主主義」の最後の巻が出版されたので、私はこの書の評論文を書いて、初めて「エヂンバラ」評論の寄稿家となつた。この論又は「評論と論策」の第二巻の巻頭に再録してある。

第七章 一八四〇年——一八七〇年

爾後の生涯の概観・「論理學體系」の完成・「經濟學原論」の公刊・結婚・東印度商會を辭す・「自由論」の公刊・「代議政體の諸考察」・米國南北戰爭・ハミルトン哲學の吟味・議會生活・餘生

私の生活に就いて人に話すだけの値打のある事柄は、これから後は、極めて小範圍に限られる

ことになる。と云ふのは、これからは云ふに足る程の心的變化もなく、唯だ相變らず心的進歩があつた（積りである）だけだからである。そしてそれは連続した一條の物語とすることも出来ない様なものだし、それに、よし眞に進歩があつたとしても、その跡方は寧ろ私の著述の上に一番よく現はれてゐるだらう。それ故にこれから以後の年月の記録は、ずつと省略して述べることにする。

評論誌と關係を斷つて得た餘暇を、私は先づ第一に「論理學」の完成に利用することにした。一八三八年の七、八月の間に、私は暇を得たので、それを利用して、論理學第三巻の初稿の中で、未だ完了してゐなかつた部分を書くことにした。私は因果律でもなく、又因果律から導かれた系律でもない所の自然界の諸法則に就いての論理學的理論を研究してゐた際に、私は「種類」をば、單なる便宜上の區別ではなく、自然界に於ける實在として認識する様になつて來たのである。この見解は私が第一巻を書いた頃には未だ到達してゐなかつたもので、それが爲めに私は第一巻の數章を修正し補足しなければならなくなつた。それから「言語」及び「分類」を論じた巻と、「誤謬の分類」を論じた章の草稿は、その年の秋に書き、その他の殘部は翌一八四〇年の夏と秋とに書き上げたものである。翌一八四一年の四月からその年の暮まで、私の餘暇の全部を獻げて、この書物を初めから全然書き直ほすことに取りかゝつた。元來私の著書は皆かう云ふ風にして作り

上げられたものである。即ち少くとも二度は全部稿を改めたものである。先づ書物全體の原稿を、終りまで書き上げて、それから更に又全然新に初めから書き直はすのであるが、第二回目に書く時には、初稿の中で、書き換へても目的に適ふことは同じだと思はれる文章や語句はそのまゝ、皆第二稿に織り込むのである。私はかう云ふ風に二重に原稿を作る方法が非常に有益であることを見出した。と云ふのは、かうした著述法は、最初の構想の清新味と力強さとを失はず、而かも長い間熟考した結果、正確さと完全さとに於ても優れてゐるので、他の孰れの著述法よりも立ち優つてゐる。加之、私自身の場合に於ては、初めにその主題全體を一通り終りまで済ませて了つて、自分の云ふべきだけの事柄の内容をば、如何に不完全でも、兎に角一應紙に書き留めてあるから、その後構想や表現の細い點を慎重に彫琢する上に必要な骨折りも、大いに軽減される様に思はれたのである。唯だ私が初稿に於て、出來得る限り注意して完全を期したのは、敘述の順序だけである。これが拙いと云ふと、思想の繋がる筋道が歪んで來る。排列宜しきを得ない思想は、適所に適した様に敘述されるものではない。それでかうした元々からの缺點を有つた初稿は、最後の仕上げの土臺としては、先づ役に立たないものと云つてよい。

私が論理學の稿を新にしてゐる間に、ヒューウェル博士の「歸納的諸科學の哲理」が出た。これは私に非常に好都合であつた。と云ふのは、それは私が豫ねて熱望してゐたもの、即ち同一の

問題を反對の立場から充分論究したものを私に提供してくれたので、私は自分の思想を明確なる反對論に對して辯護する際にも、或はそれを反對の學說に判然對照せしめる際にも、自分の思想を、一層徹底的に且つ多方面的に展開して表はすことが出來たと共に、一層明瞭に且つ強調して表はすことも出來たからである。コントから得た多くの材料は固よりのこと、ヒューウェル博士との論争も、第二回目に稿を起してゐる際に、初めて私の論理學の中に取り入れられたものである。

一八四一年の暮に、この書物の原稿が出來上つたので、私はその出版をマレー(譯者註、有名な出版業者の名)に頼んで見た。然るに彼れはその季節の出版には間に合はなくなるまで握つて置いて、それから出版を拒絶して來たのである。而もその理由は初めから云へば云はれさうな理由であつた。併し私はマレーから拒絶されて、敢て残念と思ふにも及ばなかつた。と云ふのは、それが爲めに私はこの書の出版をパーカー氏に申出て、同氏の手に依つて、一八四三年の春出版されたからである。元々私はこの書が大して成功しようなどとは豫期してゐなかつた。成程、ホエートレー大僧正は、既に論理學と云ふ名稱と、演繹的推論の形式や、規則や、誤謬やに就いての研究とを復活させてゐたし、又ヒューウェル博士の著述も、私の取扱つた主題の他の部分、即ち歸納法の理論に對して、學者の興味を喚起し始めてゐたのである。併し斯程まで抽象的な事項を取扱つた著述が、一

般の人々に受けられようとは思ひも設けなかつた。それは高々學究向きの書物に過ぎない。而かもさうした題目の研究者は、嘗に（少くとも英國に於ては）極めて少數であるばかりでなく、それ等の少數者も主として反對の哲學派、即ち本體論的、（「本具觀念論」の學派（譯者註、デカルトの直覺論）に感測してゐたのである。それ故に私はこの書物に多くの讀者や贊成者があらうなどとは少しも豫期してゐなかつた。従つてこの書物の實際に及ぼす効果も、私が比較的優れた哲學と信じてゐる思想の傳統を傳へると云ふこと以外には、殆ど期待する所はなかつたのである。それで私がいくらかでも直ちに世間の注意を惹く様にならうかと多少の望みをかけてゐた點は、主として、ヒューウェル博士の平素の論争癖であつた。博士の場合に於ける行動を觀察して、私は、恐らく博士がその所説に對する私の攻撃に應酬して、而かも時を移さず應酬して、多少この書物に社會の注意を向ける役目をしてくれはしないかと思つてゐた。成程博士は反駁して來たのであるが、案に相違してそれは七年後の一八五〇年のことで、私がこの書の第三版でそれに答へるのにやつと間に合ふ位のものであつた。この書物があつた種類の本でありながら、どう云ふ譯で斯くも多大の成功を博する様になつたのか、又この書物を買つた人々——私はそれを讀んだ人々とは敢て云はない——の大部分が、どう云つた種類の人達であつたかと云ふことは、今日に至るまで私には全然分らない。併し、その後諸方面に於て、就中（曾てはそんなことがあらうと

は私の殆ど思ひ設けなかつた所の）諸大學に於て、思索の、殊に自由思想的な思索の復興の幾多の徴候が見えて來たことに思ひ合はせると、この書物が斯程の成功を得た事實も幾分解釋され得るやうに思はれる。私はこの書物が哲學思想に何等か相當の印象を残したなどと云ふ妄想に耽つたことは一度もない。人間の智識及び認識能力に關する獨逸流の先驗的（アッペッペ）な見方は、恐らく妥暫らくは英國に於ても、大陸諸國に於ても、この方面の研究にたゞさはる人達の間、（段々減つて行く見込みではないが）、依然として優勢であらう。併し私の「論理學體系」は、當時の學界に於て大いに缺けてゐたもの、即ちさうした傾向とは反對の學說——即ち一切の智識は經驗より來るもの、一切の道德的、智的諸性質は主として聯想作用に與へられた方向に依つて定まるものだ（と云ふ學說の教科書を提供してゐるのである。尤も論理的過程の分析にしろ、或は證明の如何なる公準にしろ、それ等のみで以つて、果して如何程まで悟性の働きの指導乃至は矯正に資し得るものか、私はそれを低く評價する點に於ては何人にも劣るものではない。私は、唯だそれ等に他の必要な諸條件が結び合つた場合、初めてそれ等のものが確かに大なる效用を發揮すると思ふのである。併しかうした問題に關する眞の理論的價値はどうあらうとも、兎に角虚偽の理論の及ぼす弊害だけは如何程誇張しても誇張し足りないものがある。私の信ずる所に依れば、吾の精神の外に存在する眞理が、觀察及び經驗から全然獨立した所の直覺作用即ち意識作用に依

つて認識され得ると云ふ考は、現代に於て、虚偽の學說や有害な制度を支持する所の一大智的支
 柱なのである。かうした理論のあればこそ、どうして起つて来たか身元の明かでない頑迷な信仰
 や強烈な感情も、道理に依つて自己を辯明する義務を一切免れ得ることになり、傲然としてそれ
 自身十全具足した證明であり、存在理由であるとして建てられることになるのである。人心に深
 く植ゑ付けられた有らゆる偏見を聖別する爲めに、これ程都合のいい道具は、これまで工夫され
 たことがなかつた。そして道徳や、政治や、宗教に於けるかうした虚偽の哲學の主なる強味は、
 それが常に數學や、物理学の數學的方面やの證據に對して訴ふる所ある點に存する。それ故にこ
 の虚偽の哲學を、數學や物理学の方面から追放することは、馳てそれをその城塞から驅逐するこ
 とになるのである。然るにこれまでかうしたことが有効に行はれてゐなかつたので、直覺派は、
 私の父がその著「精神の分析」の中でこれを究明した後には於てさへも、一見した所、公にされた
 論文の關する限りでは、全體としてこの論戰に勝を制してゐるかの様に思はれたのである。私の
 「論理學體系」は、數學上、物理学上の眞理なるものの本質を明かにしようとして試みてゐる點に於
 て、直覺派の哲學者達が、これまで難攻不落と頼んでゐたその地點に於て、彼等と白兵戰を演じ
 たものである。そして彼等が眞理の證據は必ずや經驗よりも一層深い所に基くものに相違ないと
 云ふ臆測の例證として常に引用する所の、所謂自明の眞理なるものさうした特質に對して、經

験と觀念聯合とを用ゐて、一種獨特の説明を下してゐる。この目的が果して有効に遂げられたか
 どうかと云ふことは、目下のところ、事尙豫審中サプレユレに屬する。併しよしそれに判決が下された曉に
 於ても、人間の偏見や偏頗心に斯くも根強く根差した思惟の様式から、唯だ單にその思辨的支柱
 を奪つたと云ふだけでは、その克服に向つて僅かに一步を進めたものに過ぎない。併し假令一步
 でも、それは實に必要缺くべからざる所の一步なのである。何故なれば、元來偏見と云ふものは
 哲學の力に依るにあらざれば到底打破され得ないものであるから、偏見の味方となる哲學はない
 のだと云ふことが明かにされるまでは、實はその克服に向つて一步を進めることすらも永遠に不
 可能であるからである。

私は今ではもう、當面の政治に能動的に關心する必要もなくなり、又寄稿家やその他の人達と
 身親ら文通しなければならぬ文書の方角の仕事からも解放されたので、子供らしい虚榮心の時
 代の一度過ぎ去つた思想家には極めて有り勝ちな傾向、即ち自分の交友の範圍を極めて少數の人
 達に限り度いと思ふ心持を、存分に満足させることが出来たのである。一體、現在英國に行はれて
 る様な一般の社交は、それを現在の様な状態に馴致した人達に取つてさへも、實は極めて面白
 味のない行事であつて、それが續けられてゐるのは、それが愉快を興へるからでは決してない。
 意見を異にする問題に就いて眞面目に議論を戦はすことは、一切無作法だと看做されて居り、そ

れに國民一般が快活とか愛想とか云つた方面は不得手であるが爲めに、詰らぬ些事を捉へてそれを心持よく話し合ふ様な技巧——これは前世紀の佛蘭西人の最も優れてゐた技巧であるが——さうした技術を修養することも出来なくなつてゐるので、所謂社交なるものの人を引き付ける唯一の力は、未だ社會の最上位に達してゐない者に取つては、少しでも社會的地位を高めるよすがともなりはしないかと云ふ見込であり、既に社會の上層に位してゐる人達に取つては、主として在來の習慣と彼等の社會的地位に伴ふものと思はれてゐる必要とに背かないと云ふ位の意味のものである。だから、思想乃至感情に於て、極めて平凡な階級に屬する輩は兎に角、苟もさうでない人に取つてはかうした社交は、その人にそれを利用しようとする目的のない限り、極めて詰らないものであるに相違ない。それであるから、現代に於ては、多少たりとも智識上眞に高級な階級に屬する人達は、大抵、社交界との接觸を極めて少なく、極めて稀にしてゐるので、殆ど全然社交界から隠退してゐると看做されてゐる程である。そして多少たりとも心的に優越した人であつて、依然社交を續けてゐる人達は、殆どおしなべて、その爲めに非常にその優越性が損ぜられてゐる。即ち時間の空費は固よりのことであるが、一般に彼等の感情の調子が低級になつてくる。彼等は自分の意見の中で、自分が頻々出入する社會に於て沈黙を守らねばならぬ様な意見に就いては、次第に眞面目さを缺いて來る。彼等はその最も高遠なる理想目的を以つて、非實際

的なるものと見做すか、少くとも、それは餘りに實現の可能性とは懸け離れたもので、單なる一片の空想乃至は空理に過ぎないものと看做す様になる。そして若し幸にして奇特にも、彼等がその比較的高遠な主義を傷められずに保つてゐたとしても、矢張り同時代の人物や事件に關しては、彼等は知らず識らず、自分の平生交つてゐる交友の人達から共鳴を得さうな感じ方や、判斷の仕方を探り入れることになるものである。抑、高度の智力を具へた人物は、非智的な社會に、一個の使徒として這入り得るならば兎も角、さもないかぎりには決して這入るべきものではない。而かも尙、高遠なる理想目的を有つた人物であつても、社交界に這入つて猶且つ安全であり得るのは、實に斯様な高度の智力を具へた人物のみである。智的向上心の強烈な人々でさへも、出來ることならば、常住の交友としては、智識に於ても、智力に於ても、感情の高潔なる點に於ても、少くとも自分と同等、能ふべくは自分よりも優れた人物を選んだ方がよい。加之、若し品性が形作られ、志が定められるのはその人の考の少數の基本點に基くものであるならば、これ等少數の基本點に於ける信念や感情の一致と云ふことこそ、本當に眞面目な人達に取つては、苟も友情と云ふ名に相應はしい程のものに缺くべからざる要件であると、古來始終考へられて來てゐる。これ等の諸事情が一緒になつて、この時分私から進んで實際を求めた人達の數は極めて少なかつた。況んや親交を求めた人の數は尙更少なかつたのである。

これ等極めて少数の親友の中で、第一位に居る者は、前に述べて置いたあの比類なき友人であつた。この頃彼女は、大抵一人の年若い娘と一緒に、田舎の閑静な所で暮してゐた。そして唯だ時折倫敦に来て、夫のテラー氏と一緒に暮してゐた。私はその孰れの場合に於ても甲乙なく彼女を訪問した。そして彼女がテラー氏と大抵別居してゐた間にも私が頻りに彼女を訪問した。とと、時折りには私達が一緒に旅行したことに對して、兎角世間が下し易い誤解をば彼女が一向氣にしないのであることの出来たその品性の強味に對して、私は大いに負ふ所があつた。尤もその他如何なる點に於ても、その年月の間の私達の行爲は、その頃の私達相互の關係が、唯だ強い愛情と打解けた親交だけの關係だと云ふことの眞相以外に、少しでも他の想像を容れる餘地は微塵程も與へなかつたのである。何故なれば、私達は元來社會の命令は、斯様な全然個人的な問題に對して拘束力あるものだと考へてゐなかつたのであるが、併し私達は、自分達の行爲が少しでも彼女の夫の面目を傷つける様な、從つて又彼女自身の面目を傷つける様なものであつてはならないと云ふ義務感も抱いてゐたからである。

私の精神の進歩は今や彼女のそれと相携へて進み行くことになつたのであるが、この心的發展の第三期(とも名付くべき時期)に於て、私の思想は廣さに於ても、又深さに於ても等しく増して來た。即ち私は一層多くの事物を理解すると共に、これまで理解してゐた事物を一層徹底して

理解する様になつたのである。私はベトナム主義に對する反動の方に一旦傾き過ぎてゐた私の立場から今や完全に復舊した。私がさうした反動思想の頂上にあつた頃には、社交界や一般社會とは多くの點に於て根本的に所信を異にしてゐた者としては相應しからぬ程度迄、私は確かに彼等の普通の考に對して寛大になり、當時さうした普通の考の中に起り始めてゐた皮相的な改善策に賛成して苟安を貪らんとしてゐたものである。そして私の思想の中で比較的明瞭に異端的部分をば中止しようと、今から見ると到底是認し得ない程までも傾いてゐたのである。それが今ではその異端的部分を主張する事こそ、却つて社會を更生せしむる上に多少とも資する所ある殆ど唯一の考だと看做してゐた。併しこればかりではない。私達の考は、私が曾て極端なるベトナム主義者であつた時代に於ける私一己の考よりも、更に一層異端的であつたのである。その時代社會の諸制度の根本的改善の可能性に對する私の考は、舊派の經濟學者の見てゐた所以上には殆ど進んでゐなかつた。今意味せられてゐる様な私有財産制と、遺産相續制とは舊派の經濟學者に取つてと同様に、私に取つても、立法の究極の標語であるらしく思はれてゐた。そしてこれ等の制度より來る不平等を緩和する爲めには、長子相續制と限嗣相續制とを撤廢するにあると云ふ點以上には少しも進んでゐなかつたのである。或る人達は生れながらにして富み、大多數の人達は生れながらにして貧乏であると云ふ事實に存する不平等——それは完全に根治し得べきもの

であるかどうかは別として、兎に角不平等であると云ふ事實には變りはない、——を除去するに就いて、これ以上に進み得ると云ふ考は、當時の私には空想としか思はれなかつた。そして僅に、教育の普及から、人口に對する自發的制限が行はるゝ様になつて、貧民の生活も稍、見直したもになるだらう位の見込を付けてゐたのに過ぎなかつた。詰り、當時の私是一個の民主主義者ではあつたが、社會主義者では毛頭なかつたのである。ところで、今や私達は、過去の私よりも遙かに民主主義者でなくなつてゐた。と云ふのは、教育が今日の様に見る影もない不完全な状態で續く限りは、民衆の無智、殊にその私慾と獸性とは恐るべきものだと思へたからである。それで私達の社會改善に關する究極的理想は、民主主義以上遙かに進んで、明かに私達を廣く社會主義者と云ふ一般的名稱の下に截然類別するものとなつたのである。成程私達は一方に於て、大概の社會主義的社會組織の中には含まれてゐると推定されてゐる所の、あの個人に對する社會の壓制に對しては極力反對してゐたのであるが、同時に又私達は、社會がもはや遊食者と勤勞者との二階級に分たれなくなる時代、働かざる者は食ふべからずと云ふ原則が、實に貧者に對してのみならず、萬人に對して公平に適用せられる時代、勞働の生産物の分配が、今日行はれてゐる様な甚しき程度に於て、出生と云ふ偶然事に基いて行はれる事なく、萬人の承認せる公正の原則に基いて取り行はれる様になる時代、人類が、専ら自分達一己に歸すべき利益の爲めに努力すると云ふ

のではなく、自分達が屬する所の社會と共に相煩つべき利益の爲めに、奮闘努力する様になることは、もはや人類に取つて不可能事でもなく、又不可能事であるとも考へられなくなる時代、さうした時代の來らんことを期待してゐたのである。將來の社會問題は、如何にせば、個人の行動の最大限の自由と云ふ事をば、地球上の生産原料の共同所有といふ事、及び合力の利益に萬人平等に與かると云ふことに調和せしめ得るかと云ふ點に在るものと私達は考へた。尤も私達は、果して如何なる形式の制度に依れば、正にこれ等の目的が最も有効に到達され得るものであるとか、乃至はそれ等の制度が果して如何程近い、又は遠い時期に於て實行可能となるべきかとか云つた様なことを、既に豫測し得たと考へる程僭越ではなかつた。併し私達は、斯様な社會的變革をば可能ならしめ、若しくは望ましくならしめる爲めには、今日勞働階級を構成してゐる所の無教養の大衆にも、又彼等の使用主の大多數者にも、共に等量の性格の變化が起らねばならないと云ふことを明瞭に認識してゐたのである。即ち双方の階級共、これまでの様に唯だ狭い利害の爲めに働くとは云ふのではなく、廣く博愛的な目的の爲め、せめては公共的社會的な目的の爲めに、働き且つ合力すると云ふことを實行に依つて悟る必要がある。尤もこれを爲すだけの能力は、以前から常に人類に存在してゐたものであつて、それは現在消滅してもゐなければ、又將來消滅しざうにもない。教育や、習慣や、情操の陶冶などが、凡庸者にまでも、進んで祖國の爲めに戦ふ

だけの意氣を有たしめると同様に、祖國の爲めに田を耕し、機を織るだけの意氣を有たしめるものである。成程一般の人々をこの程度にまで向上せしむるのは、極めて徐々たるものであり、且つ數代に亘つて連續的に行はれる所の系統的教養に依らねばならぬことは云ふまでもない。併しかうした障碍は決して人間性の本質に存するものではない。事實共通福祉に對する關心は、現在の處、一般には極めて微弱な心的動機ではあるが、併しそれは決して本來強烈となり得ないものだからと云ふのではない。それは詰り、人の心が私利にのみ資する事物に日夜傾注されてゐる如く、共通福祉に傾注される様にはまだ習慣附けられてゐないからなのである。現世は日常生活の要求に依つて利己心のみが活躍させられてゐるが、これが若し利他心も同様に日常生活の要求に依つて活躍させられる様になり、更に背後から名譽慾や廉恥心に依つて刺戟される様になると、それは凡庸者にあつてさへも、最も獻身的な犠牲的精神と、最も奮闘的な努力心とを起させるに充分なものである。現在の社會相の一般的特質となつてゐる根深い利己主義が、斯程まで根深くなつてゐる所以は、一つは現存社會制度の全行程が利己心の養成にのみ資する様になつてゐるからなのである。そしてさうした傾向は或る點に於ては、近代の社會制度の方が古代のそれよりも一層甚しくなつてゐる。と云ふのは、個人が公共の爲めに無報酬で働かされる場合が、近代生活に於ては、昔の比較的小さな共和國に於けるよりも、遙かに少くなつてゐるからである。尤も私

達はかうした考察を爲したからとて、それが爲めに私利に代はるべきものが何も與へられてもゐないし、又與へられることも出来ないのに、私利の誘因を全然社會的活動から無くして了はうとする様な未熟な企圖の愚劣なる所以をば、決して看過しはしなかつたのである。私達は有らゆる現存の諸制度や社會組織をば、(私が曾てオースチンの口から聞いた言葉を借りて云へば)「單なる暫定事項」と看做してゐた。従つて私達は、少數の選ばれたる人達に依つて行はれてゐる社會主義的實驗(例へば諸消費組合の如きもの)の一切をば、無上の欣快と關心とを以つて歡迎してゐたのである。蓋しこれ等の實驗は、その事の成敗を問はず、それに參照する人達の内に、一般の福祉を直接目的とする所の動機に基いて行動する能力をば發達せしむることに依つて、或は又彼等をして、自分達や他の人達がさうした行動を爲し得ざる所以の弱點をば自覺せしむることに依つて、それ等の人達に最も有用な教育を施さずには置かないからである。

「經濟學原論」の中には、かうした考を皆發表してあるが、それはその第一版に於ては比較的不明瞭に且つ不充分に、第二版に於ては稍・明瞭に且つ稍・充分に、第三版に至つては全然曖昧な所なく述べ盡してある。かうした表現の相違は、一部は時代の推移にも原因してゐる。この第一版は一八四八年の佛國革命の前に書いて印刷に附したものであつて、この革命以後、社會の人心は前よりもずつと開けて、思想の新奇な點をも受容する様になり、少し前には耳目を聳動して

みた様な學說でも穩健と思はれる様になつてゐたのである。それで、第一版に於ては、社會主義の難點が非常に強調されてゐたので、全體の調子は寧ろ社會主義に反對の色を帯びてゐた。それから一兩年の間、私は大陸に於ける第一流の社會主義的思想家の研究と、かうした方面の論争に含まるゝ諸問題の全範圍に互つて思索し、論議することに多くの時間を費してゐた。その結果、その題目に就いて第一版に書いてあつたことは大部分削つて、一層進んだ考を表はした議論と考察とを、これに代へることにしたのである。

「經濟學原論」は「論理學體系」よりも、否、これまで筆を執つた如何なる重要な論文よりも遙かに速く出来上つた。これは一八四五年の秋から始めて、一八四七年の暮前には既に印刷に廻はずことが出来る様になつてゐた。而かもこの僅か二ヶ年餘りの日子の中で、六ヶ月と云ふものは、この方の執筆を全然中止してゐた。その間私は、愛蘭の荒蕪地に農民財産の設定を提唱して、「モーニング・クロニクル」紙（これは思ひ掛けもなく私の所志に熱心に共鳴して來たものである）上に幾篇かの論文を書いてゐたのである。これは一八四六年から四七年に互る冬期の饑饉時代の間のことであつた。恰度その時、私には當面の窮乏に對する救濟策と愛蘭人の社會的經濟的狀態の永久の改善策とを結び合はせる唯一の方法の様に見える政策に對して、世人の注意を喚起する好機會が、目前の峻嶒なる窮迫に依つて與へられた様に思はれたのである。併しこの考は全

然耳新しくめづらしい考であつた。斯様な處置に對する先例はこれまで英國に於ては一度もなかつた。そして英國の政治家や一般社會が、（他國では普通であるが）英國では減多に見られない所の凡ての社會現象に關して全然無智識であつたが爲めに、私の努力も全然失敗に終ることになつた。それで議會は、荒蕪地の大開拓、及び小作人の身分を改めて地主となすことをせずに、彼等窮民を被救恤者として扶養する爲めに「貧民救助法」を通過したのである。若し幸にして國民がその後、舊來の害患と藪醫式の救濟策との共同作用の爲めに抜き差しならぬ苦境に陥らなかつたとすれば、それを免かれた所以のものは、全くあの最も思ひ掛けない驚異すべき事實、即ち饑饉から始まつて、移出民に依つて續行されてゐる愛蘭の人口減少のお蔭なのである。

「經濟學原論」が盛に賣れたのは、要するに社會がかうした書物を要求し、且つそれを讀むだけの用意が出来てゐた證據である。これは一八四八年の初に出版されたのであるが、初刷一千部は一ヶ年足らずで賣り盡され、一八四九年の春にはもう一千部だけ發行された。そして一八五二年の初には更にまた第三版千二百五十部を發行したのである。この書物は發行の當初から、既に一個の典據として絶えず引用され、参考に供せられてゐた。何故なれば、これは密に抽象的な學術的の書物であるばかりでなく、又應用の書物でもあり、且つ經濟學なるものをば一個の孤立した學問として取扱はず、或る一層大きな全體の一部として取扱つてあるからである。即ち經濟

學は社會哲學なるものの一分科であり、而かも他の一切の諸分科とは極めて密接に繋り合つてゐるものであるから、その結論は、經濟學特有の領域に於てすらも、僅かに條件附で眞たるに過ぎないものであり、その上、直接その研究範圍の内に存在しない所の原因からも絶えず作用及び反作用を受けてゐるものである。加之又、果してそれは實際上の手引たるの資格ありやと云ふことに關しても、他の種類の考察と切離しては、決してありとは云ひ得ないものである。實際の處、經濟學はそれ自身の光のみを以つて、人類を指導しようなどと云ふ僭越なことは、未だ曾て主張しない。尤も、經濟學だけしか知らない人達（それ故に經濟學をも實はよく知つてゐない人達）が、この人類指導の役目を引き受けて、そのなけなしの貧弱な智識だけでこの大役を勤めるより外なかつたこともあつた。それにも拘らず、幾多の感傷的な經濟學の敵、及び感傷的な假面を被つて實は爲めにする所ある一層多數の經濟學の敵等は、經濟學に對する他の不當なる非難に加へて、更にさうした非難をも巧みに世人に信ぜしめて來たのである。それで私の「原論」は、その中に述べてある意見の多くが極めて自由放膽であるにも拘らず、目下のところ經濟學の最も受のよい著述となつてゐる所から、斯くも重要な研究である經濟學の敵をしてその武裝を解かしむる上に役立つたのである。尤も斯學の解説としてのこの書の價值、及びこの書の示唆する様々な應用の價值如何と云ふことに就いては、無論他の批判に委せるより外はない。

これから可成り長い間、私は大部な著述は一つも公にしなかつた。尤も私は相變らず新聞や雜誌などには、時々論文を書いてゐたし、又私が社會一般の利害に關する問題で往復してゐた書翰（その大部分は一面識もない人とであつたが）は可成りの嵩に上つてゐた。又この時分のことであつたが、私は他日出版する積りで、人生や社會生活の根本問題の或るものに就いて、様々な論文を書いたり書き始めたりしてゐた。がその中の數篇に關しては、私は既にホレースの教訓の嚴律を非常に越えてゐたのである。（譯者註、ホレース（紀元前六五—一八）は羅馬の詩人哲學者であるが、爰に謂ふ教訓かと思ふ、その意味は「誰れに、何を、何處で、話すかを注意せよ」と云ふことであるが、果してこの句を指したものであるか疑を殘して置く。） 私は相變らず、強烈な關心を以つて、社會や政治の動きをちつと見詰めてゐた。併しそれは全體として餘り私を元氣附ける様なものではなかつた。一八四八年の後に來た歐洲の反動的傾向と、一八五一年十二月に於ける無主義無定見の篡奪者の成功との爲めに、（譯者註、ルイ・ナポレオンが同年十二月二日軍隊の後援に依り憲法を廢し、任期十年の大統領となり、翌年遂に皇帝となつた事を指す） 差し當り佛國及び大陸諸國に於ける自由若しくは社會改善の見込は一切打ち壞された様に思はれたのである。併し英國に於ては、私は、自分の青年時代の意見の多くが一般の承認を得、又私がそれまで斷えず主張し續けて來た制度改革の多數も實現され、若しくは實現の途中にあるのをこれまでも見たし、又現に見つゝあつたのである。尤もこれ等の變革には、私が豫ねて期待してゐた程の、人類の福祉に對する利益が伴つて來なかつた。それは詰りかうした變革も、人類の生活に於ける凡て

の眞の改善の依つて基く所のもの、即ち人類の智的、道德的狀態の改善を促すまでには至らなかつたからのことである。否、そればかりではない、かうした變革の行はれる傍、同時に作用しつゝあつた様々な頽廢の原因が改善への趨勢と相殺して尙餘りあるのではないかとさへも疑はれる節もあつたからである。私は多くの虚偽の思想が、虚偽の思想の源である所の心の習性を少しも變へることなくして、眞實の思想と取り換へられ得るものであることをば、經驗に依つて悟つた。例へば、一般の英國人は、國民としての英國人が自由貿易説に改論した以後も、全くそれ以前と同様に、經濟の諸問題に就いてはうぶであり、無分別である。そして、經濟よりかもつと高尚な性質の諸問題に就いても、思想若しくは感情の習性は依然として改善されず、又誤謬に陥らないだけの用心も何等堅固になつてゐない。何故なれば、成程彼等は或る種の誤謬からは脱し得たのであるが、彼等の精神の一般的訓練は、智的にも道德的にも、少しも變更されてゐないからである。私は今日では、人間の考へ方の根本組織に一大變化が起らない限り、人類の生活の太改善は一切不可能であると確信してゐる。宗教上や、道徳上や、政治上やの舊思想は、今や有識者の間に、非常に信用を失つてゐるので、従つてその效益の大半をも失つたことになつてゐる。而かも同時に、これ等の舊思想には、かうした方面の問題に對して一層進んだ思想の發達に對して有力な妨害となるだけの生命が尙ほ存してゐるのである。凡そ、世の中の哲學的傾向を有つた人達が、

も早やその宗教を信じ得なくなつた時、乃至はその宗教の本質を一變する程の修正を加へずしては、その宗教を信じ得なくなつた時には、一種の過渡期が始まるものである。即ち信念の微弱な、智力の麻痺した、主義の次第に弛緩し行く所の過渡期が始まるのである。そしてかうした時代は結局それ等の人達の信仰の根柢に一つの革新が行はれて、遂に、宗教上なり、單に人事上なりに於て、彼等が心から信じ得る所の或る一定の信仰の發展し來るまでは、必ず繼續するものである。そして一般の事物がかうした状態にある時には、斯様な革新を促進する上に寄與する所なき思索や著述は、一切、殆ど、その當座限りの價值しか有つてゐないものである。當時の社會一般の人心の状態を見渡したところ、かうした方面に於ける傾向の徴候とも見るべきものは殆どなかつたので、人間改善の差し當りの見込に就いては、私は樂觀し得なかつたのである。唯だ最近、自由思索の精神が勃興して來て、英國の精神界も徐ろに解放されさうな稍々頼もしい見込が付いて來てゐる。そして傍、歐洲大陸方面に於ても、政治的自由獲得運動が洋々たる前途を以つて復活して來たので、それと相俟つて、人間生活の現状は、比較的有望な形相を呈して來てゐる。

●この文章は一八六一年頃にかいたものである。

只今話して來た時代と、現在との間に私の私生活に於ける最も重大な事件が一つならず起つたのである。その第一の事件と云ふのは、一八五一年の四月に私が一人の婦人と結婚したこと

ある。その婦人と云ふのは、長い年月お互に友人以上の関係にならうとは思ひ付けてもみなかつたのであるが、その年月の間、その類なき爲人の爲めに、彼女の友情が私に取つては、幸福の無上の源とも、又進歩の最大の泉ともなつてゐた人なのである。成程私の一生の内に、假りに實行し得る様な時機が來たとすれば、かうした二人の生活の完全なる結合は、何時でも私の最も熱望した所であつたに違ひないと思ふが、併し、私にしても、私の妻にしても、私も心からの尊敬を拂ひ、妻も心からの愛を獻げてゐたその人の時ならぬ死に依つて、さうした特權を享受するよりは、寧ろそれを永遠に棄て去つた方が、如何ばかりか願はしいことであつたらう。併しその不慮の出來事は一八四九年の七月に起つたので、既に長い間事實として存在してゐた思想や、感情や、著作やの協同の上に、更に吾々の全生存の協同を加ふることに依つて、爰に私はこの災を轉して、この上もなき幸福を自分の上に齎らすことを許さるゝに至つたのである。併しこの祝福は私には七年半しか與へられなかつた。嗚呼、僅かに七年半！ その損失が如何ばかりのものであつたか、又今も尙あるかと云ふことを、臆氣にでも髮髻せしめ得る言葉を私は知らない。併し私は彼女の願のあつた所を明かに知れるが故に、私は今日では、私の餘生のあらん限りを盡して、彼女のありし日を偲び、その佛と相語つて得來たる所の敗殘の力を以つて、彼女の遺志を繼ぎ行くことに努力してゐる。

二人の人が、その思想や思索を全然共有してゐる時、二人の人が、智的乃至道徳的に興味ある有らゆる題目に就いて、日常坐臥の間に互に論じ合ひ、一般の讀者を目安にして書いた論文に於て吟味するを普通とする、乃至便宜とする程度以上に、遙かに深い處までも探りを入れる時、若しくは二人の人が、同一原則から出發して、相携へて辿つた過程に依つて、その結論に到達する時、思想の獨創性を孰れに歸すべきかと云ふ問題を論ずる上に於て、二人の内孰れが實際に筆を執つたかと云ふ問題は、殆ど問題にはならないのである。文を作る上に寄與する所最も少なかつた者でも、思想を構成する上には寄與する所最も多いこともあり得るのである。その結果として出來上つた論文は、實は兩人の共同生産物なので、従つて銘々の寄與した部分を分解して、これは甲のもの、あれは乙のものだと斷言することは、往々にして全然不可能なことがあると云はなければならぬ。かうした廣い意味から云へば、私達の結婚生活の七年間の著述ばかりではなく、それに先立つ親友關係の幾多の歲月の間に發表した凡ての著作も、皆私の著作であると同じ程度に於て彼女の著作でもあると云はなければならぬものである。そして彼女のさうした分前は、年の進むにつれて斷えず大きくなつてゐた。尤も中には、彼女のものとも云ふべきものを明かに選り別けて、特にそれと指摘する事の出來る様な場合もある。彼女の心が私の心に及ぼした一般の影響以上に、更にこれ等の共同の著作物に於ける最も貴重なる思想及び形態も、——即ち

重要な結果を最も多量に産出し、従つて著作そのものの成功と名聲とに寄與する所最も多かつたところの内容及び外形も亦、彼女の獨創したもの、即ち彼女の心から輝き出したものであつて、それ等に於ける私の持分と云へば、私が先進諸學者の思想の中から取つて、それを自分の思想體系中に織り込み、漸く私のものとなつてゐる位の思想に於ける私の持分よりは決して大きくないものである。私の文筆生活の大部分の間、私の彼女に關する職分は、獨創的思想家達に對する一祖述者として、又彼等と一般社會との仲介者としてのそれであつた。この職分は、私が可成若い頃から、思想の領域に於て私に引き受けるだけの資格のある役割の中で、一番有用だと看做してゐたものである。何故ならば、私は抽象的な學問（即ち論理學や、形而上學や、經濟學及び政治學の純理論的原則）に於ての外は、私の獨創的思想家としての力をば、常に極めて低く見積つてゐたのであるが、併し誰れからでも教を受けたいと云ふ心持と、誰れの説でも理解するだけの能力とに於ては、私は同時代の大抵の人達よりは遙かに優つてゐると自ら信じてゐたからである。と云ふのは、新舊孰れを問はず、凡そ一の思想の辯護論は、よしそれが間違つてゐるとしても、その根柢には或は眞理の鑛層が存在するかも知れない、よし存在しない場合でも、せめてそれ等の辯護論を尤もらしく見せかけてゐるものの正體をば突き止める事は、眞理に對する一つの貢獻となるだらうと云ふ信念を以つて、それ等の辯護論の吟味すべき所以を、私程強く主張してゐた人は

他に殆どなかつたからである。その結果、私はかうした方面こそは、自分が世に役立ち得る領域であつて、自分はこの方面に於て働くべき特別な義務を負つてゐると考へてゐた。殊に私は次の様な理由で尙一層さう信じてゐたのである。それはコーリツヂ主義者や、獨逸の思想家や、カーライルやの——凡て私が幼時から仕込まれてゐた考へ方とは全然反對の思想を知るやうになつて、私はこれ等の諸思想には幾多の誤謬を含むと共に、又幾多の眞理をも含んでゐる事を信ずる様になつた。而も彼等はそれ等の眞理をば、通例超越的な、神祕的な用語の中に封じ込めて、敢てそれを公開する氣もなければ、又公開するすべをも知らなかつたので、さうした障壁さへなければ、それ等を充分に受け容れるだけの能力ある人達にも、それ等眞理は遂に開かれずゐた。そして私はその眞理をば誤謬から引き離して、哲學上私と同じ立場にある人達にも分る様な、且つ厭はしくない様な用語で、それを説明することは、必ずしも絶望的でないと思つてゐたのである。これだけ説明して置けば、最も優れた才能を有つた人——その人の天才が一度思想的方面に向つて發展して來た時には、それは私よりは遙かに進んだ、而も他の人達の場合に於ける様に、私がその中に誤謬の混在せることを少しも看破し得ない眞理をば、絶えず發見し續けてゐた——さうした天才を有つた人と、私が智識上の親交を結ぶ様になつた時に、私の智的發達の大部分が、それ等の眞理を同化することにあり、私の智的事業の最も貴重な部分が、それ等の眞理を私の一般の

思想體系に結び付ける橋を架け、道を開くことにあつたのは、蓋し容易に信じられるであらう。

* 私の心的發達の諸階段の中で、彼女から思慮を蒙つたものは、這般の消息に全然通じてゐない人達が、或は臆測するかも知れない様なものとは非常に相違してゐた。例へば、法律上、政治上、社會上、家庭上の有らゆる關係に於て、男女間に完全な平等がなければならぬと云ふ私の強固な信念は、事に依ると彼女の考を採つたもの、乃至は彼女から教へられたものと推測する人があるかも知れない。處が事實は大違ひで、この確信は、實は私が政治上の問題を考察して得た最初の結果の一つなのである。そして私がこの確信を強く抱いてゐたことが、雖て、彼女の私に興味を感ずるに至つた抑々の原因として、他の何ものよりも有力であつたと私は信じてゐる。成程實を云ふと、この考も、私が彼女を知るまでは、私の頭の中で、殆ど一個の抽象的原理たるに過ぎなかつた。即ち私は男が他人に隷従しなければならぬ理由を考へ得ないと同様に、女が他人に隷従しなければならぬ理由も考へ得なかつた。私は婦人の利益は、男子のそれと同様に充分保護せらるべきものであると確信してゐた。そしてさうした保護は、婦人を拘束すべき法律を制定する際に、婦人にも男子と同等の發言權がなくては到底得られさうにもないと確信してゐたのである。併し「婦人の隷従」と云ふ書物の中に書いてある様な、婦人の無能力より來るあゝした廣汎な實際的意義を悟るに至つたのは、主として彼女に教へられた結果なのである。若し彼女の比類なき人間性に関する智識や、道德的社會的影響に對する理解などがなかつたならば、それでも無論私は依然現在の考を抱いてゐたに違ひなからうが、併し婦人の地位の低いことから生ずる様々の結果が、現在の社會の有らゆる害悪や、人生の改善の有らゆる困難と相交錯してゐる状態に就いては極めて不十分にしか認識し得なかつたであらう。私が實際今でも尙心苦しんでゐることは、私がこの問題に關する彼女の最善の思想を再現し得なかつたことの如何に多かつたか、又假りに彼女自らがこの問題に關するその考を悉く論文に書き表はした場合は、若しくは假りに生きてゐて、この問題に就いての私の不完全な論述を改訂し修正してくれた場合に、——彼女を生きて置れば必ずさうしたに相違ないと思ふが、——出來たと思はれるものに較べて、あの小論文が及ばざること如何に甚しいかと云ふことである。

私の著書で彼女の持分が漸く顯著になつて來た最初の書物は、「經濟學原論」であつた。「論理學體系」の方は作文上の比較的些細な點を除いては、餘り彼女の力に俟つ所はなかつたのである。尤も斯様に行文の點から云へば、私の著作は大小孰れも皆、彼女の嚴正にして透徹した批評の爲めに多大の利益を得たものである。「經濟學原論」の中で最も輿論に影響を與へた一章、即ち「労働階級の將來の豫想」に就いて論じた一章は、全然彼女に歸すべきものなのである。蓋し本書を初めて草した時には、この一章は全く存在してゐなかつたものであるが、彼女はかうしたことを論じた一章を是非設けることが必要で、それを缺いては、この書に畫龍點睛を缺くの恨みあることを指摘してくれた。詰り彼女は私がこの一章を書くに至つた原因なのである。そして、この一章の比較的概括的な部分、即ち労働階級の當然あるべき状態に關して唱へられてゐる二つの相反した學說の敘述と議論とは、全然彼女の思想を解説したものであり、時には彼女自身の口から漏れた言葉その儘を記したのもある。成程、經濟學の中で純粹に學術的な部分は決して彼女から教へられたものでない。併し、この書物に、これまでの經濟學の解説書であつて、苟も學術的と云ひ得る位のものとは全然異なる趣を與へて、この書物をして、これまでの解説書に對して反慮を抱いてゐた人達の心を緩和する上に相當役立つものたらしめた所以のあゝした全體の色調を、

この書物に與へてくれたのは、主として彼女の力であつた。かうした色調の「出」来る原因は、主として、本來別物である所の「富の生産」の諸法則と、「富の分配」の諸法則との區別を明かにした點に在る。即ち前者は物の性質に依存する眞の自然界の法則であり、後者は一定の條件に制約されて、人間の意志に依存する法則なのである。然るに月並の型の經濟學者は、これ等の兩者を混同して、經濟的法則なる名稱の下に一括し、人力を以つてしては到底破る事も、變更する事も出来ないものと思ひ込んでゐる。即ち彼等は、吾々の地上の生存の不可變的諸條件に依存せる事物にも、又實は唯だ特定の社會制度の必然的結果に過ぎないものであつて、従つてさうした社會制度と外延を同じうせるものたるに過ぎない事物にも、同一の必然性を附與してゐるのである。成程或る一定の制度と習慣とが與へられてゐる限り、勞賃や、利潤や、地代やは或る一定の原因に依つて決定されるものである。然るにかうした種類の經濟學者はこの必要缺くべからざる前提の假定を飛ばして、これ等の原因は人力を以つてしては如何ともすべからざる一つの内在的必然性に依つて、勞働者と、資本家と、地主との手に、生産物を分配する際にそれ／＼落つる所の分前を必ず決定するものと論斷してゐる。成程私の「經濟學原論」は、それ等の原因の豫想する諸條件の下に於て、それ等の原因が果して如何に作用するかを科學的に見極めようと目指してゐる點に於ては、從來の經濟學書の孰れにも決して劣るものではない。併し私の經濟學はこれ等の諸

條件をば究極のものとして取扱はない事に於て、實は籠を垂れたものである。私の經濟學は、自然界の必然性に基くものでなく、現存の社會制度と結び合つた必然性に基く所の經濟上の諸法則をば、單に暫定的なもの、従つて社會改良の進歩に依つて非常な變化を蒙るべきものとして取扱つてゐるのである。いかにも私が、かうした物の見方をば、サン・シモン派の思辨が私の内に喚び起してくれた思想から一部分學んだ所もあつたのは事實であるが、併しそれが私の書物全體に浸透して、それを躍動せしむる所の一個の活原理となつたのは、實に私の妻の指導の爲めなのである。この一例は、私の著作に對する彼女の貢獻の一般的特質をよく明かにしてゐる。即ち抽象的な、純學術的な要素は概して私自身のものであつたが、本來人間的な要素は主として彼女から出たものであつた。即ち凡て純理論を人間の社會や、人間の進歩の當面の緊要事に當嵌める方面に關しては、思索の大膽なことに於ても、實際的判斷の用心深いことに於ても、等しく私は彼女の生徒であつた。と云ふのは一方に於て、彼女は將來の社會や人事の秩序に就いての豫測に於ては、獨りで考へてゐる時の私よりも、遙かに勇敢であり、遙かに先見の明を有つてゐた、そしてその豫測に於ては、今日普遍的原則と隨分壓・混同されてゐる所の制限的意義を有つた諸法則の多數は、適用し得なくなるものだからである。それで私の著作の中で、殊に「經濟學原論」の中で、將來あり得る事物、例へば、社會主義者が肯定する時に、經濟學者が一般に猛烈に否定してゐる

様な事物に對して考察を下してある部分の如きは、若し彼女がなかつたならば、全然缺如してゐたか、よし暗示されても、それは極めて臆病に、且つもつと限定された形式で示されたかの執れかであつたらう。斯様に彼女は私を人間界の事象に對する思索に於て、より大膽にしてくれたのであるが、併し又、他面に於て、彼女の實際的な心的傾向と、實際上に横はる障礙をば殆ど誤りなく秤量する能力とは、私の心の中に在る眞に空想的な傾向をば悉く抑止してくれたのである。彼女の心は凡ての觀念に具體的な形を與へて、それ等の觀念が實際に行はれる状態に就いての概念を胸に描いてゐた。そして現在の人類の感情や行爲に關する彼女の智識は、殆ど誤がないと謂つていい位であつたので、彼女は如何なる提案でも、實行不可能なものゝ弱點をば見逃すことは殆どなかつたのである。

私が「論理學體系」を書いた時に、直接援助を受けた人は、唯だベイン氏だけである。氏がその後その哲學上の著作で盛名を馳せたのは、極めて當然のことである。氏は論理學の原稿を印刷に送る前に、全部密に目を通してくれて、更に科學から幾多の實例や例證を附加して、その内容を豊富にしてくれた。私はそれ等の多數をば、氏が私の論理學上の見解を確證する爲めに書き添へてくれた若干の断片的所説と共に、殆ど原文の儘で差し加へて置いた。

私がコントから受けた恩恵は、彼れの著作からばかり——それも彼れの「實踐哲學體系」の中で當時公にされてゐた部分からばかりに過ぎなかつた。而かも私がこの昔話の中に既に述べた所からでも知られる通り、彼れの著作から受けた利益とても、實は世間に仕々傳へられてゐる程の分量では決してない。「論理學體系」の第一巻は、その書物の根本思

想を悉く含むものであるが、その内容は、實は未だ私がコントの著述に接しない前に、完成してゐたものである。成程私はコントから幾多の貴重な思想を得た。殊に「假設論」の一章と、「代數學」の論理に就いて立てた見解とに於ては、著しく彼れに負ふ所あるものではあるが、併し論理的方法の適用に關する私の考に、彼れが何等か根本的な影響を及ぼしたものは、唯だ最後の巻の「道德的語科學の論理」に就いての一章のみである。かうした影響に就いては、私は既にこの「自傳」の初めの方に記して、その詳細を明かにして置いた。

「經濟學原論」の第一版の贈呈本の中には、この書が彼女に俟つ所多かつたことを感謝した數行の獻本辭を巻頭に附して置いたものもあつた。唯だ彼女が餘り表立つことを好まなかつたので、普通本にそれを差し加へることが出来なかつただけである。

私の結婚生活が始つてから、それが突然な悲劇に終るまでの間に起つた私の外的生活の主なる出來事と云へば、(若しその中に、私が初めて家附の病氣に襲はれて、その結果、健康を回復する爲めに、六ヶ月以上も、伊太利や、シシリーや、希臘などへ旅行したことを勘定に入れないとすれば)、それは東印度商會に於ける私の地位に關することであつた。一八五六年に私は、三十三年餘もの間勤めてゐた局の局長に昇進した。この地位、即ち印度通信文書審査官の地位は、東印度商會内國部の中で、總務局長の地位に次いで最も高い地位なので、印度諸政府との通信文書の中で、陸海軍と財政とを除いた他の凡ての文書の總監督の役目を持つてゐたものである。私はこの職の存在してゐる限り、その椅子を汚してゐた。それは二年餘りであつたが、その後、議會

は——云ひ換へればパーマーストン卿は、國王直屬の印度政府の一部局としての東印度商會なるものを廢止して、印度の行政をば、英國議會の二三流所の政客の爭奪物に變へたのである。會社は無論自己の政治的生命の斷絶に對して抗爭したのであるが、私は實にその抗爭の中心人物であつた。そしてかうした無鐵砲な變更の愚劣にして有害なることに關する私の意見に就いては、私が會社の爲めに草した公開狀や請願書や、それから私の「代議政體論」の最後の一章などを参照せられ度い。尤も私一身上の都合から云へば、私自身はこの變革の爲めに却つて得をすと思つた。と云ふのは、私は既に印度の爲めに私の生涯を十二分に獻げて來たもので、この際充分な報償(譯音註、年金一千五百磅であつたと云ふ)を貰つて退職することは、好ましくないこともなかつたからである。この變革が完了した後、最初に印度事務大臣となつたスタンレー卿は、光榮にも、私に印度政務評議員會の一員たらんことを申出られた。そしてその後、評議員會の缺員を補充しなければならぬ機會が來るや否や、今度は評議員會自身から再びこの申出を受けた。併し新制度の下に於ける印度政府の状態に鑑みると、私がそれに參與しても、徒らに心を苦しめ、努力を徒費する以外何事も期待されさうになかつた。事實その後につた出來事も、私をしてこの申出を謝絶したことを後悔せしむるやうな狀況ではなかつたのである。

私が公職生活を退く直前、二年程前から、妻と私とは共同して「自由論」を書いてゐた。私は

一八五四年に、最初はそれを短い論文にする計劃を立てて、書き上げてあつた。これを書き變へて一巻の書物にしようと思ふ考が初めて胸に浮んだのは、一八五五年の一月に、カピトル(譯音註、ラン丘にある。ジュピターの殿堂で、共和制の時代には國會議事堂であつた所の廢墟のこと)の階段を登つてゐた際のことであつた。私の著作の中で、この書物程に注意して筆を下したものもなければ、克明に訂正したものもない。これは何時もの様に二回稿を改めてから、私達はそれを側に藏つて置いた。そして時々それを引き出して、一句一句讀んで考へ、考へては批評して、全然新に全體を直して行つたものである。そしてその最後の校訂は、一八五八年から九年に亙る冬の仕事にしようと思ふことになつてゐた。それは恰度私が公職を退いてから初めての冬なので、私達は南歐で過ごす手筈にしてあつたのである。然るにその望も、その他の凡ての望も、彼女の死と云ふ思ひも掛けない慘劇の爲めに空となつた。——妻と相携へてモンベリエへ行く途中アヴィニヨンの町で、彼女は突然肺充血の爲めに倒れたのである。

その時より以來、私は彼女が尙身近かにある様な感を起すのに最も都合のいゝ生活方法を探つて、事情の許す限り私の胸の苦痛を和げようとしたのである。それで私は彼女の墓場に出來るだけ近い所に、一軒のさゝやかな家を買ひ求めて、彼女の娘へ私と悲しみを分つた人であり、今では私の主なる慰藉である所の娘と私とは、一年の大部分を何時もそこで暮してゐる。人生に於

ける私の目的と云つても、實は彼女の目的とした所以外にはない。私の追求してゐること、從事してゐることも、實は彼女が共働してくれた、乃至同感してくれたことなので、皆彼女とは切つても切れない聯想を有つてゐるものである。彼女の思ひ出は私に取つては一個の宗教であり、彼女の賞讃は事實凡ての價値の總計であつて、私が據つて以つて自己の生活を規整しようと努めてゐる尺度なのである*。

* これまでの所は一八六一年より以前若しくはその年中に書いたり、改訂したりしたもので、これ以下は一八七〇年に書いたものである。

私が取り返へしの付かない損失を蒙つて後、先づ第一に私の心掛けたことは、大部分亡き妻の遺作である所の「自由論」を出版して、それを彼女の靈に獻げることであつた。そして私はその論文には何等の書き變へも書足しもしなかつたし、又永久にしない積りである。それは彼女の手で最後の仕上をする必要があつたものであるが、私はさうした仕上に替るべきものを、私の手で試みる積りは永久にないのである。

「自由論」は私の名義になつてゐる凡ての著述の中で、最も直接に且つ文字通りに私達の共著と云つていゝものである。と云ふのは、その一言一句凡て、私達兩人が幾度か一緒に讀み返へし、色々と考を練つて、思想に於ても表現法に於ても、氣付いた缺點は悉く綿密に注意して取り除い

たからである。この一篇が、遂に彼女の最後の校訂を受けなかつたにも拘らず、單なる作文の一標本としても、私の書いたものの中で、前にも後にもない程優れたものであるのは、實にこの爲めなのである。その思想に關しては、孰れの部分乃至要素が、特に取り立てて彼女の思想であるかと云ふことを判定するのは困難である。詰りこの書物に現はれてゐる思惟の様式全體が著しく彼女の考へ方であつた。併し私にも亦、彼女の思惟の様式が深く滲み込んでゐたので、私達二人の胸にはおのづから同一の思想が浮かんで來たのである。併し斯程までに彼女の考が私に滲徹したのも、實は大部分彼女のお蔭であつた。私の心的發達の途中に於ては、社會的にも、政治的にも、兎もすれば干渉主義的傾向に容易に陥りさうになつた時代があつた。それは恰度、反對の極端からの反動であつて、私が現在ほど徹底した急進主義者、民主主義者には、或はならなかつたかも知れない時代があつたのと同様である。これ等の二つの點に於ても、他の多くの點に於けると同様に、彼女は、私を私の當然立つべき立場に正しく立たせてくれることによつて、私を新しい眞理に導き、誤つた考から脱却せしめたのと同じ位の利益をば私に與へてくれたのである。私は、誰からでも教を受け、新舊兩思想を互に調和して、凡ての新思想を取入れるだけの餘地を自分の意見の中に作らうと、常に人一倍熱心に心掛けてゐたものであるから、若し彼女の堅實な影響がなかつたならば、ついつられて、ひよつとすると私の若い頃からの考を變更し過ぎる様なこ

とがあつたかも知れなかつた。彼女が私の心的發達に取つて最も貴重であつたのは、縷々に相異つた諸考察の相對的重要さを商量する彼女の正當な尺度の爲めであつた。これは、私がつい近頃悟ることの出來たばかりの眞理に對して、その本來の價値以上に重要な位置を、私の思想中に占めさせることのない様に、私を屢々護つてくれたものである。

「自由論」は私の著作の孰れよりも、(或は「論理學體系」だけはその例外となるかも知れないが)、生命が長かりさうに思はれる。何故なれば、彼女の心と私の心とが結合した結果、この書物は一個の眞理を教ゆる所の一種の哲學的教科書となつてゐるからである。その眞理と云ふのは、近代の社會に順次に起りつゝある諸の變化が、益々際立つて浮き上がらせて來てゐるもので、即ち性格の型が非常に多種多様であることと、人間性を無数の相容れない様な方向に發展せしむる爲めに、それに完全な自由を與へることとは、個人に取つても、社會に取つても極めて重要であると云ふことである。かうした眞理の根柢の如何に根深いものであるかと云ふことは、皮相的に見る眼には、さうした教訓が餘り必要でありさうにも思はれなかつた時代に、それを提唱して、而かも甚深なる印象を與へ得たと云ふ一事が、最も雄辯に物語つてゐる所である。抑、社會的平等と輿論政治との避くべからざる發達は、人類に對して、思想と實行との調一と云ふ壓制的な拘束を加へる様になりはしないかと云ふ私達が「自由論」の中で表白した憂は、將來の傾向

よりは寧ろ現在の事實に着目する人達に取つては、一片の杞憂として受取られ易かつたかも知れない。何故ならば、現に社會や諸制度やの上に取りつゝある所の漸次的革命は、今日までの所、明かに新思想の發達に好都合であつて、新思想は世間から從來よりも遙かに偏見のない取扱を受ける様になつて來てゐるからである。併しかうした傾向は、實に過渡期に屬する一特殊相であつて、在來の思想感情には動搖を來たしながら、而かも孰れの新主義も未だ優勢の位置を占め得ない時代の特徴なのである。斯様な時代に於ては、苟も智力の働く人々は、既にその舊來の信念を捨て去ると共に、尙保持してゐる信念も果して動かさずに済むものかどうかとも實は確信がないので、新思想に對して熱心に耳を傾けるものである。併しかうした状態は必然的に推移するものである。即ち或る特定の主義の體系が、變て多數の同志を糾合して、その思想體系に適合した社會制度と行動様式とを組織する。そして教育は新時代の人々に、この新信條をば、それに立ち至るまでの心的過程を抜きにして教へ込む。斯くしてその新信條は、それが取つて代つた所の舊信條が長い間揮つてゐたのと、正に同一の強制力を漸次有つ様になつて來るのである。かうした有害な力が果して揮はれるかどうかと云ふことは、一つに、人類がその時まで、それが揮はれたならば必ずや人間性の伸張を妨げそれを萎縮せしめるものであると云ふことを、自覺してゐたか否かにかゝつてゐる。そして所謂「自由」の教訓が、その最大の價値を發揮する様になるのは、實

にこの時なのである。私は「自由」の教訓は、恐らく今後長きに亙つてさうした價値を失はずに行くのではあるまいかと心竊かに憂へてゐる。

獨創と云ふ點から見れば、この書物には、思想家の誰れでもが、人類の共有財産である所の眞理を、自己獨特の様式を以つて思索し表現する際に與へる程度の獨創以外には、無論別に取立てて云ふ程の獨創性はない。この書物の中を流れてゐる中心思想は、文明が始つて以來、恐らく何時の世に於ても人類に全然缺如してゐたことのない——尤もそれは多くの時代に於て、世を離れた孤立の思想家に局限されてゐたものではあるが——思想なのである。最近數代のことだけに就いて云つても、この思想はベスタロツチの努力と天才との力で、歐洲の人心に廣まつた所の、教育と文化とに關する重要な思想の鑛脈の中にも明かに含まれてゐる。ヴイルヘルム・フォン・フンボルトがこの思想をば無條件的に提唱したことは、この書の中にも言及してあることであるが、併し彼れは決してその祖國に於て唯だ獨り孤立してゐた譯ではなかつた。現世紀(譯註、十九世紀)の初期の間には、個性尊重説と、道徳性にそれ／＼獨自の發展を遂げしめようとする要求とは、獨逸の或る一派の著作家(譯註、譯者の人達のこと)の全部が殆ど極端にまでも推し進めたものであつた。そして獨逸の凡ての著作家を通じて、最も有名である所のゲーテは、この一派にも、又他の孰れの派にも屬してはゐなかつたが、その著作には矢張りかうした道徳上や處世上の見方が全體に漲つて

ゐる。尤も中には私の意見では往々にして賛成し得ないものもあるが、併しそれ等は自己發展の權利義務の説に絶えず許容し得る限りの論據を求めてゐるものである。吾が英國に於ては、この「自由論」の書かれる前に、ウィリヤム・マツコール氏が既に連續的な著述で、極めて熱烈に、時には人をしてフィヒテを偲ぼしむる様な力強い雄辯宏辭を以つて盛に主張してゐた。氏の著述の中で最も念の入つたものは「個人主義綱要」と題する書である。それから又ウォレンと云ふ毛色の異つた一米國人が、「個人の主權」と云ふことを基礎として一つの社會組織を組み立て、多數の同志を得て、實際に一つの村落共同團體を作り上げることに着手した(尤も私はそれが今日でも尙存在してゐるかどうかは知らない)。それは皮相的には、社會主義者の計畫の或るものに類似した點もある様ではあるが、主義に於ては、それと全然正反對のものである。と云ふのは、それは凡ての個性に對して發展の自由を平等に強制すること以外には、個人に及ぼす社會の如何なる強權も、一切認められてゐないからである。私の名義になつてゐるこの「自由論」は、元々その説の孰れに對しても敢て獨創性ありと云ふ積りでもなく、又その説の歴史を書かうと云ふ意圖でもなかつたから、私より以前に既にこの説を主張した人で、私が言及して然るべきであらうと考へた人は、この書物に標語を與へてくれた所のフンボルト位のものであつた。尤も或る一節に於ては、私はウォレン主義者から、「個人の主權」と云ふ用語を借用したこともあつた。尙安

に取立てて云つて置く必要もないかと思ふが、この書物の中に述べてある説は、私が今まで挙げた孰れの先進者の抱いてゐた説とも、細目に於て、概念に多人の相違があるのは云ふまでもないことである。

私は當時の政情に促されて、間もなく、「議會改革に關する諸考察」と題する一冊の小冊子を書き上げて出版した。その一部は數年前に、流産に終つた選舉法の一改正案が提出された場合に書いてあつたもので、その當時彼女からは認められ、その補正を得たものであつた。その主な特色は、無記名投票に對する反對と、(これは私達二人共意見に變化を來したもので、時期から云へば彼女は私よりも稍先んじてゐた)、少數派代表の要求とであつた。尤もそれは當時に於ては、ガース・マーシャル氏の提唱した累加投票權(一人に兼中するも、各候補者に分派するも選舉人の同意とす)の要求以上には出でなかつた。一八五九年、ダービー卿チスレリー氏聯立内閣の選舉法改正案に就いての論争を當て込んでこの小冊子を出版する爲めに最後の筆を加へる際に、私は今一つ第三の特色を加へた。それは複數投票權(一人に兼中するも、各候補者に分派するも選舉人の同意とす)の主張で、それを従來の如く財産に對して與ふると云ふのではなく、教育上の疑ふべからざる優越性に對して附與すると云ふのであつた。これは、一方、凡ての男女は、自分達に重大な關係を有つ事柄が處理される際には、當然相談を受け、發言を許さるべきものだと思ふ彼等の抑ゆべからざる要求と、他方、優越せる智識に基いて立てられ

た愚見には、當然優越せる重要性を附與すべきであると云ふ主張とを調和せしむる手段として、私には然るべきものと思はれたものである。併しこの案は、私の殆ど絶對無過誤の顧問である妻と、一度も論じ合つたことのないものであり、且つ彼女がこの案に同意するだらうと推定される證據も、私は一つも有つてゐないのである。この提案には、私の觀察し得た限りに於ては、今日まで誰れも賛成した人はない。と云ふのは、苟も選舉の投票權に何等かの種類の不平等を希望する人は悉く、財産の爲めにそれを希望する人達のみであつて、智慧若しくは智識の爲めに、それを希望する人達ではないからである。若し何時か、この提案がそれに對する強烈な反對感情を克服する時があるとすれば、それは恐らく、組織的な國民教育が確定されて、政治的に價値ある智識才能の様々な階級が、正確に決定され、確證されて後のことであらう。そしてかうした教育が確立されない限り、それは依然として何時でも、強烈な、恐らく決定的な反對を受けることであらう。尤もかうした教育が確立されたならば、かうした提案も或はその必要がなくなるかも知れない。

「議會改革に關する諸考察」の公刊後間もないことであつたが、私はヘーア氏の人的代表(讀者比代表)と云ふ敬服すべき制度を初めて知る様になつた。この制度は現在ある様な形態で、當時初めて公にされたものである。私はこの實際的であらうか否學的な偉大なる考案の中に、代議制組

織に加へ得る最大の改善を認めたとのである。それは、代議制の一大病弊で、而かも前にはそれに固有なものと思はれてゐた缺點、即ち數の上の多數派に、その數に比例するだけの權力を附與しないで、全部の權力を附與し、絶對多數黨が、凡ての少數諸黨を壓迫して、——偶々各地方に於ける意見の分布に不平均な所があつて、場合に依つては少數黨にも代議士選出の機會が與へられるかも知れないが、さうした場合を除いては——議會に於てその意見を述べることが得ざらむることが出來ると云ふ病弊にびつたりと應じ、而かもそれを最も巧に救治する所の改善策なのである。從來これ等の大病弊に對しては、極めて不完全な緩和策位のものしか出來さうにも思はれなかつた。然るにヘーア氏の制度はこれに對して根本的匡正策を提供したものである。この政治技術に於ける偉大なる發見——蓋しそれは確かに偉大なる發見である——は、私の胸に——それは恐らくヘーア氏の考を採り入れた思慮深い人達には皆さうであつたと信するが——人間社會の前途に關して、新しい、而かも一層樂觀的な希望を燃え立たせたのである。と云ふのは、それに依つて文明社會の全部が明白に、而かも抵抗すべからざる勢を以つて向進しつゝある所の政治組織の形態から、その究極の利益を制限し、乃至は疑はしくする様に思はれる病弊の主なる部分が、除去されることになるからである。成程少數派はそれが少數派たる限り、事實票數に於て負ける、又負けるべき筈なのである。併し一定の數に上つてゐる選舉人の團體は如何なる團體でも、自己

の選定した代表者を立法院に送る事が出来る様な制度の下に於ては、少數派と雖も決して抑壓され盡すことはあり得ない。即ち獨立の意見が議會の中に押し入つて、そこで發言權を得ることになるであらう。かうした現象は現在の形態の代議制的民主制度では、決して屢々起り得ることではない。斯くして立法院は、個人的特徴を抜き取られた、單に大政黨乃至は大宗教團の信條を代表するに過ぎない人物のみを以つて全部構成せられる様なことなく、國內の最も秀でた個々人が、政黨政派には關係なく、彼等の個人としての卓越性を認識してゐる選舉人に依つて議會に送られ、立法院はそれ等の人の大部分を包容することになるであらう。成程ヘーア氏の案を充分に吟味しない爲めに、吟味すればよく物の分る人達が、案の機構が餘りに複雑だと考へて、これに反對する様なことがあるかも知れないとも考へられる。併しこの計劃が補はうと意圖してゐる缺陷に無感覺な人達や、この計劃を以つて、何の役にも立たない、従つて實際家の注意に値しない所の單なる理論上の技巧、乃至は變態的な考に過ぎないとして、棄てて顧みない人達などは、孰れも皆、將來の政治を擔當するに堪へない無能政治家と斷言して差向へあるまい。但し、その人が現に大臣であるか、若しくは將來大臣たらんとする野心を有つてゐるかの場合には又別である。と云ふのは、國務大臣が愈々、と云ふその日までも改善策に絶對の反對を公言し續けて居りながら、その日になつて彼れの良心か、それとも彼れの利益かに動かされて、それを公の政策として採用し、議

會を通過させるやうなためしには私達は慣れ切つてゐるからである。
 若し私があゝの小冊子を公刊する前に、ヘーア氏の制度に接してゐたならば、無論私があゝの書物
 の中で、それに就いて一言した筈であつた。然るにそれをしなかつたので、主としてその目的で
 「フレイザーズ・マガジン」誌に一篇の論文を書いた。(それは私の雑誌中に再録してある。)尤
 も私はその中に、ヘーア氏の書物と一緒に、別に時事問題を論じた二つの著述に就いての評論も
 入れて置いたのである。その一つは私の青年時代の舊友ジョン・オースチン氏の書いた小冊子で
 あつたが、氏は老年期に這入つてからは、これ以上の議會改革には一切反對する様になつてゐた。
 今一つはロリマー氏の書いたもので、部分的には誤謬もあつたが、全體として腕の冴えた、力強
 い著書であつた。

同じ年の夏の間、私は特に私の責任となつてゐた義務を果した。それは恰度その時分その第
 二巻を公刊して完結した所の、ペイン氏の心理學に關する深奥な論著をば、(エヂンバラ評論に
 掲載した論文で)世間に紹介する手助けをすることであつた。それから私は「評論と論策」の初
 の二巻となつてゐる小論文の選集を印刷に附した。この選集は妻の存生中に作られたものである
 が、それを再刊する積りで、恰度彼女と一緒にその校訂に着手した所であつた。然るに彼女の判
 斷力の指導はもうなくなつたので、私は校訂をそれ以上進めることを斷念して、唯だその時の私

の意見と齟齬してゐる様な文句を削除するだけに止め、他は舊の儘でそれ等の論文を再刊した。
 この年の私の文筆上の勞作は、「非干渉論數言」と題する「フレイザーズ・マガジン」誌に掲載
 し(後「評論と論策」の第三巻に再録)た論文で終ることになつた。私がこの論文を草するに至
 つた動機は、一方に於て、英國の外交政策は特に利己的であると云ふ當時大陸方面に普通行はれ
 てゐた悪評に對して、英國を辯護し度かつたからなのと、他方に於て、英國の政治家が平常口に
 してゐる所の、英國の政策は英國の利害のみを顧慮すべきものだ云ふ低調な考へ方と、當時恰
 もスエズ運河に反對してゐたパーマーストン卿の行動とは、かうした悪評に充分の色彩を與へる
 ものだと云ふことを英國人に警告し度かつたからなとであつた。私はこの機會を利用して、國
 際道徳の眞の原則と、時と場合の相違からその原則に加へらるべき適當なる修正とに關して、長
 い間心に有つてゐた(その中には私の印度の經驗から生れたものもあれば、又當時歐洲社會の喧
 しい問題となつてゐた國際問題から生れたものもあつた)を發表した。尤もこの題目は、既に或
 る程度までは、一八四八年の佛國假政府に向つてブルーナム卿やその他の人達の加へた攻撃に對
 する反駁文の中で論じたものであつた。この反駁文は當時「ウニストミンスター」評論に掲載した
 もので、今は「評論と論策」の中に再録してある。

當時私の信じてゐた通り、私は今ではもう私の餘生のある限り、安んじて純然たる文筆の生活

を送ることに決めてゐた。但し私の生活は依然として、著しく政治に——常に政治の理論のみならず、政治の實際にも向けられてゐるものであつたから、これは、さうした生活をも尙文筆の生活と云ひ得るものと假定してのことである。尤も一年中の大部分は、私が筆を執つた當體であり、又主としてその目的でもあつた所の祖國の政治の中心地からは、數百哩も離れた地（譯者註、彼の國アツイニ）で過（譯者註、彼の國アツイニ）こされてゐたのである。併し實を云ふと、近代の交通の便は、相當樂な暮しをしてゐる天外の一政論家に對して、常に政治活動の舞臺から遠く離れてゐることに伴ふ有らゆる不利益を除いてくれたばかりではなく、更にそれ等の不利益を却つて有利なものともなしてくれたのである。即ち新聞や雑誌が餘り時を遷さず規則正しく手に入るので、私は如何に一時的な政治現象にも通じて居ることが出来ると共に、輿論の状態や推移などに就いても、個々の政客に親しく接して得られるよりも、遙かに正鵠を得た見解を得ることが出来たのである。と云ふのは一體誰れの交際でも、その範圍は或る特定の團體乃至階級に多少局限されてゐるもので、さうした方面からは、さうした人達の感じのみしかその人に達して來ないものだからである。そして私の經驗に依れば、所謂社交の要求するまゝに夢中になつて時間を費し、輿論の機關に廣く通ずる暇を有たない連中は、社會一般の心意なり、乃至はその活動的な且つ教育ある部分の心意なりの一般の状態に就いては、新聞を讀んでゐる隱者よりも、概して遙かに無智なのである。云ふまで

もなく、自分の國から餘り長く離れてゐること、——即ち人間や事物をその中心に立つて見た時の感じを新にする機會が滅多にないと云ふことには、確かに不利益が伴つてゐる。併し遠方から靜かに眺めて形作られ、従つて遠近親疎の差等の爲めに煩はされない判斷は、實際に適用する上にさへも、實は最も信頼すべき判斷なのである。私は幸にしてこの兩者の位置を交互に利用してゐたので、双方の利益を一身に併有することが出来たのである。そして私に最善の思想を鼓吹してくれた妻は、も早や私の側にゐなかつたが、それでも私は決して孤獨ではなかつた。彼女の後には一人の娘、私の養女が残つてゐたのである。

……………この娘の日々に發達し成熟し行く才能は、その日から今日に至るまで、亡き妻と同一の大なる目的の爲めに獻げられて來たのである……………私の蒙つた様な大損失を受けた後、私の様に人生の富穢に於て今一つ當り圖を引き當てる程好運な人は、これまで一人もなかつたに相違ない……………現在にしる、將來にし

ろ、苟も私のことを想ひ私の爲した仕事のことを考へてくれる人は誰れでも、私の仕事は一人の智能と良心との所産物ではなく、實は三人のそれだと云ふことを決して忘れてはならない……………

一八六〇年と一八六一年の兩年に於ける著作の主なるものは、二つの論文であつて、その中の一つだけは直ちに出版する積りで書いたのであつた。それは「代議政體に就いての諸考察」と云ふ論文であつた。これは私が、多年の思索の結果民主的國家組織の最善の形態だと看做す様になつた制度に就いて一貫した解説を下したものである。この書物の中には、かうした代議制と云ふ政治運用上のこの特殊な方面を支持する上に必要なだけの一般の政治理論の外に、更に、現代の諸問題の中で、純然たる機關に過ぎない諸制度の方面に於ける主要なる問題に關する私の成熟した考が書いてあり、尙ほその他、將來を豫想して、時代の必要の増すにつれて、政治の理論家も實際家も早晚注意せざるを得なくなる所の若干の問題をも提起してある。この將來の問題の主なるものは、法律を制定する機能と、善き法律を制定せしむる機能との區別である。前者に對しては多數の民衆の集會は絕對に不適當であり、後者は民衆の集會に本來最も適した職分であり、且つさうした集會以外の權力では如何なる權力を以つてしても、到底満足には果され得ない機能なのである。そこで自由なる國家の組織の永久の一部として法制委員會なるものが必要になつて來る。それは高度の政治的教養ある少數の人士より成るものであつて、議會が或る一つの法律の制定せらるべきことを決議した場合に、それを制定する任務は、その委員會に移さるべきものであ

る。そして議會はその法案が起草された時に、それに對する賛否を決する機能は之れを保有してはゐるが、修正案を委員會に廻附して處理せしむる以外に、自らその法案を變更する機能は之れを有たないことにするのである。凡ての公的機能の中で最も重要な機能、即ち立法の機能に關して、爰に提起された問題は、近代の政治組織の大問題の一つの特殊の場合である。それは一般政務に對する人民の完全なる統制と、堪能な専門家の能ふ限り完全なる技術とを結び合はすことであつて、私の信ずる所に依れば、これはペンタムに依つて初めて委曲を盡して論述されたものであるが、併し私の考では、必ずしも彼れの手では満足に解決され盡してゐない所の問題である。この頃書いた今一つの論文と云ふのは、數年の後（原註、一八六九年）に「婦人の隷従」と云ふ表題で出版したものである。これを書いた動機は、………兎に角この大問題に對する私の意見を、力の及ぶ限り完全に且つ決定的に展開した論文を書き残して置かうと云ふのであつた。そして最初の積りでは、これを他の未發表の論文と一緒に藏つて置いて、出來ることなら時々出してはそれに補筆修正を加へ、そして最も世の爲めになりさうな頃を見計つて公表しようと思つてゐた。それが結局出版された時には、………私自身の筆に成つたこの論文の中で、最も卓抜にして深遠な部分は皆妻のものである。即ちそれ等は、私達の心の大部分を満じてゐたこの問題に就いて、數知れぬ程談じ合ひ、論

じ合つて、結局私達兩人の共有となつてゐた思想の資源から生れ出たものであつたのである。その後問もなく私は筐底から、私達の結婚生活の最後の數年間に私が書いて置いた未發表の論文の一部を取り出して、それに多少の増補をして、「功利主義」と題する小論文に纏めた。これは初め三篇に分けて、「フレイザーズ・マガジン」誌上に連載し、後から一卷に纏めて出版したものである。

然るにこれより前、社會の情勢は、米國に内亂が始まつた爲めに、非常に切迫して來てゐたのである。私はこの争闘に對しては最も強烈な感情を懷いてゐた。この争闘は、善かれ悪かれ今後永遠に互つて人間社會の進路を決定する所の分岐點となるべき運命を有つてゐると、私は最初から感じてゐたのである。私は米國の奴隸問題の論争が未だ公然たる破裂に至らない前數年間、それに對して深甚の興味を以つて觀察してゐた者であつたから、この争闘は、その孰れの階段に於ても、要するに奴隸所有者が、奴隸制度の領域を擴大しようとする侵略的企圖であることを知つてゐた。即ち彼等は、金銭的利害感と、支配慾と、一階級の自己の階級特權に對する狂熱との結合した勢力、即ち私の友人ケャンズ教授の名著「奴隸強國」の中に遺憾なく、且つ力強く描かれてゐる所の諸勢力の下に於ける一種の侵略的企圖であることを承知してゐたのである。それ故に若し彼等が成功した場合には、その成功は惡の力の勝利と云ふことになるであらう。そしてそれ

は纏て全世界の文明國を通じて、進歩の敵に勇氣を與へ、進歩の味方の意氣を沮喪せしむることになるであらう。そして同時にそれは人間の人間に對する壓制の最も憎むべき、且つ最も反社會的な形態(譯者註、奴隸制度のこと)の上に基礎を置いた所の一個の恐るべき軍國主義的強國を作り出すことになり、かの偉大なる民主的共和國の威信を永久に破壊し去つて、歐洲の有らゆる特權階級に間違つた信念——恐らく血を流すにあらざれば絶滅することの出来ない程強固な信念を懷かしむることになるであらう。併し、これに反して、若し北軍の志氣が充分に振つて、この戦争が北部の勝利を以つて終結した場合、而かもその終結の來ることが餘りに早や過ぎもせず、手易過ぎもしなかつた場合には、その終結は必ずや徹底的なものとなるであらうと云ふことを、私は人間性の法則と、様々な革命の經驗とから豫知してゐた。即ち北部の國民の大部分の自覺も、未だ僅かに、奴隸制度を現在以上に擴張する事に反對すると云ふ程度に止まつてゐた上に、彼等の合衆國の憲法に對する忠誠心から、聯邦政府が苟も既に奴隸制度の存在してゐる諸州にまでも干渉せんとする企圖には反對してゐたのであるが、併し既にその憲法が武力叛亂に依つて一旦放擲し去られた際には、彼等は別種の感情を懷く様になつて、遂にはこの呪はれたる制度を永久に葬り去らうと決意するに至るであらう。そして彼等は、その勇敢にして一路直進の使徒としては、ギャリソンあり、辯舌の雄としてはウェンデル・フィリップスあり、進んで主義に殉じた者としてはジョン・

ブラウン^{*}ある所の彼の氣高き奴隷廢止論者の一團の旗幟に、彼等の旗幟を合流するに至るであらう。さうなると、合衆國の全國民の心も亦、その繋縛から解放されて、今後は彼等の憲法の自由の原則に違反する有らゆる行爲の中で、最極悪の違反である所の奴隷制度の爲めに、外國人に對して言譯をする必要があると想ふことから、その純眞さを汚されることもなくなるであらう。それと同時に、社會の固定した状態が或る種の國論を固化しようとする傾向は、少くとも一時は阻止せられて、國民の心は、その制度なり、習慣なりの弊所をば、今までよりは一層躊躇する所なく認める様になるであらうと云ふことを豫知してゐたのである。これ等の望は、奴隷制度の關する限りに於ては、既に完全に實現されて居り、その他の事柄に關しても、漸次實現の途上にある。私は最初から、反亂の成敗如何に依つて生ずるかうした二重の結果を豫知してゐたものであるから、我國の上流及び中流階級の殆ど全部が、否、平常は自由主義者を以つて自他共に許してゐた人達までもが、擧つて猛烈な南方鼻貞に走り、僅かに勞働階級と、少數の文士と科學者とが、この國を擧げての狂亂の殆ど唯一の例外たるの爲體に對して、私が果して如何なる感情を以つて眺めてゐたかは、恐らく想像に難くないであらう。我國の有力者階級の心が永久に改善された點の如何に僅かであつたか、又彼等の平常口にしてゐた自由思想なるものの如何に價値なきものであつたかと云ふことを、私はこの時程痛切に感じたことはなかつたのである。大陸の自由主義者に

は、こんな途方もない過を爲した者は流石に一人もなかつた。併し曾て吾が西印度諸島の植民地經營者に迫つて、奴隷解放を餘儀なくせしめた當年の入達は既に去つて、その後には多年に亘る論争と摘發とに依つて、奴隷制度の罪惡たる所以を痛感するまでに未だ啓發されてゐない人達が社會に立つてゐた。その上、吾々の島國以外の世界に起つてゐることは何事に對しても注意を拂はないのが、英國人の習性である所から、彼等はこの争闘の由來した一切の事件には全然無智であつたが爲めに、この戦争の始つた一兩年間は、この戦争が奴隷制度に關する戦争である事さへも、英國に於ては一般に信じられてゐなかつた程であつた。高遠なる主義を懐き、紛ふべくもない自由思想を有つてゐる人達であつて、この戦争を目して、關稅に就いての争議であると考へたり、或はこれまでよく彼等が同情して來た所の、一國民が獨立の爲めに争闘してゐる場合に擬したりなどしてゐる人達もあつたのである。

● この眞の英雄が、捕へられて後、「俺は殺殺されることで何よりも一番世の爲めになるのだ」と云つたのは、その機智と聰明と獻身とを兼ねせる點から、人をしてサー・トマス・モアのことを想ひ起させる。

如斯き輿論の誤れる傾向に對して抗議した極めて少數の一派の一人として立つことは、明かに私の義務であつた。但し先頭に駁撃の火蓋を切つたのは私ではなかつた。ヒューズ氏とラッドロ
ー氏とが、この争闘の劈頭に公にした論文で以つてこの抗議の緒を開いたことは、兩氏の名譽の

爲めに當に記憶さるべきことである。兩氏に續いでブライト氏が、その最も力強い演説の一つとも云ふべきものの中で駁撃を加へ、續いてそれにも劣らず人の耳を聳てしむる様な演説を幾度か爲した。私も彼等の驍尾に附いて意見を發表しようとしてゐた恰度その時、一八六一年の暮に押詰つた頃、英國の商船に乗つてゐた南方側の使節一行が、合衆國官憲の爲めに逮捕されたと云ふ事件が突發したのである。當時英國に於て表はれた感情の爆發、數週間に互つて行はれた合衆國との戦争の豫想、又英國で事實着手してゐた戦争準備、凡てこれ等の事象の記憶は、如何に健忘性の英國人と雖も未だ忘れない所であらう。かうした状態の繼續してゐた間は、世人が米國側の肩を持つ様な意見に耳を傾けさうな見込は全然なかつた。加之、私はかゝる行動は不當であり、英國は須らく米國に對してその行動の否認を要求すべきものと考へてゐた人達と意見を同じうしてゐた。それでその否認の回答が來て、開戦の脅威の掃された時、私は一八六二年の正月、「フレイザーズ・マガジン」誌に「米國に於ける争闘」と題する論文を書いた。……………この論文は恰度よい時に書いて發表したので、頑迷なる輿論の大勢に壓倒されさうな思ひがしてゐた自由主義の人達を激勵することになり、正義の爲めに輿論の核心を形作る助けとなつた。そしてこの輿論の核心は、初めは徐々に、後北方側の勝目が九分通りと思はれ始めてからは急激に増大して來たのである。私達が旅行から歸つた時に、私は今一

つ論文を書いた。それはケヤンズ教授の著書の評論で、「ウェストミンスター」評論誌上に發表した。英國の支配階級は曾て一國家としての米國の崩壊を公然希望して、合衆國の内に消え難き遺恨の情を沸き立たせたのであるが、英國は今やその報を幾多の不愉快なる方法で受けつゝあるのである。英國の支配階級は、少數の知名の士が、——よしそれは極く少數者に過ぎなかつたとは云へ——筆と舌とを以つて、米國が最大の國難に直面せる際に、毅然として米國人の味方として立つてゐたが爲めに、彼等の悪感を一部分他に轉ずるを得、大英國をして米國人の憎しみの標的とならしめなかつたことを當に深謝すべき筈である。

私は既にかうした義務を盡したので、これから二ケ年間私の主として爲すべき事業は、政治以外の諸問題に就いてであつた。オースチン氏の歿後、氏の「法理學講義」が公刊されたのを機會に、私は氏の靈に對して當然の敬意を表すると同時に、昔私がペンナム主義者であつた當時、相當研鑽を積んでゐた問題に關する考察を若干發表することが出來た。併しこの二年間に於ける私の主なる收穫は「サー・ウィリヤム・ハミルトン氏の哲學の吟味」であつた。氏の「講義集」は一八六〇年と一八六一年とに公刊されたのであるが、私はその後の年の暮頃に讀んだ。初めは事に依つてはどれかの評論誌にその紹介でも書いて見ようかと思ひ乍ら讀んで見たのであるが、少しく讀んで見ると直ぐ、そんな計劃では到底駄目で、この題目に相當するだけのことを爲すのに

は、少くとも一冊の書物にしなければならぬことを悟つたのである。そこで私は、果して私自身でそんなことを企てるのが得策であるかどうかを考へて見る必要があつた。色々考へた結果、私自身それをやつて見なければならぬと云ふ強い理由がある様に思はれたのである。實を云ふと、私はこの「講義集」には大いに失望した者である。確かに私はサー・ウィリヤム・ハミルトン氏に對しては何等の偏見も抱かずにその「講義集」を讀んだのであつた。成程私は、氏の「リード論」(譯音註、トマス・リード(一七一—一七九六)はスコットランド常識哲學を打ち立てた哲學者でハミルトンはその門徒であると共にカントの批判主義の影響を受けて常識哲學の修正を企てた哲學者)の研究は、それが未完結であつたが爲めに、この頃まで後廻はしにしてあつたが、併し氏の「哲學論叢」は決して等閑視してはゐなかつたのである。そして私は、氏の心理哲學の諸事實の一般の取扱方が、私が最もよいと信じてゐた取扱方とは異つてゐることは承知してゐたが、それでも尚、後期の先驗主義者に對する氏の力ある論戰的態度と、或る重要な原則、殊に人智の相對性に關する氏の力強い斷言とは、氏に對する多くの共鳴點を私に與へたものであつて、それが爲めに、私は眞正なる心理學は、氏の權威と名聲とに依つて失ふよりは得る所が可成り多いと思ふ様になつてゐた。然るに氏の「講義集」と「リード論」に依つて、かうした幻想は全く消え去つたのである。これ等二つの著作の投げる光に照して讀むと、氏の「哲學論叢」までもが、その價値の大部分を失つた。氏の考と私の考とが一見一致するかの様に思はれた點は、實は眞の一致ではなく唯だ言葉の

上だけの一致に過ぎないこと、重要な哲學上の原則で、氏が認めてゐると思つてゐたものを、氏は殆ど何等の意義もないかの様に片附けて居り、若しくはそれ等をば斷えず見失つて居り、却つてそれ等とは全然矛盾した説を氏の哲學上の論文の殆ど到る處で説いてゐることを私は發見したのである。それ故に、氏に對する私の評價は大いに變化して來た。そしてこれまでは氏を目して、二つの相對立する哲學の間に一種の中間的位置を占め、兩派の原理の幾分宛かを保有し、双方に對して攻防共に有力な武器を供給してゐる者と看做してゐたものが、今では氏を、兩派の中で私には間違つてゐると思はれてゐた學派の一支柱——否、英國に於ては、氏の哲學界に於ける噴々たる盛名から、寧ろその大黒柱であると看做す様になつたのである。

さて、これ等の哲學上の二學派、即ち直覺の學派と經驗と聯想の學派との間に存する差異は、單に抽象的思辨の事項に止まらない。それには實際上の結果が充ち溢れてゐるのであつて、進歩の時代に於ける實際的意見の最も大なる相違の根柢には、皆この二學派の差異が存在してゐるのである。凡そ改革の實際家は絶えず、力強い且つ廣く行き渡つてゐる感情の支持を受けてゐる事物に於て變革の行はるべきことを要求するか、或は既定の事業の一見必然的であり、破り難く思はれる點に疑を挟むかしなければならぬ。従つてそれ等の力強い感情はどうして起るに至つたか、又それ等の事實はどうして必然的で且つ破り難く思はれる様になつたかを指示することは、

往々にして改革者の議論の缺くべからざる部分なのである。それ故に改革者と、感情及び道徳的事實をば境遇や觀念聯合を以つて説明することに反對して、寧ろそれ等を人間性の究極的要素として取扱はうとする所の哲學との間には、おのづから氷炭相容れざるものが存するのである。かうした哲學は好んで自分の好きな説を直覺的眞理として擁護する癖があり、且つ直覺を以つて、吾々の理性の權威よりは一段と高き權威を以つて語る所の大自然の聲及び神の聲であると考へる所の哲學である。殊に私は、人間の性格の著しい差別を以つて、一切生得的と看做し、その大部分をば到底消すべからざるものと考へ、そして個人間にしろ、人種間にしろ、兩性間にしろ、それ等の差異の大部分は境遇の差異に依つて、啻に生ぜられ得るのみならず、寧ろ生ぜられるのが自然であると云ふ不可抗的の證據をば無視する所の現代一般の傾向こそ、大なる社會問題の合理的取扱に對する主なる障礙の一つであり、人間の改善に對する最大の邪魔物の一つであると云ふことを、ずつと以前から感じてゐたのである。元來この傾向は、十八世紀に對する十九世紀の反動思想を特色付けてゐた直覺派の形而上學に淵源してゐるものであつて、一般に保守的勢力の氣に入るのみならず、人間の不精辦にもしつくり合つた傾向なので、若しその根柢に對して斧鉞を加へなければ、必ずやそれは、比較的穩健な種類の直覺哲學が眞に承認し得る限度をば、遙に越えた所までも推し進められる恐がある。そしてこの直覺哲學こそは、歐洲の思想界を殆ど一世紀

近くも支配してゐたものであつて、而かもそれは必ずしも常に穩健な種類のみではなかつたのである。私の父の「心の分析」も、私の「論理學」も、ペイン教授の大著も、要するによりよき思惟の様式を再び引き入れようと企てたものであつて、最近では豫期し得らるゝ限りの目的を果したものであつた。併しその少し前から、私は兩派の哲學思想を單に對照しただけでは充分でない、兩派の間には當然白兵戦が演ぜらるべきであり、單なる解説的な論述のみならず、論争的な論述も亦必要であり、而かもさうした論争の有用なるべき時代がもう來てゐると云ふことを感じてゐたのである。そこで私は、ハミルトン氏の著述と名聲とを以つて、我國に於ける直覺哲學の一大要塞であり、而かもその爲人の威容あり、幾多の點に於て優れた徳と才とを兼備せるところから、益々恐るべき要塞であると認めたので、私は氏の最も重要な思想の總てを徹底的に吟味して、氏が哲學者としての一般の聲價を評價せんとする企圖は、或は哲學に對する眞の密與となるかも知れないと考へたのである。そして更に私は、ハミルトン氏の追隨者の少くとも一人であり、而かも氏に取つては最も有爲なる一人である人の論文に於て、私が甚しく不道徳だと考へてゐた宗教上の一見解を辯護する爲めに、氏の獨特の思想が利用されてゐるのを見るに及んで、益々かうした決意を固くしたのである。その見解と云ふのは、吾々人間に取つて不可知な道徳的屬性を有し、且つ吾々がお互人間のことを云ふ時に、その道徳的屬性に就いて呼び慣れてゐる善とか美とか云

ふ名稱とは恐らく非常に相違してゐると思はるゝ、獨特の道德的屬性を有つてゐる所の神をば跪拜することが、吾々の義務だと云ふ説である。

私の仕事の進むにつれて、ハミルトン氏の聲價は、私の最初豫想してゐたよりも遙に下落することになつて來た。それは各章節を互に比較對照すると、殆ど信すべからざる程多數の矛盾撞着が暴露されたからである。併し事實をその有るが儘の姿で示すのが、私の任務なので、私はこの任務からは一步もたじろがなかつた。私は絶えず私の批判の對象であるこの哲學者をば、最も嚴正公平に取扱はうと努めてゐた。それに尙、彼れには幾多の弟子もあれば讃仰者もあるのだから、若し萬一私が不用意の間に彼れに對して不當な取扱をして、彼等は必ず私の過誤を正してくれらうと云ふことを承知してゐたのである。豫想通り、彼等の中の多數は、精細の程度こそ異れ、それ〴〵答辯してくれた。そして私の看過した點や、誤解した點を指摘してくれた。尤もさうした點はその數も僅かで、且つ大抵は實質上極めて重要でない事柄であつた。そしてそれ等の批正の中で最近版（現在ののは第三版であるが）の公刊以前に指摘された（私の知れる限りで）ものは、その第三版で訂正してあり、殘餘の批評も、必要と思はれた限り、答辯してある。全體として見て、この書物はその使命を果したものであつた。それはサー・ウィリヤム・ハミルトン氏の弱點を現はして、氏の過大な哲學上の聲價を、比較的適當と思はれる程度にまで引き下げたの

である。そして物質と精神との概念に就いて解説した二章と、それに關する議論の若干とに依つて、この書物は恐らく、心理學及び形而上學の領域に於ける係争問題の若干に、多少の新しい光明を加へたのではないかと思はれる。

ハミルトンを論じた書物が完成した後、様々の理由からして特に私の義務となつてゐる様に思はれた仕事に従事することになつた。その仕事と云ふのは、オーギュスト・コントの學説を解説して、その價値を評定する仕事である。元來私は彼れの思想を英國に紹介する上に、何人にも劣らない位多くの貢獻を爲したものである。そして主として私の「論理學」の中に彼れに就いて述べてある事から、彼れの名が未だその本國の佛蘭西に於てすら、無名の域を脱しない頃、既に我が英國に於ては、彼れは識者の間に多くの讀者と讚美者とを有つてゐたのである。實際私が「論理學」を書いて公刊した頃には、彼れは未だ誰れにも知られもせず、理解もされてゐなかつたので、彼れの弱點を批判することは寧ろ餘計なことと、却つて彼れが哲學的思索に對して爲した主要な貢獻をば、出來得る限り世間に紹介することが義務である様に思はれたのである。然るに今私が書いてゐる時代となつては、事態は既に一變してゐた。彼れの名前だけなら殆ど世界的に知られて居り、彼れの所説の一般も極めて廣く知れ渡つてゐた。彼れは、味方からも、敵からも、當代の思想界に於ける大立物の一人として評價されてゐた。彼の思想のよい方の部分は、その人

の従来の教養や傾向に依つて、それを受け容れるだけの準備の出来てゐた人達の心には、既にドシドシ這入り込んでゐた。そしてそのよい部分の下に隠れて、彼れの晩年の著述の中に非常に發見せしめられ、附け加へられてゐる悪い方の部分も、既に多少這入り込んで来て、英國や、佛國や、その他の諸國に於て活動的で狂熱的な信徒を得てゐた。そしてその中には随分立派な人物も加つてゐたのである。これ等の原因の爲めに、誰れかがコントの思想の中で善いものと悪いものとを篩ひ分ける仕事を企てることが望ましくなつたばかりでなく、特に私自身の上に、さうした企圖を爲すべき特別の義務が負はされてゐる様にも感ぜられたのである。それ故に私はかうした仕事を二篇の論文の中で試みた。これは初め「ウエストミンスター」評論に連載したもので、後「オーギュスト・コントと實証主義」と題する小著に纏めて再刊してある。

今まで數へ上げた諸作と、その外新聞雜誌に載せたもので、敢て保存する程の價値もないと思つてゐる少數の論文とが、一八五九年から一八六五年に至る期間に於ける、私が一著述家としての活動の産み出した全部であつた。この最後に擧げた年の春、私は労働階級の人達から屢々受けた希望に應じて、私の著述の中で、労働階級の間が一番讀まれさうなものを選んで、廉價な民衆版を刊行した。それは「經濟學原論」と、「自由論」と、「代議政體論」とであつた。これは金銭上の利害から云ふと、私に取つては可成大きな犠牲であつた。殊に私はこの廉價版で儲けような

どと云ふ考を一切棄て去つて、私の出版元が利益折半と云ふ世間並の條件で以つて充分引き合ひになると考へた最低價格を、出版者から確めて後に、その定價を更にそれよりも一層安くし得る爲めに、私の取る分前を半分だけ放棄したからである。これはロングマン合名會社の名譽の爲めに一言して置くことであるが、同社は、私の方から頼みもしないのに進んで、一定の年數を経過した後は、版權と鉛版との所有權が私に歸屬し、一定の部數が賣れた後は、それから先の利益の半分を私に呉れると云ふことに取極めをしてくれたのである。實を云ふと少し以前からこの取極めの一定部數を（「經濟學原論」の場合は一萬部であつたが）既に超過して來たので、民衆版は、少額ではあるが、思ひ掛けない収入を私に齎らし始めてゐる。尤もそれは到底文庫版の収益の減少を償ふに足る程のものでは決してないが。

かうした私の外的生活の概略の記録に於て、これから私が書かうとする時代は、著述家としての私の平靜な浮世を離れた生活から、下院議員と云ふ、それよりも私の氣持にしつくりと合はない仕事に轉じた時代である。元來代議士にならうと云ふ考は、一八六五年の初め、ウエストミンスターの有權者の人達から候補推薦の申出を受けた時に、初めて私の心に浮んで來た譯ではなかつた。否、さうした申出を受けたことさへも今度が初めてではなかつたのである。と云ふのは、もう彼此れ十年以上も前のことであるが、私が愛蘭の土地問題に就いて所見を公にした結果、ル

「カス、ダツプフィー」の兩氏から、愛蘭の民衆黨の名に於て、私を愛蘭の一選挙區から議會に送り度いと云ふ申出があつた。そして若し私が承諾したならば、同黨は容易に私を議會に送ることも出来たらうと思ふ。併し議會に席を有つてゐること、當時私が東印度商會に有つてゐた地位とは、兩立しなかつたので、私はその提議には一顧だも拂はなかつたのである。東印度商會を退いてから、私の友人の中には、私が代議士になることを希望してゐた人達もあつたが、併しさうした考が事實になりさうな見込は先づ皆無の様に思はれてゐた。と云ふのは、如何なる選挙團體でも、その多数派乃至は有力者の一派は、私の様な意見を懐いてゐる人間を代表者として選出することを決して希ふものではない、そして何等の地方的因縁も人望も有たず、又一政黨の單なる機關として立つことをも好まない者は、金でも使はない限り、どの地方からでも當選の見込は先づないものと、私は確信してゐたのである。處でその金を使ふと云ふことに就いては、苟も候補が國家の公務を引き受ける爲めに、一錢の支出でも之れを負ふべきものではないと云ふのが、當時私の確たる信念であつたし、今日でも矢張りさうなのである。合法的な選挙費用の中で、特定の候補者に對して何等特殊の關係を有つてゐない様な費用は、公費として、國家なり、その地方なりが負擔すべきものである。若し各候補者がその主張を選挙民に然るべく知らしむる爲めに、それぞれの後援者が爲さねばならぬことがあるとすれば、それは無報酬の運動員に依つて爲される

か、若しくは有志の寄附金に依つて行はるべきものである。無論選挙團體の構成員の人達なり、或はその他の人達なりが、あの人を議會に出せば相當働くだらうと思ふ人を、合法的手段を以つて議會に送り出す爲めに、自分達の金を進んで醸出すると云ふのならば、何人もそれに對して抗議すべき理由はないのである。併しその費用なり、その費用の幾分でもなりが、候補者の負擔に歸する様なことがあれば、それは根本的に間違つてゐる。何故なれば、それは事實に於て、結局その人が議席を買ふと云ふことになるからである。假りにその金の使ひ方に關して、最も善意ある推定を下すとした處で、公共の委任を引受けさせて貰ふ爲めに金を出す様な人間は誰れでも、その委任を利用して公共の利益を進めると云ふ以外に、他の目的を有つてゐるのではないかと疑ふべき正常な理由があるのである。そして（これは最も重要な考察であるが）、選挙費が候補者の負擔に歸する場合には、國民は、凡て多額の出費を負擔する能力なき人、若しくはそれを肯しない人には國會議員として有用な働をして貰ふことが出来なくなるのである。尤も私は、政黨政派に超越した獨立の候補が、かうした有害な慣行に従はずしては先づ議會に這入り得る見込のない様な状態である限りは、その人が金を使つたからとて、それが直接にも間接にも少しも買収に使用されてゐない限り、直ちにそれが道徳上罪惡だとは必ずしも斷言しない。併しかうした金の使ひ方が是認される爲めには、その人は自分に開かれてゐる他の如何なる方法に依るよりも、

國會議員として國家に最も多く盡し得ると云ふ確信を有つてゐなければならぬ。然るに私自身の場合に於ては、私はかうした確信を有つてゐなかつたのである。即ち私は公共の目的で自分の努力に依つ所ある方面の事物を進めて行く上に就いて、一介の筆の人として立つてゐるよりも、下院の議席からの方が、遙に多くの貢獻を爲し得るとは、決してはつきりと思はれなかつたのである。それ故に私は、議會へ選出されんことを求むべきでもなく、況んや選出されんが爲めに金を費すべきでは尙更ないと感じてゐた。

然るに選舉人の一團體が私に見込を付けて、自發的に私を彼等の候補者に推し立てようと云つてくれたと云ふことになる、問題の條件は餘程變つて來たのである。若しお互に話し合ひの結果、彼等が私の意見を知悉し、且つ私が代議士の職を自ら顧みて疚しき所なく勤めて行く上には是非とも必要な諸條件をも承知して後、尙彼等がその希望を棄てないと云ふことが明かになつた場合は、是れ則ち、社會の一員に對する同胞市民の要求であつて、彼れがそれを拒絶するのは殆ど不當とも云ふべき公務の一ではないかと云ふことが問題となつて來たのである。それで私は、これまで如何なる候補者も選舉人の團體に對して出したことはあるまいと思はれる程腹藏のない聲明を提出して、彼等の意向の程を試験して見た。即ち私は彼等の申出に答へて、一通の公開狀を書いた。そして私は自分自身では代議士になり度いと云ふ希望は少しも有つてゐないと云ふこと、

私の考では候補者は選舉運動を爲すべきものでもなく、又選舉費用を負擔すべきものでもない、と云ふこと、従つて私はその執れを爲すことにも到底同意出來ないと云ふことを聲明した。それから尙私は假令當選しても、彼等の地方的利害の爲めに、少しでも私の時間と勞力とを費す約束は出來ないと云ふことも云つた。一般政治のことに關しては、私が意見を徴せられた若干の重要問題に就いて私の考を腹藏なく告げた。その一つは選舉權のことであつたので、私は特に婦人も男子と同一條件で議會に代表せられる權利を有すると云ふ私の信念を明かにした。(これは私が當選の曉にはこの信念に基いて行動する積りであつたから、是非とも明かにして置くべき義務があつたのである。)英國の選舉民に對して婦人參政權の主張が提示されたのは、無論これが最初でそれを選舉民に提示して後當選したと云ふ事實からのことである。私の様な選舉運動の世間並の考を悉く根本から無視してかゝつた宣言や行動を爲してゐる候補者(私を候補者と云ひ得べくんば)でも、猶當選するだらうとは、當時到底思はれなかつたのである。或る知名の文士の如きは、斯様な政綱を以つてしては、よし全能の神自身と雖も到底當選の見込はないだらうと云つてゐたさうである。併し私は嚴に自分の主張を守つて、金も使はなければ、運動もせず、候補者指名の期日に先立つ約一週間前までは、自ら選舉にたづさはることも一切しなかつたのである。そしてそ

の頃になつて私は初めて數ヶ所の公會の席に臨んで、自分の政見を披瀝し、選舉民の提出する如何なる質問に對しても應答した。かうした質問を爲す權利は、選舉民がその意志を決定する爲めに當然行使し得る所のものなのである。私の答辯は、私の演説と同様平明で率直であつた。唯だ一つ私の宗教上の意見に就いては、私は如何なる質問にも答へないと云ふことを初めから宣明して置いた。併しかうした決定は、どの會合に出席してゐた人達からも全然是認されてゐた様であつた。その他の題目に就いて受けた質問に對する私の態度の率直さは、答辯の如何を問はず、それが爲めに蒙る不利益よりも、明かに遙に多くの利益を私に齎らしてくれた様であつた。私はその證據をいくつも握つてゐるが、その中の一つは餘りに際立つたことなので、記さずには置かれない。それは曾て「議會の改革に關する諸考察」と題する小冊子の中で、私は稍、露骨に、我國の勞働階級は、それを吐くことを恥とする點に於て、他の二三の國の勞働階級とは異つてはゐるが、併し概して云へば矢張りうそつきだと云つた事があつた。この文句を私の反對者の或る者がビラに印刷してあつた。そしてそれを主に勞働階級の人達の集つてゐた演説會の席上で私に手渡して、果して私がそんなことを書いて公刊したかどうかを尋ねたのである。私は即座に「アイヤ」と答へた。この二つの言葉が私の口から出終るか終らない内に、全會衆を通じて盛なる拍手喝采が起つたのである。これは、勞働者達はこれまで常に、自分達の投票を得んとしてゐる人達から

は、誤魔化しと遁口上しか得られないものと思ひ慣れて來てゐたので、彼等のさうした豫期に反して、恐らく自分達の不快を買ひさうなことをさへも眞直ぐに承認したのを見て、憤を發するどころではなく、即座にこの人こそ信用するに足る人物だと決めて了つた様であつた。一體勞働階級の人氣を博する上に最も必要な條件は、徹底的な率直さである。これだにあらば、彼等の心中に餘程強い反對を有つてゐても、それを克服するに充分であるが、若しそれがないと見られた場合には、その他の點に於て如何程優れた所があつても、この缺を補ふには足りないものである。かうした傾向は勞働階級を最もよく知つてゐる人達の常に經驗する所であらうと思ふが、この事實を語る一實例として、私の場合程顯著なものは未だ曾て見たことがなかつたのである。今述べた出來事の後で、第一に立つて意見を述べた勞働者は（それはオッヂャー氏であつたが）、吾々勞働階級の者は、決して吾々の缺點を云はない様にして欲しいなどと希望してゐるものではない。吾々は眞の友人をこそ求むれ、決して阿諛者を求めてはゐない、若し、吾々に改むべき點があるとその人が心から眞に信じてゐるならば、何事でもそれを腹藏なく云つてくれる人に對して、寧ろ深く感謝してゐるのだと云つた。この意見に對して會衆は皆心から共鳴した様であつた。よし私がこの選舉に敗北したとしても、この選舉の爲めに私が同胞國民の大衆と接觸する様になつたことだけでも、決して遺憾はなかつたのである。と云ふのは、それは嘗に私に新しい經驗

を随分與へてくれたばかりでなく、それに依つて私の政治上の意見を一層廣く普及せしむることが出来、從來私の名が餘り聞えてゐなかつた幾多の方面に於て、私と云ふ者が知られることになつて、自然私の書いたものを讀んでくれる人の數を増すと共に、若しそれに幾分の人を動かす力がありとすれば、それをも増すことになつたからである。そして人にも吾れにも等しく意外にも私が相手の保守黨の候補者よりも數百票の多數を以つて議會に送られることになつた時に、この後に述べた方の影響が、更に一層甚しく現はれて來たのは云ふまでもないことである。

私が下院議員であつたのは、選挙法改正案を通過したあの議會の三會期の間であつた。その間私は、休會中を除いては、必然的に主として議會のことに没頭してゐた。私は可成り頻繁に演壇に立つて、豫ねて準備して置いた演説をやつたこともあれば、即席の演説をやつたこともあつた。併し私が演説すべき場合を選ぶ目安は、議會を動かすことを以つて私の主なる目的としてゐた場合に於ける選擇とは異つてゐた。私はグラッドストーン氏の選挙法改正法案に就いて一場の演説を試みて成功し、議會の傾聴を贏ち得てからは、私は、他の人でも私と同じ位には出來さうな、乃至は目的を果す位には出來さうなと思はれる事柄には、何も自分が出しやばる必要は一切ないと云ふ考の下に行動したのである。それ故に私は、概して、他の人々は誰れもやりさうにない仕事ばかりをやる爲めに、自ら差し控へてゐたのであるから、私が演壇に立つ場合と云つては、大抵

は、自由黨の大部分、否、その中の進んだ考を有つた部分までもが、私と異つた意見を有つてゐるか、乃至は比較的無關心であるかの問題を論ずる時であつた。従つて私の演説の若干、殊に死刑廢止の動議に對する反對演説と、今一つ中立國の船舶内に於ける敵國の貨物を差押へる權利の復活に對する贊成演説とは、進歩した自由主義の意見として當時認められてゐたし、今日でも尙恐らく認められてゐる考とは、全然相反するものであつた。婦人參政權と人的代表制とに關する私の主張の如きは當時多くの人達からは、私一己の氣まぐれ位にしか看做されてゐなかつた。併し其後かうした意見の爲めに、思想に長足の進歩が行はれ、婦人參政權の要求に對する反響が、英國の殆ど有らゆる部分から聞えてゐるのを見ると、これ等の運動が時宜を得てゐたことは充分に立證されてゐる。そして一種の道德的社會的義務として企てられたことが、今では一つの個人的成功となつてゐるのである。それから、ロンドン選出議員の一人としての私の上に特にかゝつてゐる今一つの義務は、ロンドン市の爲めに自治制を獲得しようとしてゐると云ふ運動であつた。併しこの問題に對する下院の態度は極めて冷淡であつたので、私は院内に於ては殆ど何等の援助をも支持をも得なかつたのである。併しこの問題に就いては、私は院外にある活動的で聰明な一國の人達の機關となつてゐた。そしてその計劃を創めたものも實は私ではなく、それ等の人達であつて、彼等がこの問題に就いての一切の運動を進めて、それに関する法案を起草したのである。私の役

割は、この問題に對する證據材料を調査する爲めにエヤトン氏を委員長として、一八六六年の會期の大部分に互つて開かれてゐた委員會の仕事に相當活動してから後は、豫ねて出来上つてゐた法案を提案して、短時間ではあつたがそれが上程されてゐた間討議を持ち続けることであつた。現在（一八七〇年）この問題が前とは非常に異つた位置を占めてゐるのは、その頃數年間繼續され、而かも當時に於ては殆ど目に見える程の効果を生じなかつた準備行動のお蔭であると云つても差向へあるまい。併しどんな問題でも、一方には強い私利私害があり、他方には公共利益のみしかない様な問題は、これと同様な所謂潜伏期を通過しなければならぬものである。

自分が議會に在る效用は、要するに他人の爲し得ない、若しくは爲すを欲しない仕事を爲すのに在ると云ふ考と同じ考から、若し進歩した自由主義の第一線に立てば、院内の進んだ自由主義者でも大抵は辟易する様な惡評を冒さねばならぬ様な場合にも、私は進んでその自由主義の爲めに前線に立つことを自分の本分と心得たのである。議會に於ける私の最初の投票は、愛蘭選出議員から提出された愛蘭の爲めの修正動議を支持することに投ぜられた。この動議に對して、英蘭及び蘇格蘭選出議員の投票は、私の分を入れて僅かに五票に過ぎなかつた。その他の四人と云ふのはブライト氏と、マクラレン氏と、チー・ビー・ボッター氏と、ハッドフィールド氏とであつた。私の爲した第二回目の演説は、愛蘭に於ける人身保護令（譯者註、人身保護令は、人身保護の目的を以て被拘禁者を法廷に呼出して拘禁の理由を審理せしむる令狀及びそれに

（譯者註、人身保護令は、人身保護の目的を以て被拘禁者を法廷に呼出して拘禁の理由を審理せしむる令狀及びそれに對する）の停止期間を延長する議案に就いてであつた。この場合に於て、私が英國の愛蘭統治策に對して加へた非難は、今日英國の輿論が一般に正當だと認めてゐる程度以上のものではなかつた。併し當時は、フィアナ主義（譯者註、一八五七年愛蘭の獨立を目的として在米愛蘭人）に對する憤激が燃え立つてゐる時であつた。従つてフィアナ主義者が攻撃するものを攻撃すれば、それは凡てフィアナ主義者に對する辯護だと看做されてゐた。それで私は議會から非常な不評判を受けて、私の友人は一人ならず、私に、選挙法改正案の第一回の大討議に依つて與へられる好機の來るまで、再び演説することは見合せた方がよいと忠告してくれた。（私自身の判斷する所でも矢張りその忠告の通りであつた。）この沈黙の間、多くの人は、私は一敗地にまみれたので、もう餘り私に煩はされることもあるまいといふ氣になつてゐた。併し恐らく彼等の酷評こそ、却つて反動作用に依つて、選挙法改正案に對する私の演説にあの様な大成功を齎らす助けとなつたのではあるまいか。私の議會に於ける位置は、我國の石炭供給の涸渇しない内に國債を償却し盡すべき義務を主張した演説と、保守黨の領袖の或る人に與へた皮肉な答辯とに依つて更に一層都合よくなつて來た。その領袖は私を困らせる積りで、私の著書の數ヶ所から引用して、私にその説明を求め、殊に「代議政體の諸考察」の一節で、保守黨はその構成の法則に依つて最も愚劣なる政黨だと云つてある章に對して釋明を要求したのである。併し彼等はこの一節に注意を喚起することに依つて

實は何の利する所もなかつた。と云ふのは、その一節はその時までは何等人の注意を引いてはゐなかつたのであるが、却つてこのことであつた爲めに、「最も愚劣なる政黨」と云ふ渾名が、其の後可成り長い間彼等にくつ着いて離れなかつたからである。私の演説も今ではもう議場で聞き流される憂もなくなつたので私が演壇に立つのは自らの働が特に必要だと思はれた場合にのみ限ることにして、(後から考へて見るとそれは少し度を過ぎてゐた様であるが)、黨としての大問題に關しても適當以上に演説を差し控へた。従つて愛蘭問題と労働階級に關する問題とを除いては、ヂスレリー氏の選挙法改正案に就いて一回演説したことが、私が議員としての三會期中後の二期の決戦的大討議に貢献した殆ど全部であつたと云つてよい。

● 私の第一回の演説は牛痘法案に就いてのフライト氏の演説に對するロー氏の答辯を論駁したものであつた。そしてその政府案には、地主等がその所有牛の或るものを失つたことに對しては、種々の牛の賣買が賠償するので、既に一旦は賠償されてゐるのにも拘らず、更にその上に二重の賠償を被等と與へようと云ふ一條項があつたのであるが、私の演説は、當時この條項を削除する上に與つて力があつたと考へられてゐた。

併し私は今云つた二種の問題に自分が參加したことを回顧して、竊かに會心の笑を漏してゐる者である。先づ労働階級に關する方から云つて見よう。グラッドストーン氏の選挙法改正案に對する私の演説の主要題目は、労働階級に参政權を要求する權利あることを主張することであつた。

それから少し経つて、ラッセル卿の内閣が辭職し、保守党内閣がその後に出て來てからのことであるが、労働大衆がハイド・パークに集會を催さうとしたのを、官憲が彼等の公園に入るを許さなかつたので、もみ合ひが起り遂に公園の鐵柵が折られて了つたと云ふ事件が起つた。ピールズ氏や労働者の幹部連は、この事件が起ると、抗議しながらも退去したのであるが、その後小競合が起つて、幾多の罪もない人等が警官の爲めに暴行を加へられ、労働者の憤激はその極に達したのである。そして彼等は更に又公園内の集會を企てようとする決意を示した。若しこの集會が催されたならば、彼等の多數は恐らく武裝して臨むことになつたらう。それで政府はこの計劃を弾壓する爲めに兵力を用ゆる用意をした。そこで何か極めて重大な事件が差迫つて來てゐる様と思はれて物情騒然たるものがあつた。この危期に際して、多くの不幸を防ぎ得たのは自分の力であつたと、私は今におき確信してゐる。私は曾て議員として、労働者に味方して、政府の行動を痛烈に攻撃した事があつたので、私は他の急進主義の代議士數名と共に、改革同盟評議會の領袖等との商議會に案内を受けてゐた。そこで彼等領袖をして、ハイド・パーク集會の計劃を放棄し、何處か他の場所で集會を催さしむる様に説得する役目に、主として私が當ることになつたのである。ところで、その説得の必要なのは、ピールズ氏やヂクソン大佐ではなかつた。却つてこれ等の領袖等は、私達と同一方針の下に盡力してゐたのであるが、これまでの處全然無効であると云

ふことが、明かになつたのである。即ち主張を枉げないのは實に労働者自身であつた。彼等は飽くまでも當初の計劃を貫かうと熱中してゐたので、私は已むを得ず最後の手段に依るの外なかつたのである。私は彼等に向つて、軍隊との衝突を免れない様な行動が正當とされ得る場合は、唯だ二つの條件に於てのみである、即ち事態が寧ろ革命を望ましいとするやうになつて来た場合と、彼等自らで革命を成就し得ると云ふ自信のある場合とであると言つた。彼等はそれから盛に議論を戦はせて後、遂に私のこの議論に服することになつた。私はウォルポール氏に、彼等の意圖が放棄されたことを報告することが出来た。私は氏の安堵の思の如何に深かつたか、氏の感情の表白の如何に熱烈であつたかは長く忘れられない。労働者が斯程までも多大の譲歩を私にしてくれたからには、農産品陳列館に於ける彼等の會合に私に臨席して演説して貰ひ度いと云ふ彼等の依頼にも應ぜざるを得ない感じがした。改革同盟の催して私が出席した集會は、唯この一回だけであつた。私はこれまで常に右同盟の一員となることを謝絶してゐた。それは私とその同盟の綱領である丁年男子選挙權と無記名投票とに不賛成であつたと云ふ公然たる理由からであつた。私は無記名投票には全然反對であつた。それから私は丁年男子選挙權の旗を掲げることには、よしそれが殊更婦人の選挙權を排除する意味を含ませたものではないと云ふ證言を得ても、到底一致することは出来なかつた。と云ふのは、凡そ人が、直ちに實行され得ること以上に進み出て、一つ

の主義に立脚することを宣言してゐる限りは、その主義の終極にまでも徹底すべきであるからである。私が特にこの事項を斯く枝葉に立ち入つてまでも述べるのは、この場合に於ける私の行動が、保守黨及び保守的自由主義者の機關紙の非常な不興を買つたからである。彼等は爾來私を以つて、公的生活の試練に際して、自ら無節制にして狂熱的なことを暴露した者として、常に私を非難してゐる。一體彼等は私に對して如何なる行動を期待してゐたか知らないが、若し彼等に對して、九分通りまでは私の手で彼等を救ひ出したと思はれる危険が、果して如何なるものであつたかを悟つたならば、彼等は寧ろ私に感謝すべき筈であつたのである。私は實に、あの時あの場合に、私を措いては他に何人と雖も彼等を救ひ得なかつたらうと信じてゐる。私はあの時に労働大衆を抑制するに足るだけの勢力を有つた人物は、グラッドストーン氏とブライト氏を除いては、他になかつたと信じてゐる。而かもあの場合、兩人共利用されることの出来ない事情になつたのである。即ちグラッドストーン氏は明白なる理由から、又ブライト氏は當時在京してゐなかつたから。

その後暫らくして、保守黨政府が、一般に公園に於ける公開の集會を禁止する法案を提出した時に、私は當にそれに對して、強烈な反對演説をしたばかりでなく、自由黨の進歩した人々と反對團を組織して、會期の將に盡きんとしてゐたのを利用し、所謂議論倒しの方法^{カンパニオン}を以つて、遂に

その議案を葬り去ることに(ラスキー註、一八七三年議に一種議案とあるは陰謀である)成功した。そしてその後それは二度と提案されることはなかつたのである。

次に愛蘭問題に就いても、私は決然たる態度を採るべきだと感じた。私はダービー卿を説いて、死刑の宣告を受けたファイアナ黨の反亂者バーク將軍の一命を救つた議員代表者の、先頭に立つた者の一人であつた。教會問題は、一八六八年の會期中、自由黨の幹部が力を入れて取扱つたので、私としては唯だ賛意を強調するだけで充分であつた。併し土地問題は決してそれ程まで進んだ状態にはなつてゐなかつた。地主保護主義の傳統はその頃までは未だ殆ど攻撃されたこともなく、殊に議會に於てはさうであつた。この問題が如何に後れてゐたかと云ふことは、議會心理の關する限りに就いて云へば、一八六六年にラッセル卿の内閣の提出した極端に穩和な政策を見ても分る。而かもこの政策すらも猶協賛を得ることが出来なかつたのである。私はこの議案に就いて最も用意周到な演説の一つを爲したのであるが、私はその中で、同志を策勵するよりは、寧ろ反對論者を宥め、説得すると云つた態度で、この問題の原則を若干打ち建てようと試みたのである。時恰も議會改革の大問題が一般の注意を奪つてゐたが爲めに、この議案も、ダービー卿の内閣が提出した同一性質の議案も、孰れも遂に通過するを得なかつた。そして兩案共第二讀會以上に行くことが出来なかつたのである。兎角する内に、愛蘭に於ける政治的不滿の徴々、更に一段と

はつきりして來た。英蘭と愛蘭との完全な分離を得んとする要求は、險惡な形相を呈して來た。若し愛蘭を慰撫して、英國との關係を持續せしむる上に尙一縷の望があるとすれば、それは愛蘭の土地的、社會的關係に就いてこれまで考慮されてゐた改革策よりも、ずつと徹底した改革策を採用するより外はないと感じないものは殆どなかつたのである。今や私の考を全部さらけ出すことが世の益になる時が來た様に思はれた。その結果として出來たものが、「英蘭と愛蘭」と云ふ小冊子であつた。これは一八六七年の冬に書いて、一八六八年の會期の始まる一寸前に出版したものである。この冊子の主要なる特色は、一方に於て、兩國の分離は、英蘭に取つては固より、愛蘭に取つても望ましいことではないと云ふことを示す議論と、他方に於て、土地問題を解決する爲めに、現在の小作人に對して、國家が然る可く調査して賦課した一定の地代で、永小作權を附與しようと云ふ提案とであつた。

この小冊子は、愛蘭を除いては人氣がなかつた。尤も私とてもこれに人氣があらうとは豫期してゐなかつたのである。併し若し私の提案した政策にも及ばない位の政策では、到底愛蘭に對して充分公平な處置たるを得ないし、又愛蘭人の大多數者を慰撫し得る見込みもないものとすれば、かうした提案を爲すことは實に避くべからざる義務であつたのである。同時に、假令他方に試みて見るだけの價值ある何等か中間的な手段があつたとしても、極端だと謂はれる政策を提案する

ことは、比較的穏和な實驗を妨ぐるものでなく、却つてそれを容易ならしむる眞の方法であることとを私はよく承知してゐた。若し英國の社會が、遙かに強硬な政策を要求する主張が或は成立するかも知れない、否、事に依るとさうした政黨が組織されるかも知れないと云ふことを悟る様になつてゐなかつたならば、グラッドストーン氏の愛蘭土地法案の如き小作人に對して多分の讓歩をした政策が、政府當局から提案される様なことも恐らくあり得なかつたらうし、よし提案されても、それが議會を通過する様なことも恐らく不可能であつたらう。英國人、少くとも英國人として通つてゐる上流中流階級の人達を誘導して何等かの變革を認容せしむるのには、先づ彼等がその變革を以つて中庸の途と看做すことが絶対に必要であるのは、彼等の特性なのである。彼等は若し何か他に、それに對し極端の見解に對する自分達の反感を發露せしむることが出来る様な一層極端に走つた提案があることを聞かなければ、彼等は如何なる提案でも片つ端から極端で過激だと考へてゐる。今の場合も正にそれであつた。成程私の提案は葬り去られたのであるが、併し愛蘭土地改革案で、私の提案程までに至らない計劃は如何なる計劃でも、凡て比較上穩健だと考へられる様になつたのである。私の案に對して爲された攻撃は、何時も案の本質に就いて極めて不正確な觀念を與へてゐたと云つてよい。それは、國家が土地を買上げて、全國土の地主になるべきだと云ふ提案として、何時も論議されてゐた。併し事實は、私の案は唯、個々の地主が自分

の所有地を新條件の下に保有してゐるよりも、寧ろ賣拂つた方がよいと思つた場合、國家の買上げをば一つの隨意選擇の條件として彼等に申出でたまでと云ふに過ぎなかつたのである。そして尙私は、大抵の地主は政府の年金受領者となるよりは、依然地主としてゐる方を選び、政府の交附する報償金算定の基礎となるべき全額地代よりも往々にしてずつと寛大な條件でさへも、小作人に對する彼等の現關係を持続するだらうと云ふことも豫期してゐたのである。私は一八六八年の會期勿々、マグワイヤ氏の決議案の討議の際になした愛蘭に關する演説の中で、このことその他に澤山の説明とを加へて置いた。この演説の校閲済みの速記録は、フォートスキュー氏の提案に對する私の演説と一緒に、愛蘭で出版された（尤もそれは私が出版したのではなかつたが、私の承諾を経てのことであつた）。

私は今一つ極めて重大な公共義務を、この年月の間議院の内外に於て履行しなければならぬことになつてゐた。西印度ジャマイカに於ける擾亂は、最初は官憲の不當なる行爲に依つて激發されたものであるが、それが憤激と恐慌の爲めに、遂に計劃的反亂にまでも充じて來た。そしてこれが動機乃至は口實となつて、軍隊の暴行や所謂軍法會議の宣告を以つて、幾百の無辜の民を殺戮するに至り、それが一時的擾亂の鎮定した後數週間も續いた。そしてそれには財物破壊の幾多の兇暴なる行爲や、男子には固より婦人にまでも加へた警打や、一般に兵火が一度放たれた時に

常に行はるゝ所の獸的暴行の展開などが伴つたのである。處が當時英國では、かうした罪惡を犯した者が、曾て長い間黒人奴隸制度を支持してゐた人達と同種類の人達から辯護され寧ろ賞讃されてゐた。そして最初の程は、この官權の濫用——若しこれが他國の官憲に依つて行はれた時には、恐らく英國人は言葉にも云ひ表はせない程の憎惡を感じたに相違ないが——それ程までも忌はしき官權の濫用に對して、英國國民は遂に一言の抗議すらもなさず黙過すると云と汚名を被らんとしてゐるかの如くに思はれた。併し暫らくしてから公憤が燃えて來た。即ち「ジャマイカ委員會」と云ふ名稱の下に一つの民間の團體が組織されて、事情の許す限りの調査と行動とを爲すことになつた。そして加入者が國內到る處から殺到して來た。私はその頃海外にゐたのであるが、このことあるを耳にするや、直ちに入會を申込み、歸國してからは直接種々の行動に参加した。黒人に對する公正と云ふ考慮も無論重大ではあつたが、この問題は單なる黒人に對する公正と云ふこと以上に遙かに憂慮すべきものがあつたのである。問題は、抑も英國の屬領は、——結局は恐らく英帝國そのものは、法律の治下にあるべきか、それとも軍閥專制の治下にあるべきかと云ふことである。即ち英國臣民の生命身體は、狼狽爲す所を知らざる總督乃至他の官吏が、その職權に依つて所謂軍法會議なるものを構成せしむる所の二三の士官——彼等が如何に未熟無經驗であらうとも、輕率兇暴であらうともおかまひなく構成せしむる所の二三の士官の手に委せら

るべきものかどうかと云ふ問題なのである。この問題を決定するには、裁判所に告訴するより外はない。そこで委員會はさうした訴訟を提起することに決定した。然るにこの決定の爲めに、委員會の議長が更迭することになつた。と云ふのは、時の議長チャールズ・バックストン氏は、エヤー總督及びその重立つた屬僚を刑事裁判所に告訴することを以つて、必ずしも不當とまでは考へなかつたが、それは策を得たものではないと考へてゐた。それにも拘らず、多數出席してゐた委員會の總會は、彼れに反對してさうすることに決議したので、バックストン氏は吾々の主義の爲めには依然活動を續けるが、委員會からは脱退することになつた。そして私としては全く思ひ掛けもないことであつたが、私が議長に推されて選舉されたのである。その結果、下院に於てこの委員會を代表することが私の義務となり、或る時は政府に向つて質問の矢を放ち、或る時には又私自ら個々の議員から發せられた多少癢に障はる質問を受ける身ともなつた。併しその中でも殊に一八六六年の會期に於てバックストン氏が火蓋を切つた重要な討議に於て、會を代表して演説した。その時の演説は、恐らく自分では議會に於ける私の演説の最良のものとして選び度いものである。二ヶ年以上にも互つて、私達はこの戰を戦ひ續けた。そして法律上吾々に開かれてある有らゆる手段を盡して、諸所の刑事裁判所に持ち出した。英蘭で保守黨の最も優勢な州の一つに於ける法廷は、私達の訴訟を却下した。併しパウ・スツリート法廷ではより多くの成功を

贏ち得た。そこでは高等法院判事長サー・アレキサンダー・コックバーン氏に氏の有名な説示(譯註、これは裁判長が陪審官に與へる犯罪處分の示意である)を述べる機會を與へたのである。その説示に於ては、裁判官の説示の權限内に於てそれを決定し得る限りに於ては、この問題の法律的方面は自由の勝利と云ふことに決定したのである。併し私達の成功はこゝで終を告げることになつた。と云ふのは、高等刑事裁判所の陪審官は、私達の告訴狀を却下して、この事件が公判廷に出づることを妨げたからである。云ふまでもなく、英國の官吏を、黒人や黒白混血人に對して行はれた權力濫用の康を以つて、刑事法廷に引張り出すことは、英國の中流階級の人達に歓迎せられる行動でないことは明かであつた。併し私達は、少くとも我國に、虐げられたる者に代つて正義の審判を獲得する爲めに、法律の許す限りの手段を盡さうと決意せる一團の人士の存在せることを示すことに依つて、私達の出來得る限りに於て、我國の品位の賤おとしをしたのである。私達は我國最高の刑事裁判官の口から、我國の法律は、私達がさうあるべきものと主張してゐた通りのものだと言ふ權威ある宣言を聞くを得たのである。私達は、今後或は誘はれてこれと同様な犯罪を敢てせんとする處ある人達に對して、彼等はよし事實に於て刑事裁判官の有罪の判決を免れ得るとしても、それを免れる爲めには、少くとも多少の面倒と費用とを負担する覺悟がなければならぬと云ふ力強い警告を與へたのである。従つて植民地の總督や、その他の官憲は、將來はかゝる極端な行動を慎まうとする心掛

けを相當有つ様になるであらう。

● 委員會の最も活動的な會員の中には、凡て自由の諸原則を主張することに於て、何時も忠實で力強かつた代議士ビー・エー・テイラー氏、オールドウィン・スミス氏、フレデリック・ハリソン氏、スラッタ氏、チェームロフゾー氏、シェーン氏及び委員會の名譽幹事チエソソン氏などがあつた。

好奇心から、私はこれ等の訴訟手續の進行中に受取つた所の悪口を書いた手紙の見本を少し取つて置いた。その殆ど全部は匿名であつた。これ等は皆本國の民の一部の残忍なる者が、ジャマイカの残忍行爲に對して共鳴した同感の證據品なのである。その種類は、軟かい所では粗野な戯談や漫畫の手紙から、猛烈な所では暗殺の脅迫狀にまで及んでゐる。

この他重要事項で、私が積極的に努力はしたが、社會の興味を餘り惹かなかつたものの中で、二つだけは特に一言する價值がある。その一つは一八六六年の會期のもう終ると云ふ頃に提出された亡命者引渡法案を否決する運動に、獨立の立場にある自由主義者數名と提携して參加したことである。この案に依れば、明白に政治犯を理由としての引渡は、正當と認められないが、政治的亡命者にして、外國政府から凡て反亂の企圖に必然的に伴ふ行爲の康を以つて、告發された場合には、彼等が反逆を企てたその政府の刑事裁判に於て審理を受ける爲に、彼等は當該政府に引渡される事になる。斯くしてこの法案は英國政府をして、外國の專制主義の報復的行爲に於ける

共犯者たらしむるものである。この提案は遂に破れたのであるが、その結果として、亡命者引渡諸條約全體に互つて精査し、その結果を報告すべき任務を帯びた特別委員會が任命されることになつた（そして私もその委員の一人に任命されたのである）。この委員會の結果として、私が議員の位置を去つて後、議會を通過した亡命者引渡條令に於ては、凡て外國から引渡を要求された亡命者には、その問はれてある犯罪が果して眞に政治犯であるか否かを立證する爲に、先づ英國の裁判所に於て審理を受くべき機會が與へられる事になつてゐる。如斯くして歐洲の自由主義は一大不幸に陥ることから救はれることになり、我國も亦一大罪惡を犯すことから救はれることになつたのである。今一つの話は、一八六八年の會期に於て、ヂスレリー内閣の贈收賄法案に關して、進んだ自由主義者の一團が戦ひ續けた論戰であつて、私はそれに積極的に參加して、大いに活躍した。私は、この問題に就いて自分自身でも大いに考へて見たのであるが、またその細目に互つて最も慎重に研究してゐた人達——ダヴリュー・デー・クリスチー氏、上級辯護士プリンダ氏、チャドウィック氏等數氏とも協議した。そして直接間接に様々な方法で行はるゝ贈收賄を防ぐ上にこの法案を眞に有效ならしむる様な修正や追加條項を作成しようとしたのである。と云ふのは、これをしなければ、改正選舉法の爲めに、買收行爲が減少するどころか、却つて大いに増加するかも知れない、否、それは必ずしも一片の杞憂ではなかつたからである。それから又私達

は、この法案に、所謂合法的選舉費と云ふ弊害ある負擔の輕減策を挿入しようとして云ふ目論見を立てた。吾々の爲した幾多の修正の中で、その一つは、選舉事務官の經費を、候補者の負擔とせず、地方税の負擔にしようとして云ふフォーセット氏の修正であつた。その二は、有給選舉運動員を嚴禁し、且つ有給選舉事務員の數を各候補者一人につき一名宛に制限することであつた。その三は、買收の防止策並びにその課刑の適用範圍を擴張して、地方自治體の議員選舉にも及ぼすことであつた。これが實は國會議員選舉に於ける贈收賄の豫備的練習所であるばかりではなく、何時でもそれに對する言ひ逃れの口實を與ふるものである事は、周知く人の知る所である。然るに保守黨内閣は、彼等が提出した法提の主要條項、即ち選舉違反の裁判權を下院から裁判所へ移管する規定が（これには私も賛成の投票をし且つ演説までもしたのであるが）、一旦議會を通過したとなつると、その他の改善案に對しては、斷然として反對して來た。そして最も重要な提案の一つであるフォーセット氏の案が、事實多數を贏ち得た後、保守黨は黨の全軍を糾合して、その條項を第三議會に於て削除し去つたのである。院内の自由黨は、この國民を正直に代表せしむる上に必要缺くべからざる條件を獲得せんとする企圖に對し、その黨員多數者の行動が遂に何等の援助をも與へなかつたことの爲めに、非常にその名譽を傷けたことになつたのである。院内に多數を擁する彼等を以つてすれば、凡ての修正案も、更に又彼等に一層の名案があるとすればそれを

も、優に通過せしむることが出来た筈である。然るに時はもう最終の會期の終に近付いてゐた。各議員は目睫の間に迫れる總選挙の準備に取り掛らうと焦慮してゐた。尤も中には、反對候補が既に自分等の選挙區で運動を始めてゐたのにも拘らず、立派な態度で依然その職責を盡してゐた人（例へばサー・ロバート・アンストラザー氏の如き）もあつたのであるが、彼等の大多數は、自己の公共の義務よりも、自己の選挙の利害を重んじてゐたのである。加之自由主義者の多數は、贈賄防止法は、社會一般の興味を無記名投票制から轉向せしむるに過ぎないと考へて、これに對して無關心な態度を採つてゐた。蓋し彼等は無記名投票制を以つて、充分にして且つ唯一の匡正策だと看做してゐたのであるが、私はこの考は非常に間違つてゐることが體て明かになるであらうと期待してゐる。私達は數夜に互つて極力戦ひ續けたのであるが、これ等の諸原因の爲めに、私達の戦は全然不成功に終つたのである。そして私達が容易に行はれない様にしようと思つてゐた從來の慣行は、新選挙法の下に行はれた最初の總選挙に於ては、これまでよりも一層廣汎な範圍に互つて行はれたのである。

ヂスレリー氏の選挙法改正案に關する一般の討議では、私は前に云つた演説を一回やつただけであつた。併し私はこの法案の討議を機會として、今後代議政體に加へらるべき二大改善策を、議會と國民との前に正式に提案したのである。その一つは人的代表制である。それは比例代表制

と云つても同様に適當な名稱である。私はヘヤー氏の案に基いて説明と議論とを混へた一場の演説を試みて、この制度に就いて下院の考慮を促したのである。それからその後この案に代はるべき極めて不完全な代案の支持に積極的に活動して、遂に議會をして、一部少數の選挙區に於て、この代案を採用するに至らしめたのである。この貧弱な一時の間に合せの案は、殆ど何の取柄もないものではあつたが、それでもこの案の成立は、總てそれを以つてしては到底匡正し得ない弊害の存在することを、兎に角部分的に承認することにはなつたのである。さうしたつまらない案であつたのにも拘らず、この案も矢張り、眞に優良な方策と同様に、間違つた立論を以つて攻撃され、従つてそれと同様な原則に立つて辯護さるべき必要があつたのである。そしてこの代案を一部少數の選挙區に於ける代議士選挙に採用したと、その後ロンドン市學務委員の選挙の際に、所謂累加投票制なるものを採用したことは、代表者選出に於て、比例的分前を受くべき平等な要求權が凡ての選挙人にあると云ふ主張が、單に理論上の一論題に過ぎなかつたものから、實際政治上の一問題に轉化する時期を、一層促進することになつたと云ふ悦ぶべき結果を生ずるに至つたのである。

この人的代表制に關する私の意見の主張が、何等かの相當大きな、乃至は限に見える程度の實際上の結果を生じたとは、敢て云ひ得ないのであるが、今一つ、選挙法改正案の一修正案として

私が提出した動議はさうではなかつたのである。而もこの動議は前のものに較べると遙に重要な、恐らく私が議員の資格を以て行つた奉公の中で眞に重要な唯一のものであつたらう。即ちそれは、議員選舉權を男子のみに限定すると解釋されてゐる文字を削除し、斯くして戸主として乃至はその他の事項に就いて、男子に要求されてゐる資格と同一の資格を所有してゐる凡ての婦人にも、政權を與へんとする動議であつた。婦人が、選舉權の大いに擴張されんとする時に際して、敢て參政權の要求を爲さなかつたならば、それはその要求權を全然放棄した事になるであらう。この問題に關する運動は、一八六六年に始つたもので、當時私は相當多數の名流婦人の署名した婦人參政權要求の請願書を提出したのである。併し當時は未だ、この提案が下院に於て少數の散票を得得する以上の好結果を示すかどうか實は疑問であつた。そして討論の際には反對派の辯士の論據の薄弱なる事が如何にも際立つて見えたのであるが、愈々討論終結後、動議に贊成の票數が七十三票——對偶棄權者(譯者註、反對派の者と申合せて相殺の意)及び投票計算係(譯者註、英國下院に於ては代議士中より四名を選んで投票の計算をする)を加へると優に八十票以上になる——に達したのを見た時には、敵も味方もその意外なるに驚くと共に、吾々は大いに意を強うしたのである。更に、贊成投票者の中にブライイト氏があつた所から一層力附けられることになつた。氏は豫ねてこの提案には公然不贊成を表明してゐたのであるから、詰りこの事實は、討論が彼れを動かしたものと云はざるを得ないのである。……

.....

これで私は、議會に於ける私の行動の中で記憶して置く値打のあるものは皆述べ盡したと信ずる。併しこれ等の事柄を、よし残りなく數へ上げたとしても、それだけでは未だ、その期間中に私の遣つてゐた仕事、殊に手紙の往復に取られた時間がどれ程であつたかと云ふことを髣髴せしむるには足りないであらう。私が未だ議會に選出されない何年も前から、私は未知の人達から絶えず手紙を買つてゐたのである。それは大抵哲學者の一著作家としての私に宛てたものであつて、論理學や經濟學に關する問題に就いて、或は難問題を出したものと、或は考を述べたものとかであつた。これは苟も經濟學者として名を知られてゐる人達には共通のことだらうと思ふが、私は人々が通貨制度の或る人爲的な改造に依つて遍ねく富裕となり幸福となるの途を示さうと絶えず努力してゐる所のあの色々な淺薄な理論や、馬鹿らしい提案を示されたのである。若し手紙の筆者に多少理解力の徴候があつて、誤を正してやるだけの價值ある様に思はれた時には、私はその誤を指摘してやるだけの勞を吝まなかつたのであるが、それも結局は私の手紙の分量が増して來て、已むを得ずさうした人達をも極めて簡單な返事で突つ離さなければならなくなつたのである。併し私の受取つた通信の中には、これ等のものよりも一層注意に値するものも多かつた。殊

中には私の著述の中にある枝葉の點に於ける見落を指摘してくれたものなどもあつて、お蔭でそれを訂正することが出来たのである。かうした類の通信は、私の書く題目、殊に形而上學的題目の多くなるに従つて、自然増加して來た。然るに私が議員になると云ふと、一身上の不平に就いて、或は公共事務に關した事でも、それが私の智識や職業と如何に縁遠いものであらうがおかまひなく、有りと有らゆる問題に就いて、手紙を買ひ始めたのである。尤もかうした重荷を私に負はせたのは、私を選擧してくれたウエストミンスター^{Westminster}の選擧人等ではなかつた。彼等は曾て私が議員たることを承認したときの了解を非常に忠實に守つてゐてくれたのである。尤も時折には、二三の無邪氣な青年から、小役人の口を世話して貰ひ度いとの依頼を受けたこともあつたが、それもほんの少數であつて、且つ筆者が如何に單純で無智であるかと云ふことは、かうした依頼が、孰れの政黨が廟堂にあらうと、殆ど同じ様に來た一事を以つてしても明かであつた。その時の私の常套的返事は、どの内閣に對しても世話を頼むことは、私が選擧された主義に反すると云ふのであつた。併し概して云へば、私の選擧區程私に手数をかけなかつた選擧區は全國に先づないと云へよう。併し全體としての手紙の往復は、次第に分量が増して、到底堪へ切れない程の負擔となつたのである。

議員在職中、著述家としての私の仕事は、勢ひ閉會期間に限られてゐたのである。その期間に、私は(前に掲げた愛蘭に關する小冊子の外に)「ブラトール論」を書いた。これは「エヂンバラ」評論で公にして、後「評論と論策」の第三卷に收めてある。それから聖アンドルー大學の學生が私を總長の榮位に選擧してくれた時、慣習に従つて、同大學學生に對して就任演説をした。この講演の中で私は、高等普通教育リベラル・エデュケーションに屬するやうな學科目の效用と影響、及びその影響を最も有益ならしむる爲めに採るべき方法に關して、豫ねてから考へ貯めてあつた多くの思想や意見を發表した。私の主張した論旨は、古い古典的學科も新しい科學的學科も、等しく高度の教育的價値を有することをば、それを普通主張する者の所論よりも更に強い證據に立つて立證し、そしてこれ等二系統の學科が互に相扶くるものではなく、却つて互に相排擠するものと看做されてゐるのは、一つに普通の教授の愚劣無能なるが爲めに過ぎないことを主張するにあつた。想ふにこの所説は、實に幸にも既に國家の高等教育機關に始つてゐた改善を援用し刺戟することになつたばかりでなく、又最高の心的教養の要件に關して、高い教育を受けた人々の間にすらも往々に見出される觀念よりも一層正しい觀念を普及せしむる上に與つて力があつたと信じてゐる。

又この時代のことであるが、私は父の名著「精神現象の分析」に、その中に展開してある學說を科學及び哲學の最近の進歩に伴はしめる様な註を附して新版を出し、以つて哲學と父の靈とに

對する義務の一端を盡さうと試み始めた（そして私が議會を去つて後間もなくそれを完成した）。この企ては人と共同であつた。即ち心理學上の註は、ベイン氏と私とが殆ど等分に施し、事の序手に時々起つて来る哲學史上の問題には、グロート氏が若干の貴重なる寄與をなし、それからこの書物の書かれた當時の不完全な言語學的智識の爲めに生じた缺陷は、アンドルー・フアインドレイター博士が補筆してくれたのである。この「分析」はもと／＼、哲學的思辨の潮流が、經驗と聯想の心理學とは全然反對の方向に走つてゐた時代に公にされたものなので、直ちにそれに相當するだけの成功を贏ち得なかつたのである。尤もそれは多くの個々の人達の心には深い印象を興へて、それ等の人達を通して、吾々が現在利益を享けてゐる聯想心理學の發達に比較的都合よき空氣を醸成する上に大いに貢獻する所があつたものである。これは經驗哲學の教科書には極めて適當してゐるので、唯だそれに同一學派の最近の研究の結果を加へて、内容を豊富にし、所に依つては修正を施すだけで、それは現にあるが如く、ベイン氏の名著と相並んで、分析心理學に關する系統的著述の最高位に位する様になることが出來たのである。

一八六八年の秋、改正選舉法を通過させた議會は解散を命ぜられた。そしてウェストミンスター一區に於ける新選舉に於て、私は落選したのである。これは私も案外とは思はなかつたし、又私の後援者の重立つた人達も意外とは思はなかつたと信じてゐる。尤も彼等は選舉の直前數日間は、

それまでよりも樂觀的にはなつてゐたのである。私が抑々の初めから一度も當選しなかつたと云ふのならば、それは敢て説明の必要もない事であらう。併し好奇心を變ることは、私が第一回は當選したことである。否、その時には當選して置いて、第二回目には落選したことである。併しこれは不思議でも何でも無い。詰り私を落選させようとする努力が、第一回の時よりは第二回目の時には遙に大きかつたからである。先づ第一に、保守黨内閣は今や死活の腕きをなしてゐた。彼等に取つては、如何なる政戦に於ける勝利でも比較的重要性を帯びてゐたのである。それからまた保守黨に共鳴してゐた人達は、皆私一己に對して、前回よりは遙かに強い反感を有つてゐた。第一回目には私に好意を寄せ、乃至は無關心であつた多くの人達も、私の再選には猛烈に反對したのである。私は政治に關した論文の中で、自分が民主主義的意見に於ける弱點を意識してゐることを示してゐたので、保守主義者の中には、私が民主主義の反對者として立つ見込を付けてゐた者もないこともなかつたらしい。即ち私には問題の保守的な方面を見る能力があつたのだから、彼等は直ちに、私を以つて彼等と同じく問題の今一つの方面は一切見る能力がないものと思ひ込んでゐたのである。而も若し彼等にして私の書いたものを眞に讀んでゐたならば、彼等は、私が民主主義の反對論の中で相當の根據があると思はれたものには凡て充分の價值を認めて後、少しも躊躇する所なく、民主主義に賛成して、傍らそれには、その原則に矛盾せず、而もその不都合

な點を回避するに適した様な諸制度を伴ふべきものであると主張してゐることを悟つたであらう。そしてさうした匡正策の主なる一つは、比例代表制であるが、保守黨員は殆ど誰れも、この點に就いては私を少しも支持してくれなかつたのである。保守黨の有つてゐた期待の中には、私が或る一定の條件の下に複數投票制に賛成意見を發表したことに基いてゐたものもある様に思はれる。即ちデスレリー氏がその選挙法改正案の準備として議會に提出して決議案の一つに出てゐるこの種の提案は、(この提案は一人も賛成者がなかつたので、氏も敢て強要はしなかつたのであるが)、或はこの問題に就いて私が曾て書いた論文に基いて提起されたものかも知れないと云ふ推測も下されてゐる。併し若しさうだとすれば、それは、私が特に複數投票の特權は教育に附屬すべきもので、財産に附屬すべきものでないといふことを條件とし、その上に尙、普通選挙が行はれてゐると云ふ假定の上に立つてのみその特權を是認したと云ふことを忘れてゐたものである。斯様な複數投票が、現在の改正選挙法の與ふる選挙權の下に於ては、如何に全然認容すべからざるものであるかと云ふことは、凡ての選挙人に對して一樣に一票をしか與へてゐない現行法の下に於てすらも、勞働階級の選挙に於ける重力が如何に微々たるものであるかと云ふ事實に依つて、さもなければそれを疑ひ得る人々にさへも明かに立證されてゐる所である。

斯くして私は、保守黨の連中や、多數の保守的自由黨の一派に取つて、從來よりも一層嫌はれ

者となつてゐた上に、私が議會に於て執つた途は、決して一般自由主義者をして敢て私の支持に熱中させる底のものではなかつたのである。私が論戰の第一線に立つた場合の如何に大部分が、私と自由黨員の大抵の者とが意見を異にしてゐた問題、乃至は彼等が殆ど關心を有つてゐなかつた問題に就いてであつたか、又私の執つた方針が、彼等をして自分達の意見發表の機關としての私に、大なる價値を附せしむる様なものであつた場合が如何に少かつたか、と云ふことは既に述べた通りである。加之、私は多數者の胸の中に、私に對する個人的偏見を起させる様なことを色色やつた。多くの人は、彼等の所謂エヤー氏(譯者註、ジャマイカの總督)の迫害なるものに依つて憤慨してゐた。更に私がブラッドロー氏の選挙費に寄附をしたことに對しては、一層憤慨してゐたのである。元來私は自分自身の選挙に對しては一文でも費用を出すことを拒絶し、その經費は凡て他人に支拂つて貰つただから、私とその當選を希望してゐる候補者であつて、選挙費に缺乏してゐる場合には、今度は私の方で金を寄附すべき特別な義務がある様に私は感じたのである。それで私は殆ど凡ての勞働階級の候補者に寄附金を送つた。就中ブラッドロー氏に送つたのである。彼れは勞働階級の支持を得てゐた。私は彼れの演説を聞いた時に、彼れが有能の士であることを知つた。彼れはマルサス主義及び人的代表の如き重要な二大問題に就いて、當時民主黨の間に行はれてゐた意見に對して、敢然として反對の立場に立つて、自ら決して煽動政治家、媚俗政客にあらざる

ことを立證してゐたのである。かうした類の人物、即ち勞働階級の民主主義的感情に共鳴し乍らも、政治問題に独自の判断を下し、民衆の反對に抗してまでも自己の信念を主張するだけの勇氣ある人物こそ、實に議會に於て必要な人物だと私には思はれたのである。そして私は、ブラッドロー氏の反宗教的意見は（よし彼れはそれを發表するのに穩當を缺いてゐたとは云へ）、氏を排斥すべき理由とはならないと考へてゐた。併し若し私が勝手に唯だ自分の再選の利害のみを考慮し得るものであるとすれば、氏の選挙に金を寄附するなど云ふことは、極めて思慮のない振舞だと云はなければならぬ。そして豫想通り、私のかうした行爲は、ウエストミンスターの選挙民を煽動して私に反對せしむる爲めに、正當にも不當にも、有らん限り利用されたのであつた。私が第一回には當選して第二回に落選したのは、これ等の様な原因に更に私の相手の保守黨候補者の側で、何時もの如く金力やその他の勢力を無遠慮に用ゐたのに、私の側ではさうした武器を少しも用ゐなかつたことが加つた爲めである。選挙の結果が知れるや否や、私は他の選挙區、主に郡部の選挙區から立候補を勧誘した申出を三つ四つ受けた。併しよし當選が充分期待され得るとしても、而かも何の失費もなしに期待され得るとしても、私はもう私的生活に歸へるの心安さを斷念する氣にはなれなかつた。私は自分が選挙民に容れられなかつたのを恥辱だと感ずべき理由は少しもなかつたのである。そしてよし私にさうすべき理由があつたとしても、さうした感

情は、有らゆる方面の人士から、殊に議會に於ける自由黨員の中で、私が常に行動を共にしてゐた人達から際立つて受けた遺憾の意を表はした幾多の言辭の爲めに優に消し盡されたであらう。その頃から後は、爰に記して置く必要のあることは殆ど起らない。私は又元の仕事に歸へつて、南歐の田園生活を味ひながら、年に二回は倫敦の近郊で數週、時には數ヶ月を送る身となつたのである。爾來私は色々の論文を新聞雜誌（主として友人モーレーの「隔週評論」）に書き、偶には公會の席で演説をやり、數年前に書いた「婦人の隷従」に若干の加筆をして出版し………他日の著書の材料の準備を始めてゐた。これ等の著書に就いては、若し私がそれを完成するまで生き永らへてゐたならば、もつと詳しく述べる時があらう。それで、今の處、この回想録はこの邊で筆を止めて置く。

12909

昭和三年十二月十五日第一刷發行
昭和二十三年五月十五日第九刷發行

定價六拾圓

ミル自傳



譯者 西本正美

編輯者 東京都千代田區神田一ツ橋 岩波書店內
布川角左衛門

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者 長野市岡田町一七六番地
田中重彌

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三

岩波書店

會員番號A一〇九〇〇四號

大日本法令印刷株式會社印刷・製本

讀書子に寄す

岩波茂雄

— 岩波文庫發刊に際して —

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。書ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと稱する全集が其編纂に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を驚愕して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する異態解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の業務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのゆるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

終

